

目 次

学会長ご挨拶	2P
学会長ご紹介	4P
インフォメーション	5P
第1日目 プログラム	7P
研究発表会 抄録集	9P
全演題一覧 タイムテーブル	10P
ROOM 1 抄録	11P
ROOM 2 抄録	31P
ROOM 3 抄録	51P
ROOM 4 抄録	71P
ROOM 5 抄録	91P
第2日目 プログラム	110P
シンポジウム	
～コロナ禍の身体と心のメンテナンス～	111P
あとがき	118P
チームケア学会運営スタッフ	119P

会長挨拶

チームケア学会も無事に第6回の全国大会を開催する運びとなりました。これも関係者の皆様の熱意とご尽力の賜物と感謝いたしております。

昨年の第5回全国大会は、新型コロナウイルス感染症のリスクを鑑み、例年の会場での研究発表ではなく、WEBを使用したリモートでの実践報告会として開催しました。そして、大会テーマを「新型コロナウイルス感染対応の情報共有」とし、報告会の主目的をコロナ感染のリスクに対処する為の有用な情報交換に置き、感染ケアに関する様々な事例を発表・共有する場としたことで、大きな成果を収めたと思います。

これまでの大会テーマを振り返ると、第1回「なぜ「ケア」であり、「チーム」であるのか」、第2回「当事者としての高齢者の方の「生きる覚悟」」、第3回「生きるサイドを反対から見た「あなたはどんな最期を迎えたいですか」」、第4回「人生100年を生きるための「リテラシー」」でした。

「リテラシー」とは「ある分野における知識や機器を理解し、活用できるようになること」という意味で使われています。これを、チームケアの領域で考えると、長生きすることの結果を予測し、将来のリスクを低減するために、どのようなリテラシーが必要かということについて考えていくことであると思います。つまり、高齢になると言うことはあらゆる意味で機能が低下していくということであり、それに伴うリスクを認識する必要があります。そのリスクを低減するためには、健康などについてのリテラシーを高め、時として、楽を避けて（自らを甘やかさない）、自らに負荷をかける（自己規律）ことも必要になるかと思います。このように、「人生100年を生きるためのリテラシー」というテーマは、多面的に議論を行うべき奥の深いテーマであると思います。

そこで、第4回では、「食べること」をサブテーマとし、食と口腔ケアについての議論をおこないました。そして、本年度の第6回大会では、継続して「人生100年を生きるためのリテラシー」をメインテーマに置き、サブテーマを「身体と心のメンテナンス」として、高齢化というプロセスの中で、心と体のバランスを如何に維持し、健やかな生活を過ごせる「健康寿命」を如何に伸ばせるかについて考えてみたいと思います。

「身体と心のメンテナンス」で言うメンテナンスとは、お手入れでもケアでもなく、現状の維持でもなく、避けられない機能低下を前提に如何に機能のバランスを維持させ続けるかを考え、実行することです。それは古い車を動かし続けることに似ています。低下していく機能のバランス維持には、薬も医療・介護も重要ですが、当事者を含めてチームケアに関わるメンバーが身体と心のメンテナンスを実践する意識を強く持つことが重要になります。そのために、チームケアに関わる全員が健康（ヘルス）に関わる広範囲のリテラシーを向上していく努力をする必要があります。この努力では、複利を意識する必要があります。毎日の積み重ねが重要になることを理解する必要があります。ガンジーの名言と言われる「明日死ぬかのように生きよ。そして、永遠に生きるかのように学べ。」を心する必要があると思います。

ここで、なぜ、学会名でもある「チームケア」であるかを振り返ってみたいと思います。
なぜ「チームケア」なのでしょう。世界の先鞭をきり、かつ、例を見ない未曾有の超高齢化を急速に迎えてつつある日本社会において、高齢者の「ケア（気にかける）」を「チーム（目的遂行集団）」という観点で考えることが非常に重要であるからです。「介護」とは違い、「ケア（気にかける）」は、より包括的かつ双方向的な概念です。また、医療的な意味では、「ケア（気にかける）」という概念は、これまで機能してきた支配的な「キュア（治す）」という概念の相対化をもたらすものです。超高齢化社会を迎える中で、この医療概念の転換は重要であると思います。

次に、「チーム」についてですが、一般的に使われる「多職種連携」では、被介護者を中心に据えて、既定の関係者が、医師筆頭の階層関係性を念頭に、「連携すること」に主眼が置かれています。そして、連携をすれば、課題は解決すると言う前提です。一方、「チーム」とは、そもそも、目的遂行のためにスキル意識のあるメンバーが集まるのであり、目的遂行のためには、チームメンバーに既定はなく、階層関係性も念頭には置きません。置くのは各自のスキル（経験）に基づくフラットな貢献です。目的遂行の為に最善の関係性を模索し続けます。この説明で、なぜ「チームケア」という言葉を使ったかをご理解頂けるかと思います。

本学会では、「チームケア」を考える上で、「ケアするチーム」とは何かを各学会員が自発的に模索していかなければならないと思います。その意味で、本学会は、多様性を前提においた、開かれた、実験的な学会であると思います。学会メンバーの方々には、「チームケア」を実践・確立するという「目的」を共有し、「自律」的に活動し、「習熟（プロになる）」を高めて頂ければと思います。それが、チームケア学会の価値を高めることにつながると思います。

緊急事態宣言は解除となり、ワクチン接種は進んでいるとはいえ、十分な進捗ではなく、コロナのリスクが大きく低減していない現状を鑑み、本大会が、オンラインによる2日間の開催となりますことをご理解頂きたいと思います。昨年同様にリモート環境で、このサブテーマが、活発に議論されることを期待しております。

最後になりますが、老化は、私たちの敵ではなく、「老化を克服すべき」で全面的に否定すべきものでもありません。老化を打ち負かすべき敵として捉えれば、高齢者差別を助長するだけでなく、避けられない加齢とともに健康と生活の質を維持・向上させる方法を見失うことになりかねないことを、我々は強く認識する必要があります。これをもって、ご挨拶のめとさせていただきます。

敬具

2021年9月16日

一般社団法人チームケア学会

会長 小笠原 泰

《チームケア学会 学会長紹介》



おがさわら やすし
小笠原 泰

明治大学 国際日本学部 教授

1957 年鎌倉生まれ。

東京大学卒、米国シカゴ大学大学院国際政治経済学修士、経営学修士(MBA)。

マッキンゼー&カンパニーを経て、米国カーギル社ミネアポリス本社に入社。

米国本社および同社オランダ、イギリス法人勤務後、NTT データ経営研究所に入社、同社パートナーを経て、2009 年 4 月より現職。フランスの **Université Toulouse 1 Capitole, Toulouse School of Management** の客員教授を歴任 (2018 年 4 月～2020 年 3 月)。フランスの社会制度や社会保障システムなどを研究する。

研究領域は、グローバル化の中での経営組織文化論およびパワーを中心に据えた技術社会（政治経済）論。近年は、テクノロジーの進歩とグローバル化の中で起きつつあるパワーシフトを念頭において、国家の再定義と社会保障政策を中心に据えた社会システムデザイン再構築に関する研究に力を入れている。

【主な著書】

『CNC ネットワーク革命』（東洋経済新報社 2002 年）

『日本的改革の探究』（日本経済新聞社 2003 年）

『なんとなく、日本人』（PHP 新書 2006 年）

『日本型イノベーションのすすめ』（日本経済新聞社 2009 年）

『2050 年、老人大国の現実』（東洋経済新報社 2012 年）

『わが子を「居心地の悪い場所」に送り出せ』（プレジデント社 2019 年）

Information (学会期間中のご案内)

●研究発表会について

発表は、各事業所より ZOOM での発表となります。

1) 受付について

参加者は事前申し込みとさせていただきます。

法人ごとに参加名簿を作成し、申し込みをお願いいたします。

参加費は、1 名 1000 円です。法人ごとに取りまとめてお支払いいただきます。なお、1 演題でも 2 日間でも参加費用に変わりありません。

2) 会場

事前にお知らせいたします ZOOM の URL からお入りください。

その後、教室ごとにブレイクアウトルームがございますので、ご自分で選択してご入室下さい。

入退室は自由です。

入室時、ミュートにしてお入りいただき、ご発表の妨げにならないようご注意ください

研究発表を行う会場は下記の教室です。

【 ZOOM 1、ZOOM 2、ZOOM 3、ZOOM 4、ZOOM 5 】 計 5 会場

3) 研究発表会の進め方について

1 研究の発表時間及び質疑応答については、以下の時間配分となります

発 表	10 分	発表時間中の移動は、原則禁止とさせていただきます
質疑応答	5 分	

※発表者の皆様は、発表時間の厳守をお願い致します

※4～5 研究発表後、15 分間の休憩がございます

※各研究の発表時間につきましては P10 のタイムテーブルをご参照ください。

4) 研究発表会中の留意事項

- 参加中は、携帯電話・スマートフォンをマナーモードに設定してください
- 学会を円滑に進めるため、決められた時間はお守りください
- ミュート・ミュート解除、ビデオオン・オフ、マイクの設定、音量操作など最低限の ZOOM での操作が可能な方を、お近くに配置してご参加ください

●アンケートについて

チームケア学会終了後、アンケートのご提出をお願いいたします。

下記の QR コードから、または配信いたしました URL からグーグルアンケートでお答えください。ペーパーでの回答は行っておりませんので、ご協力お願い申し上げます。



1 日目



2 日目

●チームケア学会 概要

■正式名称 : 一般社団法人チームケア学会

■創立年月日 : 平成 28 年 11 月 25 日

■目的

チームケア学会では、保険・医療・福祉にかかわるあらゆる職種の学習、研究活動を支援し、学識経験者並びに各関連機関との情報交換、交流、連携を通じて、医療・ケアの質の向上に寄与することをめざします。

■学会ロゴ

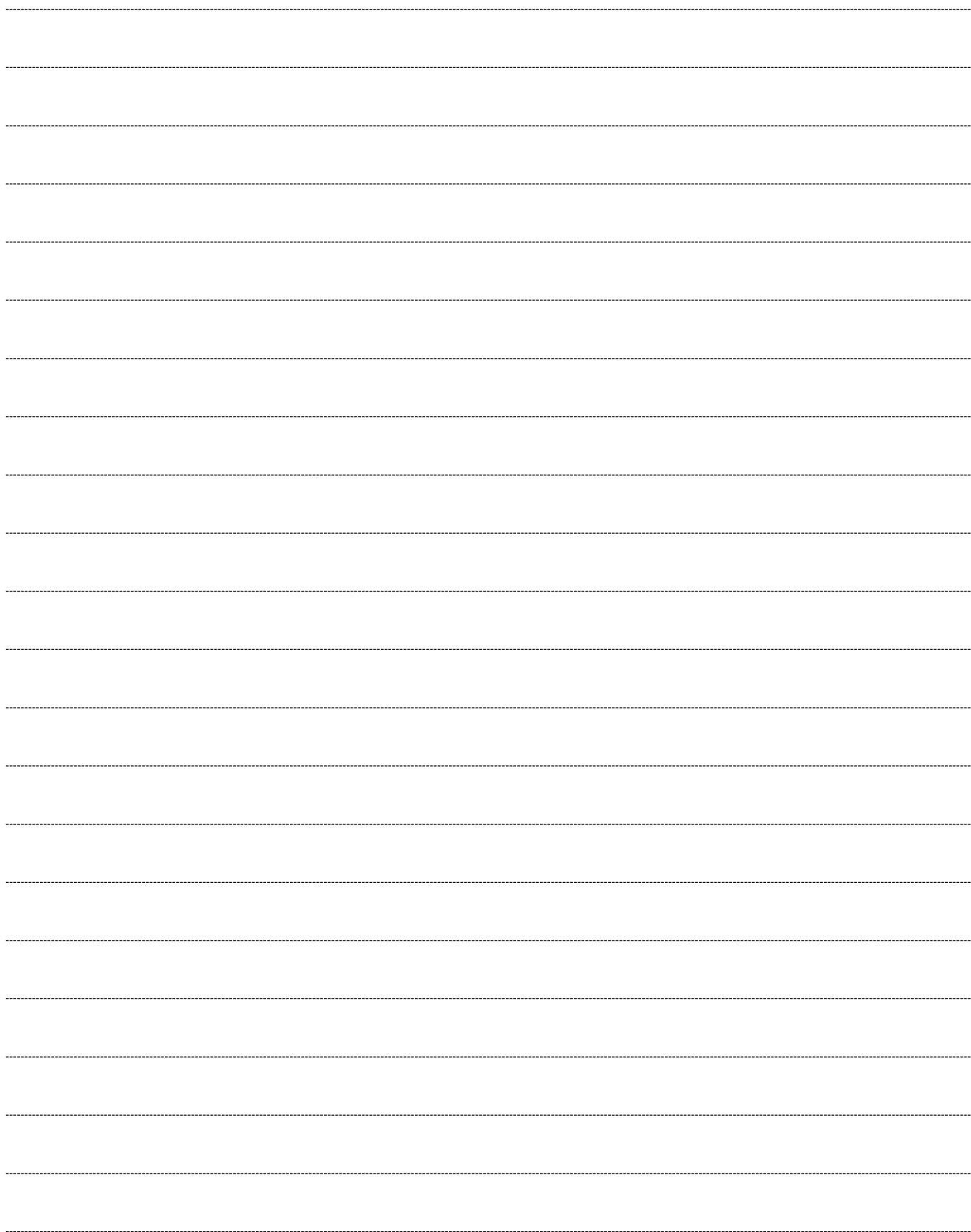
「チームケア学会」を英語表記した際の「Team Care Society」の頭文字「TC」をモチーフにしています。横に傾けると車いすの絵になります。



2021 年度 チームケア学会 第 1 日目 プログラム

開催日 : 令和 3 年 9 月 16 日 (木)

時間	プログラム
8 : 30	受付開始
9 : 30	開会 健康倶楽部 石部 勉
9 : 35	オリエンテーション NPO 福原 正徳
9 : 40	学会長挨拶 チームケア学会 学会長 小笠原 泰 (明治大学教授) * 各会場へ移動 (ブレイクアウトルームを各自選択して入室)
10 : 00	研究発表開始 『 第 6 回チームケア学会 』 85 演題 ※発表 10 分 質疑応答 5 分 会場移動 5 分 ※各部屋の発表順は P11 のタイムスケジュール参照
15 : 45	各教室の総評 ・教室 1 小松学会理事 ・教室 2 太田学会理事 ・教室 3 佐藤学会理事 ・教室 4 上野こやまケア運営委員会委員長 ・教室 5 永田 ISO 統括管理責任者
16 : 15	1 日目の所感 湖山医療福祉グループ代表 湖山泰成
16 : 45	1 日目 閉会 1 日目アンケートをお願いいたします
16 : 50	事務連絡 NPO 福原



研究発表会

抄録集

9 月 1 6 日 (木)

10:00～15:45

研究発表会 タイムテーブル

ROOM		ROOM1	ROOM2	ROOM3	ROOM4	ROOM5
テーマ		リハビリ	食事	看取り	教育・感染	排泄・職種連携
1	10:00~10:15	法人名 株式会社 テイクオフ サービス形態 地域密着型(小規模)	医療法人社団 藤友五幸会 入所(老健)	社会福祉法人 カメリア会 入所(特養)	社会福祉法人 狭山公樹会 入所(特養)	株式会社 テイクオフ 地域密着型(小規模)
		題名 お客様の言葉により添ったチームでの取り組み	お客様の希望を叶える為の第一歩 ～お誕生日御膳～	自宅での看取りの支援とその実現へのプロセス	お客様が安心して暮らせる施設にしたい ～ガチな事故防止委員会の挑戦～	尿もれ改善の取り組み
2	10:15~10:30	法人名 株式会社 日本ライフデザイン サービス形態 通所	医療法人 北辰会 入所(病院)	社会福祉法人 苗場福祉会 入所(特養)	医療法人社団 百葉の会 入所(特養)	医療法人社団 藤友五幸会 入所(老健)
		題名 運動の大切さ ～楽しく生きていく為に～	みらいあグループ内託児所の食事、おやつに対する取り組み	みんなで乾杯したい。 ～看取りケアからの復活～	「されて嫌なことをしない」「してさしあげたいことをする」ケアの取り組みと職員の変化	快適な生活を過ごしていただくために ～気持ち良い排泄を目指して～
3	10:30~10:45	法人名 株式会社 日本ライフデザイン サービス形態 その他(福祉用具貸与)	社会福祉法人 日翔会 入所(特養)	医療法人社団 百葉の会 入所(有料)	社会福祉法人 湖成会 入所(特養)	医療法人社団 平成会 入所(有料)
		題名 住み慣れた自宅で安定した生活を続けるために	食欲不振解消 ～亜鉛の力で食事摂取量アップ!!～	意思疎通困難な方の看取りケア ～「食べたい」想いを汲み取る～	個人のスキル向上と統一したケア ～自らが百恵の郷で介護を受けたいと思う為に～	全失語から中等度運動性失語への移行 ～無為・無欲状態からの脱却～
4	10:45~11:00	法人名 社会福祉法人 草加福祉会 サービス形態 通所	医療法人社団 ひがしの会 地域密着型(小規模)	医療法人社団 百葉の会 通所	社会福祉法人 湖星会 通所	医療法人社団 緑葉会 地域密着型(グループホーム)
		題名 コロナに負けるな! 踏み台昇降!	口腔ケアによるQOLの向上について	デイサービスで叶えることが出来る看取りケア	デイサービスでお客様に楽しんで頂く為に ～コロナ禍での取り組み～	皆様と一緒に楽しく食事をさせて頂く為に ～より良い姿勢を取り戻したい～
11:00~11:15		休憩(15分)				
テーマ		職種連携・睡眠	リハビリ	業務改善	看取り・認知症	感染
5	11:15~11:30	法人名 株式会社 日本ライフデザイン サービス形態 地域密着型(小規模)	社会福祉法人 苗場福祉会 入所(特養)	医療法人社団 湖聖会(東京) 入所(老健)	医療法人社団 ひがしの会 入所(有料)	医療法人社団 緑葉会 地域密着型(看護小規模)
		題名 あきらめないで! 私たちがいる。ウィズ奥様	一人で立ってお手洗いにいきたいんだ ～要介護4の90歳代の挑戦～	介護職員の姿勢に關しての意識改善を目指して	終末期における食事摂取について「最後の時までその方らしく、食べることを楽しんで」	新型コロナウイルス (COVID-19) クラスター対応について
6	11:30~11:45	法人名 医療法人社団 ひがしの会 サービス形態 地域密着型(小規模)	社会福祉法人 苗場福祉会 通所	社会福祉法人 カメリア会 入所(特養)	医療法人社団 平成会 入所(老健)	社会福祉法人 草加福祉会 入所(特養)
		題名 利用者のヒストリー ～「これまでの生活歴」を知り「これからのケア」に繋げる～	活気に溢れた日常を再び	トロミを統一しよう!	アロマセラピーと認知症～難聴の方の不安軽減～	感染委員会の取り組み ～組織力の強化を目指して～
7	11:45~12:00	法人名 医療法人社団 水澄み会 サービス形態 入所(老健)	医療法人社団 百葉の会 通所	社会福祉法人 カメリア会 入所(特養)	社会福祉法人 平成会 入所(特養)	社会福祉法人 苗場福祉会 通所
		題名 活気あふれる施設の創造 ～日中の活動量増加による夜間の睡眠の質改善を目指して～	日常生活動作 (ADL) を低下させない! ～取り組みと課題～	入居者様の声をつなげる取り組み	お風呂でスッキリ! ～届け! 職員と家族の思い～	新型コロナウイルス発生予防および感染から学んだこと
8	12:00~12:15	法人名 医療法人社団 水澄み会 サービス形態 入所(有料)	医療法人社団 百葉の会 通所	社会福祉法人 白山福祉会 入所(特養)	株式会社 テイクオフ 通所(認知症対応)	社会福祉法人 湖成会 通所
		題名 より良い睡眠のために ～眠りスキャン導入から見えてくるもの～	リハ特化デイサービスの重度化防止への取り組み ～フレイル基準を用いて～	チームケアの基本を問う (ステージ1)	今日は何作? ～食事作成のプロセスを生活リハビリとして取り入れて～	お客様の笑顔を守るデイサービス
9	12:15~12:30	法人名 医療法人社団 水澄み会 サービス形態 入所(特養)	医療法人社団 百葉の会 通所	社会福祉法人 苗場福祉会 地域密着型(グループホーム)	社会福祉法人 カメリア会 地域密着型(グループホーム)	株式会社 ライフアシスト 入所(有料)
		題名 睡眠状態の把握と睡眠改善について ～眠りスキャンの活用～	高齢者の生きる意欲にもたらす影響 ～デイサービスでの畑の取り組み～	ヒューマンエラーを理解し誤業事故を防止しよう	遠隔音楽療法の取り組み 第一報 ～基礎作りと今後の課題～	新型コロナウイルスの感染対策について ～なぜクラスターは発生しなかったのか～
12:30~13:30		休憩(1時間)				
テーマ		レクリエーション	その他	リハビリ・食事・栄養	業務改善	認知症
10	13:30~13:45	法人名 株式会社 日本ライフデザイン サービス形態 入所(有料)	医療法人社団 平成会 地域密着型(小規模)	医療法人社団 百葉の会 地域密着型(グループホーム)	社会福祉法人 湖成会 通所	社会福祉法人 苗場福祉会 地域密着型(グループホーム)
		題名 家族で味わうマリナーレストラン	舌苔の汚れを絶対治す	グループホームに平行導入 ～歩く機会と笑顔が増えた～	その方らしく安心して過ごせる居場所へ・・・	「私、帰りたいんだけど・・・」～帰宅要求を生背景から考える～
11	13:45~14:00	法人名 株式会社 日本ライフデザイン サービス形態 地域密着型(グループホーム)・その他(高齢者地域交流事業)	医療法人社団 緑葉会 入所(老健)	医療法人社団 水澄み会 通所	医療法人社団 百葉の会 通所	医療法人社団 日翔会 地域密着型(グループホーム)
		題名 新宿いきいきプロジェクト ～コロナと共存、デジタル化への挑戦～	高齢者のスキンケアについて	FIMを活用し丁度いい声掛けのタイミングを探る ～入浴からの支援～	分析は重要 ～前職の経験を生かして～	メモリーブックを活用したケアの効果～認知症高齢者の意欲向上を目指して～
12	14:00~14:15	法人名 社会福祉法人 苗場福祉会 サービス形態 通所	社会福祉法人 湖星会 入所(特養)	医療法人社団 平成会 入所(有料)	医療法人社団 百葉の会 入所(老健)	医療法人社団 百葉の会 地域密着型(グループホーム)
		題名 さあさ、踊ろよ ～笑顔あふれるリハビリ体操～	施設再生への取り組み ～問題点の振り返りと目標管理への取り組み～	みんな大好きヤ・ク・ル・ト! ～免疫力と腸内環境改善の効果～	厨房の働き方改革 ～新調理システム導入による変化～	その方らしい生活リズムで落ち着いた暮らしを
13	14:15~14:30	法人名 社会福祉法人 苗場福祉会 サービス形態 通所	医療法人社団 平成会 地域密着型(小規模)	社会福祉法人 湖星会 入所(特養)	医療法人社団 百葉の会 その他(いきいきプラザ)	医療法人社団 ひがしの会 通所
		題名 「また来るね!」 ～集団レクリエーションが利用者と職員にもたらした効果～	いつまでも住み慣れた家で ～笑顔のある生活を～	その食材食べやすいですか? ～安全な食事提供のために～	部署間連携におけるコミュニケーションの重要性～いきいきプラザの業務改善を通じて～	デイサービスで出来る認知症予防～多角的アプローチの検証～
14:30~14:45		休憩(15分)				
テーマ		教育	レクリエーション・住民活動	その他	食事・栄養	業務改善・看取り
14	14:45~15:00	法人名 社会福祉法人 カメリア会 サービス形態 入所(特養)	医療法人社団 百葉の会 通所	社会福祉法人 緑葉会 地域密着型(グループホーム)	社会福祉法人 湖星会 入所(特養)	医療法人 北辰会 通所(通所リハビリ)
		題名 すべての命を守るために	実現!! 多職種連携イベント ～楽しいと専門知識の融合～	「私は元気だよ」～コロナ禍における家族との繋がり～	胃ろうから完全経口摂取へ ～自分らしさを取り戻すまで～	見つけよう・探そう名前 ～色の活用で事務的作業時間削減～
15	15:00~15:15	法人名 社会福祉法人 大和会 サービス形態 入所(特養)	社会福祉法人 湖成会 地域密着型(小規模)	株式会社 テイクオフ 地域密着型(小規模)	社会福祉法人 湖星会 入所(特養)	医療法人社団 平成会 入所(老健)
		題名 口腔ケアから考える利用者の生活支援 (ファーストステップ)	「得意」を生かがい	在宅生活を守るための社会的処方のありかた ～コロナフレイルからの脱出～	「おーい、食いつちだ」	コロナ禍での看取りケア ～どんな状況でも希望のお看取りを!
16	15:15~15:30	法人名 社会福祉法人 大和会 サービス形態 入所(特養)	医療法人社団 緑葉会 川西通山病院	社会福祉法人 草加福祉会 入所(特養)	社会福祉法人 湖成会 入所(特養)	医療法人社団 湖聖会(宮城) 地域密着型(看護小規模)
		題名 歯っはっはっ ～食物残渣ゼロの取り組み～	介護予防啓発事業「こやまハツラツ教室」の取り組み	現代の介護にこそ【映え】が必要!むしろ最優先 ～ケア스타그램～	新しい食事提供のあり方 ～真空調理の可能性～	残った時間をその方らしく過ごして頂くために
17	15:30~15:45	法人名 社会福祉法人 苗場福祉会 サービス形態 有料・通所・短期入所・栄養科	株式会社 ケアハーモニー 入所(サ高住)・地域密着型(小規模)	株式会社 ライフアシスト その他(放課後等デイサービス)	社会福祉法人 草加福祉会 入所(特養)	株式会社 健康倶楽部 地域密着型(小規模)
		題名 職員が求める育成環境からみえた今後の展望	住み慣れた街で幸せに暮らすために ～地域連携と困難事例への挑戦～	ひとりでするもん!! ～身の回りのことを自分で出来るようになるための一考察～	食形態の見直し ～誤嚥予防～	A様と娘様の思いに応えたい ～在宅で最期を迎えるために～

研究発表会

《ROOM 1》

抄録

9 月 16 日 (木)

チームケア学会 研究発表 【 ROOM 1 】

発表時間		法人	題名	発表者	ページ
1	10：00 10：15	株式会社 テイクオフ	お客様の言葉により添ったチームでの取り組み	鈴木 佳子	13
2	10：15 10：30	株式会社 日本ライフデザイン	運動の大切さ～楽しく生きていく為には～	小比類巻 学 紅谷 歩	14
3	10：30 10：45	株式会社 日本ライフデザイン	住み慣れた自宅で安定した生活を続けるために	外岡 隆裕	15
4	10：45 11：00	社会福祉法人 草加福祉会	コロナに負けるな！踏み台昇降！	佐藤 千賀子	16
11：00 11：15		休憩（15分）			
5	11：15 11：30	株式会社 日本ライフデザイン	あきらめないで！私たちがいる。ウィズ奥様	伯耆 優子 及川 絵梨	17
6	11：30 11：45	医療法人社団 ひがしの会	利用者のヒストリー ～「これまでの生活歴」を知り「これからのケア」に繋げる～	杉谷 紀葉	18
7	11：45 12：00	医療法人社団 水澄み会	活気あふれる施設の創造 ～日中の活動量増加による夜間の睡眠の質改善を目指して～	藤田 直人	19
8	12：00 12：15	医療法人社団 水澄み会	より良い睡眠のために ～眠りスキャン導入から見えてくるもの～	川神 政孝	20
9	12：15 12：30	社会福祉法人 水澄み会	睡眠状態の把握と睡眠改善について ～眠りスキャンの活用～	高田 憲佑	21
12：30 13：30		休憩（1時間）			
10	13：30 13：45	株式会社 日本ライフデザイン	家族で味わうマリナーレストラン	堀江 巧	22
11	13：45 14：00	株式会社 日本ライフデザイン	新宿いきいきプロジェクト ～コロナと共存、デジタル化への挑戦～	松岡 友希 加藤 美華	23
12	14：00 14：15	社会福祉法人 苗場福祉会	さあさ、踊ろよ ～笑顔あふれるリハビリ体操～	山田 千尋	24
13	14：15 14：30	社会福祉法人 苗場福祉会	「また来るね！」 ～集団レクリエーションが利用者と職員にもたらした効果～	星野 美千代	25
14：30 14：45		休憩（15分）			
14	14：45 15：00	社会福祉法人 カメリア会	すべての命を守るために	常廣 將文	26
15	15：00 15：15	社会福祉法人 大和会	口腔ケアから考える利用者の生活支援（ファーストステップ）	中村 慶子	27
16	15：15 15：30	社会福祉法人 大和会	歯っはっはっ ～食物残渣ゼロの取り組み～	藤井 一也	28
17	15：30 15：45	社会福祉法人 苗場福祉会	職員が求める育成環境からみえた今後の展望	三浦 巳記	29

チームケア学会 研究発表抄録

題名	お客様の言葉により添ったチームでの取り組み		
法人名	株式会社 テイクオフ	事業所名	ケアセンターとこしえ上山南
発表者	※鈴木 佳子	共同研究者	ケアセンターとこしえ上山南職員
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・ <u>小規模多機能</u> ・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

令和2年10月1日より当事業所をご利用となったA氏。入院を経て寝たきりとなったA氏と在宅介護に自信がなかった高齢の妻。連泊利用のA氏からの「ここから逃げ出したい」、との言葉をきっかけに家に帰る事を目標として、チームで向き合い、みえたA氏の変化について報告する。

II 目 的

A氏が家に帰るために家族の負担軽減に必要な歩行訓練、排泄練習などのリハビリで状態の改善を図れるようにチームで取り組む。

III 方 法

1. 研究期間

2020年10月1日～2021年7月15日

2. 研究対象

A氏 男性 80歳代 要介護4

(認知症自立度：自立)

74歳で腰部脊柱管狭窄症にて腰部痛があり、痛みが強くなり手術するが痛みは残った。79歳の時、心不全での入院で廃用症候群となった。主訴・腰部痛 臀部痛

3. 具体的方法

- 1) 文献からA氏の状態を学び、リハビリを計画する。
- 2) 状態チェックシートで職員間のケア統一。項目ごと(ベッド上・移乗・排泄・入浴・その他)に分けA氏の出来る事・出来ない事・時々出来る事を書き出す。
- 3) 以前入所していた老人保健施設でのリハビリを情報収集。

4. 評価尺度

実施前後の状態変化を記録し評価とする。

IV 倫理的配慮

研究参加の目的、参加は自由意志で拒否による不利益はないこと。個人情報には配慮することを伝えA氏、ご家族様より同意の書面を頂いた。

V 結 果

家に帰ることがA氏との目標となり、目標が出来たことでA氏の意欲を引き出し、車椅子使用から、2メートル歩行が出来た。トイレでの排泄には失敗したが、尿意を取り戻し、尿瓶で排尿出来るようになった。出来る事が増えたことで、A氏の自信となり、表情が明るく前向きになり、家族も協力的になり自宅に帰る事ができた。今の生活の中でも目標が出来、日記をつけることが職員との日課となっている。

VI 考 察

A氏との関わりの中で、チームでA氏との目標に取り組み、情報を共有し合うことでケアの統一となり、A氏が安心してリハビリや生活ができ、意欲を引き出したことで、出来る事が増えてきた。出来る事が増えたことで、家族の介護不安軽減となり関係性の改善にも繋がった。

トイレでの排泄失敗から、体幹トレーニングで体幹の安定を図ることが今後の課題である。

参考文献

- 1) 介護のコラム, 「廃用症候群」って何? 症状やケア方法を解説
- 2) 曾田玉美: 作業療法 モチベーション向上に企図した高齢障害者への声かけ方法の効果, 2014



チームケア学会 研究発表抄録

題名	運動の大切さ～楽しく生きていく為には～		
法人名	株式会社日本ライフデザイン	事業所名	四季平安の杜 鷹の台ケアセンター
発表者	小比類巻 学 紅谷 歩	共同研究者	橋本 真慈 木村 紗良
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【 <u>デイサービス</u> デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

利用当初（R2.7.11）ご自宅で転倒された事をきっかけに車いす生活となってしまう（右大腿部に微小骨折を患う）。本人様より『（自由に動けなくて）生活がつまらなくなったよ。何の心配もなく前みたいに歩きたい。』との強い希望あり。レクの一環で楽しんでいただきながら運動を行い、ADL 向上に対してサポートさせていただく事となる。

II 目 的

以前のような楽しい気持ちで生活して頂けるよう下肢筋力の強化を中心にアプローチし、最終的に自立歩行が可能となるようサポートしていく。

III 方 法

1. 研究期間

ステップ 1（R2.8.20～） ステップ 2（R2.11.19～）
ステップ 3（R3.3.18～） ステップ 4（R3.6.17～）

2. 研究対象

利用者 78 歳女性 要介護度 2

DS 利用回数 当初週 2⇒現在週 3（R3.1.21～）

3. 具体的方法

ステップ 1

自重、ゴムチューブの使用をメインとした下肢筋力のストレッチ 6 種（30 分）。手すりを使用した立ち上がり運動などで大きな筋群をトレーニング 4 種（30 分）。

ステップ 2

ストレッチ時間を変更せず 8 種に変更。立ち上がり運動の継続と体調に合わせて歩行器を使用して 2～5M の歩行を数セット実施（40 分）。

ステップ 3

ストレッチ、所要時間の変更なし（継続）。福祉

用具（歩行器、4 点杖など）の使用にて 50M 歩行を 2～3 セット実施（50 分）。

ステップ 4

ストレッチ 5 種、所要時間 20 分に変更。下肢筋力トレーニング 5 種+歩行運動（200M×2～3 セット）を体調に合わせて実施（50 分）。

4. 評価尺度

週に 1 度筋力のデータを測定。

IV 倫理的配慮

対象者及びご家族には本研究の説明を口頭と書面で行い、同意を得た。

V 結 果

ステップ 1

2 か月ごろより身体がメニューに慣れ、可動域、筋力 UP が本人様にもわかるくらいになる。

ステップ 2

数メートルであるが歩けた事に歓喜される。笑顔が見られる。

ステップ 3

ふらつき、膝折れなく歩行の安定あり。夢中のあまり時間を忘れてしまわれる事もあり。

ステップ 4

シルバーカー使用により、ご家族とスーパーで買い物が行えるようになった。

VI 考 察

当初の目標、強い希望であったものがほぼ達成できた事で『笑顔が増えた。』とご家族から感謝のお言葉をいただく。更なる身体機能の向上を本人様も望まれている為、下肢筋力以外のアプローチを考え引き続きサポートしていく。



チームケア学会 研究発表抄録

題名	住み慣れた自宅で安定した生活を続けるために		
法人名	株式会社日本ライフデザイン	事業所名	ナナールレンタルステーション
発表者	外岡 隆裕	共同研究者	無し
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 <u>その他</u> 【福祉用具貸与】		

I はじめに

当時、右大腿骨骨折により人工骨頭置換術を施術。頸部の痛みが残り、歩行や高い段差などの昇降動作に支障をきたしていた。

また、自宅玄関の環境により外出が困難であった。上がり框の高さや手すり設置不可な状況であり、転倒の危険性が高かった。

外出の機会を増やしたいため環境整備が行えないか相談をお受けした。

II 目 的

自宅より外出するための環境を整え、自身による買い物などの機会を増やすことでメリハリのある日常生活を継続させる。

外出することで足腰の筋力低下を防ぎ、住み慣れた自宅で安定した生活を続けることができる。

III 方 法

1. 研究期間

平成 30 年 12 月より現在に至る

2. 研究対象

ご利用者：A 様、80 歳代、女性

疾患：高血圧、糖尿病、右大腿骨骨折(H30/10 ごろ)

家族構成：娘夫婦と同居

自宅環境：一軒家、玄関内が狭く天井や壁が弱い
ため手すりなどの設置不可

3. 具体的方法

外への出入口を玄関より縁側に変更。

屋外用の手すりや踏み台を設置し、主な出入口とした。

4. 評価尺度

転倒を予防しつつ、自身での外出がスムーズに出来ることを判定の基準とする。

IV 倫理的配慮

実名等は明かさず、プライバシーに配慮した上で検討及び記録を行う。

V 結 果

より広い間口からの外出に切り替えたため、円滑に外へ出られるようになった。

手すりを設置しているため、昇降時の転倒リスクも軽減され安全に昇り降りができるようになった。

ご本人は半ば外出をあきらめられており、生活にハリがなく引き籠りがちであった。

自身単身での外出が可能になり、近所への買い物や老人会の集まりに再び参加できるようになり、大変満足されている。

VI 考 察

今回のケースのように、環境整備により生活の質が変わることは多々あると思われます。

近年では高齢者の引き籠りによる孤独死なども多く報道されています。

少しでもそのような事態を防ぐため、これからも福祉用具の活用を提案し、ご本人及びご家族の手助けになればと感じました。



チームケア学会 研究発表抄録

題名	コロナに負けるな！踏み台昇降！		
法人名	社会福祉法人 草加福祉会	事業所名	クラシックレジデンス東戸塚
発表者	※佐藤千賀子	共同研究者	スタッフ一同
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【 <u>デイサービス</u> ・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

新型コロナウイルスの感染防止対策により、施設内の廊下での歩行訓練が中止となった。ご利用者様の運動不足の解消、気分転換を図るために、2020年4月から、踏み台昇降を行うことにした。今回、ご利用者様の踏み台昇降への意識、身体の変化のアンケート調査と2名のご利用者のモニタリング結果を報告する。

II 目的

アンケート調査・モニタリングを実施することでご利用者様の参加意識、身体の変化を把握と、踏み台昇降の有効性を確認する。

III 方法

1. 研究期間：2020年4月1日～2021年7月15日

- 1) アンケート調査：2021年6月28日～7月7日
- 2) モニタリング：2021年5月29日～7月13日

2. 研究対象

- 1) アンケート調査：協力可能なご利用者様 66名
- 2) モニタリング

A氏：女性 要介護2 80歳代

B氏：女性 要介護3 70歳代

3. 具体的方法

- 1) アンケート調査：踏み台昇降の参加状況、参加して良かったか、参加して感じたこと、変化があったことなどについて、アンケート調査を実施した。
- 2) モニタリング：毎回同じ曲で踏み台昇降を行っていただき、処理能力、完遂能力、思考力（コグニサイズ）について、一定の基準を設定し、その実施レベルを記録した。

4. 評価尺度

運動実施者の身体的・精神的賦活についての検証

IV 倫理的配慮

今回の研究に関しての目的、取り組みの内容についてはご利用者様、ご家族様に説明し、同意を得ている。

V 結果

1) アンケート調査



図1 アンケート調査から抜粋

2) モニタリング

思考能力のモニタリングにおいて、「しりとり」を行うことで、A氏、B氏の処理能力、完遂能力にそれぞれ多少の変化が見られた。

VI 考察

アンケート調査では、ご利用者様の身体と心に何かしら良い影響をもたらしていること、踏み台昇降がご利用者様に受け入れられており、今後も継続しても良いことを確認できた。

モニタリングでは、通常の踏み台昇降に、「しりとり」を追加することで動作に変化が見られたことから、脳に何かしらの刺激を与えたことにより変化が起これたと推測できた。この結果を受け、スタッフで話し合い、踏み台昇降に、認知課題（しりとり、クイズなど）を取り入れることにした。

参考文献

「国立長寿医療研究センター」ホームページ

認知症予防運動プログラム「コグニサイズ」

<https://www.ncgg.go.jp/hospital/kenshu/kenshu/27-4.html>（最終閲覧日：2021年7月26日）



チームケア学会 研究発表抄録

題名	あきらめないで！私たちがいる。ウィズ奥様		
法人名	株式会社日本ライフデザイン	事業所名	ケアセンターとこしえ美郷台
発表者	伯耆優子 及川絵梨	共同研究者	小規模多機能 CM 垣谷直代
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・ <u>小規模多機能</u> ・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

奥様と二人暮らしだったH様。嚥下低下、認知機能低下、ADL低下や発語能力の低下が著しく進み、お二人で暮らすのが難しいと思われた。

横浜の自宅から長男様の近く成田のサービス付き高齢者住宅に住み替えし小規模多機能居宅介護のサービスを利用。

小規模多機能として日常的に行えることを考え取り組んでいる事例について報告する。

II 目 的

ご主人を介護しながら夫婦で暮らしたいという奥様の願いとご本人の入院前と同じように自分の足で歩き好きな物を食べたいというご本人の願いをかなえる方法を模索し実践する。

III 方 法

1. 研究期間

令和2年10月27日～令和3年7月

2. 研究対象

A氏 90歳 男性 要介護4

3. 具体的方法

A氏の状態変化に合わせたケアの実施

1) 食事に関して

嚥下障害認め、食事の形態や摂取方法介入。

週1回、言語聴覚士のリハビリを確認し指示を受けながら食事形態姿勢を変更していく。

3食リクライニングチェアにて全介助にて飲み込み確認。（奥様全面協力介助・介護職確認）

2) 歩行に関して

慢性混乱と夜間不眠があり、ナースコールを押すことができず 日中は車いすで過ごしているが、自走しブレーキをかけることができない。トイレの際靴下のままベッドからおり歩き出すことがある。起き上がりベッドセンサーを使用

IV 倫理的配慮

プライバシーに配慮し抄録記録時実名を伏せ記録を行う。

V 結 果

1. 食事に関して

主食 やわらかいごはん 副食 刻み 摂取
少量ずつ咀嚼時間を長めに取り摂取

2. 歩行に関して

長距離は車いす
歩行器で短距離歩行可能（長距離訓練中）
排泄 一部介助

VI 考 察

ご本人とご家族の 最後まで夫婦二人で暮らしたい。自分の足で歩きたい。好きな物を食べ最後まで自分らしい人生を送りたいという願いに応える為に、小規模多機能の特性を生かし多職種協力して支援していった。ご本人の努力・奥様の献身的な愛・ご家族・専門職の関わりもあり、徐々に良い方向に向かっていく。チームとしてケアの見直しを行うことにより同じ方向を向いてケアの実践を行い結果が出つつある。



チームケア学会 研究発表抄録

題名	利用者のヒストリー～「これまでの生活歴」を知り「これからのケア」に繋げる～		
法人名	医療法人社団 ひがしの会	事業所名	小規模多機能ホームみのりの里河内
発表者	※杉谷紀葉 ※増矢陽香	共同研究者	竹元紀美子
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・ <u>小規模多機能</u> ・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

より良い個別ケアをする為に、利用者の人生や人となりを知ることとはとても重要な事である。そこで我々はご家族や馴染みの職員に対しアンケートを行う事でフェイスシートには表れない利用者の情報を収集し、これからのケアに繋げていきたいと考えた。

II 目 的

本研究の目的は、年表、プロフィール表を作成することにより、利用者の情報を詳しく且つ明確に知り、ケアの向上につなげる事である。

III 方 法

1. 研究期間

2021年4月15日～2021年6月30日

2. 研究対象

A 施設職員 14名

介護職 12名

看護師 1名

ケアマネジャー 1名

3. 具体的方法

1) 2021年4月15日～2021年5月12日

情報収集アンケートを作成する。

2) 2021年5月13日～2021年6月15日

ご家族、馴染みの職員に話を伺い年表・プロフィール表を作成する。

アンケートを作成する。

3) 2021年6月16日～2021年6月22日

上記期間中、事務所内に年表・プロフィール表を保管できる場所を設け職員に共有する。

4) 2021年6月23日～2021年6月27日

職員にアンケートを実施し、評価を行う。

4. 評価尺度

年表作成に関するアンケート

IV 倫理的配慮

対象者には本研究の説明を口頭と書面で行い、同意を得た方を対象とした。

V 結 果

結果①心境の変化

全ての職員に変化が見られた。

利用者への理解が深まり、また理解するための知識やコミュニケーションの材料が入手できたことが確認できた。

結果②関わり方の変化

8割の職員は変化が見られたが2割の職員は変化が見られなかった。

VI 考 察

年表を作成したことにより、利用者の人生歴を把握したことで利用者への印象が変わった。利用者の情報が増えたことで話に繋がりがみられたり、利用者へ提供できる話題が増えた。お借りした写真を利用者へ見せる事で回想法にもなり様々な話を聞く事ができた。

「父、母は昔はこんな人だったからこんな風にケアをしてもらいたい」という想いを汲み取り利用者・ご家族双方が満足できるケアを提供していきたい。また、得られた情報をもとに個別性に配慮した支援内容の組み立てをケアマネジャーを中心に検討していきたい。



チームケア学会 研究発表抄録

題名	活気あふれる施設の創造 ～日中の活動量増加による夜間の睡眠の質改善を目指して～		
法人名	医療法人社団 水澄み会	事業所名	介護老人保健施設アゼーリみずすみ
発表者	藤田 直人	共同研究者	清水 健太
サービス種別	入所【病院・特養・ <u>老健</u> ・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

A施設で利用者の活動量低下と傾眠傾向が問題視されている。日中の活動量増加により睡眠の質が向上するのではないかと考え本研究を開始した。A施設は前年度から在宅強化型となりリハビリや自主訓練、集団レクリエーションの実施回数を増やす取り組みを行い、その効果を以下に報告する。

II 目 的

施設利用者の活動量維持・向上による睡眠の質改善を目的に実施。

III 方 法

1. 研究期間

2020年11月から2021年5月までとする。

2. 研究対象

日中傾眠傾向の利用者7名を選出した。

3. 具体的方法

- 1) リハビリや体操、レクリエーション、自主訓練の回数、頻度の増加。
- 2) 新しい機器、機材の導入。
- 3) 眠りスキャンデータ(以下：データ)を元に睡眠の質の統計を図る。
- 4) 活動内容や時間帯、介入方法について毎月カンファレンスを行う。

4. 評価尺度

日中の活動量の評価尺度を施設内で作成し、介護職員で毎月評価を実施。月毎に平均化し変化を推移する。

IV 倫理的配慮

本人の同意がない為、対象者及び家族に事前に説明した後研究を開始した。

V 結 果

他職種協働で利用者の活動機会を増やしたことや

データの活用、毎月カンファレンスを開催し、個々に合った介入方法を検討した結果、表1で示す通り睡眠効の質と活動量に改善が見られた。

表1.睡眠状態・活動量の推移

	睡眠時間	中途覚醒	睡眠効率	活動量
2020.11	364 分	214 分	57%	3.2 点
2021.5	413 分	193 分	64%	4.0 点

VI 考 察

利用者の睡眠の質が改善した要因として、1)利用者とのリハビリ回数の増加や体操、レクリエーション、自主訓練の実施回数を多職種協働で行ったこと、2)毎月多職種でカンファレンスを開き、原因分析や個々に合った介入方法を検討・実践したことが挙げられる。

1)ではリハビリ回数が2回から3回に増え、体操やレクリエーションの頻度を週5日から毎日行った。

堅木ら¹⁾によると、「昼間に適度な運動を行うことは睡眠・覚醒パターンを規則化するのに有効である」とあり、リハビリの実施と多職種で運動を行ったことで、効果がみられたと考える。

2)では毎月多職種と情報を共有し、活動内容が統一できたこと、データを活用し、日中寝ている時間帯に活動提供を行い、個別性のある提供ができ夜間の睡眠の質改善に貢献できたと考える。

今後の展望として利用者の研究前後の活動量の推移を比較・検討し、より個別性のある提供を目指す。また眠りスキャンでは就寝時のバイタルや呼吸数の変動が確認でき、利用者の状態異常の早期発見による事故防止、職員の業務効率の改善につながると考える。

参考文献

- 1) 堅木亜起子：軽運動による介入プログラムの効果, 日本衛生学雑誌, 73 巻 3 号 p 365-372,2018,



チームケア学会 研究発表抄録

題名	より良い睡眠のために～眠りスキャン導入から見てくるもの～		
法人名	医療法人社団水澄み会	事業所名	グランドケアホームはまぼうふう
発表者	※川神 政孝	共同研究者	岡本 明日香
サービス種別	入所【病院・特養・老健・ <u>有料</u> ・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

当施設では2021年11月に眠りスキャンシステムを導入した。このシステム導入により、お客様の睡眠状態がデータ化され、夜間ベッド上での覚醒が多く、十分な睡眠がとれていない方が50名中6名おられることが分かった。睡眠がとれていない方から活動面よりアプローチを行い、睡眠改善に取り組むことにした。

II 目 的

眠りスキャン導入による睡眠改善の取り組みによって、お客様がよりよい睡眠をとって頂くことで夜間しっかり体を休めて体調維持を図る。

III 方 法

1. 研究期間

2021年1月13日～2021年3月31日

2. 研究対象

利用者A氏

3. 具体的方法

- 1) 眠りスキャン導入チームの発足、定期的な会議の実施（進捗状況確認）
- 2) 眠りスキャンによる睡眠レポートの分析
- 3) 眠りスキャンチームからの情報発信・共有（カンファレンス・申し送り・会議等）
- 4) 日中の活動提供（体操・レクリエーション等）

4. 評価尺度

眠りスキャンの日誌（2週間）を集計し、平均睡眠時間の変化を評価尺度とする。

IV 倫理的配慮

本研究発表を行うにあたり、対象のお客様、及びそのご家族様に研究をする旨を口頭と書面で行い、書面にて同意を得た。

V 結 果

今回の取り組み前の対象者A氏の睡眠時間は約6時間であった。取り組み開始後、1)～4)の方法を実施した結果、睡眠時間が7～8時間となり、睡眠時間が増加し、発熱などの体調不良も見られなかった。

VI 考 察

天野らによると「日中の活動性を高める事で、一定の睡眠時間が確保された¹⁾」とあり、これを実施する事で睡眠時間の改善が見られたと考えられる。日中の活動を充実させる事で離床時の傾眠防止ができ夜間の睡眠時間増加に繋がったと考える。しかし離床時間を増やす事で本人様より横になりたいとの訴えも見られた。

この事から日中の活動の提供が夜間の睡眠に影響を及ぼすこと、本人様への体調への考慮が必要な事が分かった。

今回の取り組みを基に、眠りスキャンを活用しながら、お客様個々の状態にあった活動の提供を実施し、より良い睡眠をとって頂くよう取り組みを続けていきます。

参考文献

- 1) 厚生労働省：e-ヘルスネット高齢者の睡眠
<https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/heart/k-02-004.html>
- 2) 田淵康子：認知症高齢者の睡眠・覚醒リズムの実態と睡眠への影響要因との関連
- 3) パラマウントベッド：眠りスキャン商品ページ
<https://www.paramount.co.jp/product/detail/index/20/P0054201>

引用文献

- 1) 天野玉記：日中の活動性を向上させる取り組みが認知症高齢者の睡眠障害改善に及ぼす効果

チームケア学会 研究発表抄録

題名	睡眠状態の把握と睡眠改善について～眠りスキヤンの活用～		
法人名	社会福祉法人 水澄み会	事業所名	特別養護老人ホーム ロング・レン
発表者	※高田 憲佑	共同研究者	島尾 慎一
サービス種別	入所【病院・ <u>特養</u> ・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

2020年5月より特別養護老人ホームに入所されたA氏は夜間不眠との申し送りや記録が多くあり、日中傾眠が多く、活動も少ない状態であった。A事業所では2020年11月より眠りスキヤンを導入し睡眠状況の把握が行えることになったことを機に、参考文献に基づき活動の提供を増やし、夜間睡眠の質向上のため取り組んだ。

II 目的

眠りスキヤンを活用し睡眠状態の把握を行い、毎日6時間の睡眠（高齢者平均睡眠時間）を目指す。

III 方法

1. 研究期間

2020年11月～2021年3月

2. 研究対象

A氏 要介護4

移動車椅子（短距離自走、長距離介助）

移乗見守り対応。不眠や傾眠が多い。

3. 具体的方法

1) 日中活動として日々、午前午後散歩（日光浴）やレクリエーションの機会を提供する。

2) 眠たくなってからの臥床誘導の実施。

3) 決まった時間の起床、食事の提供を行う。

無理のないように傾眠の多い10時、14時居室誘導し午睡の時間を提供する。

4. 評価尺度

眠りスキヤンのレポート機能（以下：レポート）を参照し効果確認を行う。

1) 睡眠日誌（1日/1回）

2) 平均睡眠時間、平均就床時間（1週/1回）

3) 平均就床時刻、平均起床時刻（1週/1回）

IV 倫理的配慮

事前に対象のお客様へ設備、研究の旨を説明の上、同意を得た。また、個人の特定される情報は使用していない。

V 結果

平均睡眠時間1時間増加、夜間3時間以下の睡眠も11月5回から、3月0回となり、現在はトイレ覚醒以外ゆっくり休まれていることが多い。

日中の傾眠も減り他者との会話やTVを見て過ごすことが増えた。

表1 睡眠時間表

	2020年11月	2020年12月	2021年1月	2021年2月	2021年3月
平均睡眠時間	5時間30分	6時間25分	5時間22分	7時間03分	6時間35分
平均就床時間	7時間21分	7時間02分	7時間02分	9時間25分	8時間44分
平均就寝時刻	20時28分	20時40分	20時32分	19時43分	20時42分
平均起床時刻	3時49分	4時43分	3時04分	5時09分	5時26分
3時間以下の睡眠	5	4	2	0	0

VI 考察

参考文献1) 2) を参照し活動の提供、日光浴を実施することにより睡眠改善につながった。

レポートにより研究前後の状況比較ができ評価が行いやすかった。不眠との申し送りや記録があった際、具体的に睡眠時間や睡眠状況の把握が行え、カンファレンスで話し合う際に活用することができた。今後も今研究を実践していく。

参考文献

1) 榎本 みのり:高齢者の睡眠, e-ヘルスネット 厚生労働省

<https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/heart/k-02-004.html>, (参照 2020-11-1)

2) 井上 雄一:高齢者の睡眠を守るためには, 情報誌 けあ・ふる, VOL. 93, 2017

<https://www.paramount.co.jp/learn/topics/detail/11>, (参照 2020-11-1)



チームケア学会 研究発表抄録

題名	家族で味わうマリーナレストラン		
法人名	日本ライフデザイン	事業所名	油壺マリーナヒルズ
発表者	※堀江 巧	共同研究者	澤村 達哉 葉山 裕樹 加藤 寛子
サービス種別	入所【病院・特養・老健・ <u>有料</u> ・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

今まで車椅子での移動や、外でのトイレが困難なお客様がご家族とお食事に出掛けられる機会が限られていた。また、コロナウイルスの影響により、それまで自由に外出されていたお客様もご家族との面会が困難になった。そのようななかでも、ご家族と一緒に特別な時間を過ごして頂きたい思いから、施設内で食べられる特別メニューの個室レストランを企画し、今回の研究に取り組む事とした。

II 目 的

トイレや移動が心配で、外出に不安のある方にもご家族とおいしい食事を召し上がり、特別な時間を過ごして頂く。

III 方 法

1. 研究期間

令和3年1月15日～令和3年7月17日

2. 研究対象

施設ご入居者様 109 名および、ご家族

3. 具体的方法

- 1) 利用料請求時、食事企画のチラシを同封し、予約がありしだい食材を注文する。
- 2) あらかじめ、設定日を決めて、通常勤務に支障がでない範囲で行う。
- 3) 厨房職員考案の特別メニューを用意。
お客様に合わせた食事形態での提供。
- 4) 食事企画当日、ご家族にコロナウイルス抗原検査を実施。陰性確認後、特別室にご案内。
- 5) 厨房職員および、多職種が連携し、料理を提供。

4. 評価尺度

終了後、お客様および、ご家族にアンケートを実施。

IV 倫理的配慮

入居者様および、ご家族様に研究に使用することを口頭にて許可を得た。

V 結 果

食事企画のご案内を開始した直後から、予約の問い合わせが多数入った。予約問い合わせ時、こういう企画を待っていたとの声をいただいた。

お客様アンケートから、「食材を活かした自然な味付けで、とても美味しく、残った食材をおみやげとして持ち帰った。」「久しぶりに家族一緒に食事ができ、会話が弾む、貴重な場となった。」など、サービスも含め、満足して頂けた。介助が必要な方でも安心して食事を楽しむことが出来た。

VI 考 察

食事企画がご家族の思いと重なり、思いの外、反響が大きかった。

施設で家族と食事することで昔のことを思い出すだけでなく、新しい思い出を作る特別な空間としても提供でき、大変満足して頂けた。

職員も日常業務とは違う業務を楽しみ、モチベーションの向上につながった。

今後、よりお客様のニーズに合わせた料理の提供を課題とし、お客様の生きる力を引き出すことを目標としレクリエーション、イベントを考え続けていこうと思います。



チームケア学会 研究発表抄録

題名	新宿いきいきプロジェクト ～コロナと共存、デジタル化への挑戦～		
法人名	株式会社日本ライフデザイン	事業所名	あんじゅうむ大久保・地域交流スペース一福
発表者	※松岡 友希・加藤 美華	共同研究者	横崎 果歩・横井 勝彦
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他 高齢者地域交流事業		

I はじめに

コロナ禍においてご利用者の筋力低下やメンタル面の不安が顕著になってきた。感染予防対策を継続した上で、ご利用者のいきいきとした生活の維持と情報発信の取組みに今回フォーカスした。

II 目 的

1. ご利用者の ADL の維持・筋力低下予防を図る
2. ユニット単位でのイベント取組み
3. 家族や関係者への情報発信ツールの再構築

III 方 法

1. 研究期間

2020 年 10 月～2021 年 8 月

2. 研究対象

ご利用者様（18 名）、職員

3. 具体的方法

- 1) 新宿 100 トレ…各部位に重りを装着し部分的に筋力トレーニングを行う手法で実施
- 2) 新宿いきいき・まごころ体操…理学療法に基づいた拘縮予防等を目的とした体操の実施
- 3) 各種セラピー…アロマ・音楽・園芸セラピーによるメンタルヘルスケアの取組み
- 4) 情報発信ツールの構築…ブログ・メルマガ・You Tube によるデジタル化への取組み

4. 評価尺度

- 1) ご利用者の ADL 評価
- 2) ご利用者の睡眠時間評価
- 3) ご利用者の BPSD 評価
- 4) 各情報発信ツールの件数と家族評価の検証

IV 倫理的配慮

ご利用者、家族、職員全員に研究内容説明を書面にて行った。

V 結 果

1. 新宿 100 トレは 1 カ月に 1～2 回実施、負荷を掛けたトレーニングは 18 名中 16 名が実施でき特に下肢筋力維持を図ることができた。
2. 新宿いきいき・まごころ体操は 10 時に両ユニットとも毎日、職員の補助で全員実施。食前及び午後の体操も含め、1 日トータル 1 時間の体操はご利用者の ADL 維持に貢献した。
3. セラピー活動としてアロマは全体空間から各居室へ変更、浅眠のご利用者に効果を発揮、また入浴後のアロママッサージでリラクゼーションを図った。音楽・園芸セラピーも継続しメンタルケアに貢献。セラピーの実施は家族からの評価も高い。
4. ブログは行事中心からフロア単位での取組へシフトチェンジし 2021 年 4 月よりフロア単位で週 2 本更新、メルマガは 2020 年 10 月から月に 2 回配信、職員紹介及びブログ等のリンク、あんじゅうむ大久保の最新情報を発信した。2021 年 5 月より You Tube チャンネルを開設、家族・関係者にイベントの様子動画を限定公開で配信、また 1 階事業の一福も音楽セラピー・ヨガ講座等の配信参加を促し進行中。

VI 考 察

体操やセラピー活動によりご利用者のストレス軽減と ADL 維持が可能であること、それを裏付ける動画やブログの配信で家族も安心されている。コロナ禍での制限された環境を受け入れ、順応することを学んだ

参考文献

- 1) 新宿区ホームページ（しんじゅく 100 トレ）



チームケア学会 研究発表抄録

題名	さあさ、踊ろよ ～笑顔あふれるリハビリ体操～		
法人名	社会福祉法人 苗場福祉会	事業所名	健康倶楽部たちばな・老人デイサービスセンター
発表者	※山田千尋	共同研究者	五十嵐明希
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【 <u>デイサービス</u> ・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

デイサービスセンターA事業所(以下デイサービス)は、機能訓練を目的としたお客様が多く利用されている。機能訓練の中で歌を歌いながら体操をするリハビリが人気で楽しみにされている方が多かった。レクリエーション前にも体操を行っていたが、リハビリ時よりも笑顔が少ないように感じられた。そこで機能訓練の無い日もお客様が楽しめる体操が出来ないかと考え、機能訓練指導員の協力のもと、地元のAさんが作成した「十日町雪まつり音頭」に合わせ、たちばなリハビリ体操を考案した。

II 目 的

1. 機能訓練が無い日も体を動かせる機会を増やす。
2. たちばなリハビリ体操でお客様の笑顔を増やす。

III 方 法

1. 研究期間：2020年10月～2021年7月
2. 研究対象：利用者60名
3. 具体的方法

- 1) 介護職員と機能訓練指導員によるストレッチや筋力運動を取り入れたリハビリ体操の考案
- 2) デイサービス職員を対象とした体操講習会
- 3) お客様の体操前後の笑顔変化(ラジオ体操とリハビリ体操を行った前後を比較する)

4. 評価尺度

フェイススケール(客観的評価を測る)

IV 倫理的配慮

本発表の主旨と写真の取扱いについてお客様全員に説明し了承を得た。

V 結 果

1. 懐かしい機織りの動作や雪まつり音頭の歌詞に沿った動きが普段の体操とは違う反応を引き出

すことができた。

2. 動画を撮り、解説・実践することで誰が担当になっても体操を毎日行うことが出来た。
3. フェイススケールの検証結果は、ラジオ体操で平均1.8点だったのに対し、リハビリ体操は0.7点。平均1.1点の表情変化が見られた。

フェイススケール (FRS: Wong-Baker faces pain rating scale)



図1 フェイススケール

4. 認知症の影響で落ち着きがないお客様もリハビリ体操が始まると一緒に体操を行えるようになった。

VI 考 察

二重課題は情報処理能力の再調整や効率化を意図しておりバランス能力が改善したとの報告¹⁾がある。体を動かしながら歌うという課題は転倒予防にも期待が持てる。吉備国際大学の横井氏は快の感情を引き出さなければ動作の誘導はうまくいかない²⁾と述べている。馴染みのある動作や歌詞を口ずさむことにより、やらされているという感情を解かれ、自ら体を動かし笑顔で体操を行えているのではないかと考えられる。また、リハビリ体操を行ったことで職員も主体的に体操に参加し、お客様と職員が一体となって楽しめるという相乗効果を生んだと考えられる。

参考文献・引用文献

- 1) 内山靖：エビデンスに基づく理学療法, p482, 医歯薬出版株式会社, 2008.
- 2) 嶋田智明：課題別・理学療法技術ガイド, p1024, 文光堂, 2008.



チームケア学会 研究発表抄録

題名	「また来るね！」～集団レクリエーションが利用者と職員にもたらした効果～		
法人名	社会福祉法人苗場福祉会	事業所名	健康倶楽部つどいデイサービスセンターポプラ
発表者	※星野美千代	共同研究者	小杉佑惟、内藤将幸
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【 <u>デイサービス</u> ・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

2021年4～5月の稼働率が前年度に比べ低迷していた。COVID-19の影響もあり、レクを限定し、机上活動を優先した事で、利用者同士の関わりが減少していた。利用者の様子や意見より、要因の1つとして、集団レクリエーション（以下、レク）のマンネリ化が原因と考えた。予防接種も進んだことから、現在のレクを見直し、顧客満足度の向上に取り組んだ事例を報告する。

II 目的

利用者のレクに対する顧客満足度を高めることで稼働率の向上を目指す

III 方法

1. 研究期間：2021年4月1日～7月31日

2. 研究対象：一般デイサービス利用者 78名

3. 具体的方法

- 1) レク実施前後にレクの顧客満足度アンケート調査
- 2) アンケート結果を基にレクの準備と実施
- 3) レク実施前後の変化について職員からの聞き取り

4. 評価尺度

- 1) アンケートによる顧客満足度の変化と意見
- 2) 職員からの聞き取り内容
- 3) 研究期間内における稼働率の変化

IV 倫理的配慮

本研究の対象者、家族へ個人情報の取り扱いについて口頭と書面にて説明し、同意を得た。

V 結果

1. アンケート結果による満足度の変化と意見

- 1) 利用者の意向に沿った内容のレクを26種類準備、実施することで、毎日違ったレクの提供ができた。
- 2) レク物品の作成や準備・片付けを利用者に協力してもらうことで、利用者同士の活発な会話が増えた。

表1 レクリエーションに対する満足度 (%)

	実施前 (6月)	実施後 (7月)
満足している	74.6%	78.0% (+3.4)
どちらでもない	16.9%	18.6% (+1.7)
満足ではない	8.5%	3.4% (-5.1)

2. 職員からの聞き取り内容

レクの作成や運営を通じて、レク担当以外の職員も積極的に関わるような前向きな行動がみられた。

3.

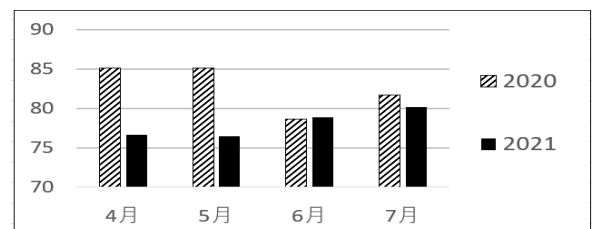


図1 研究期間内における稼働率の変化 (%)

VI 考察

今回の取り組みで、レクを充実することで、満足度は若干ではあるが向上した。満足度が向上した理由としては、レク物品を利用者と職員が共同作成し、準備から片付けまでの一連の活動を一緒に楽しんだことが要因と考えた。達成感や連帯感の共有は、対象者相互連帯感や親近感、帰属意識を向上させる¹⁾とある。図1の稼働率の変化にもあるように、利用者の満足度の向上が、既存の利用増や休みの減少に繋がり、稼働率も向上していく可能性が示唆されている。今後も、利用者とのレクを職員も楽しみ、「また来たい」と思うデイサービス運営と稼働率の向上を目指したい。

参考文献・引用文献

- 1) 認知症高齢者のQOLにおけるレクリエーション介入効果について, 時間自由研究 36巻1号 p5-8, 2010
- 2) 別冊家庭画報レクリエ, (株)世界文化社, 2017年, 2018, 2019, 2020年, 各月号



チームケア学会 研究発表抄録

題名	すべての命を守るために		
法人名	社会福祉法人カメラア会	事業所名	特別養護老人ホームカメラア桜ヶ丘
発表者	※常廣将文、飯田麻衣	共同研究者	防災委員会
サービス種別	入所【病院・ <u>特養</u> ・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

令和元年10月12日、記録的な大雨と強風を伴った台風19号が平塚上空を通過した。同日の市内降雨量は200mm以上を記録し、沿岸部では馬入のサッカー場が冠水。四之宮と田村では床上浸水21件、床下浸水が39件あり、市の指定緊急避難場所56ヶ所すべてが開設され、最大5434人が避難した。

当施設においても、近くを流れる金目川の水位が氾濫危険水位まで上昇し、危機的な状況であった。こうした現状の中、一人ひとりが有事の際に何をすべきか考え、行動することが求められている。

II 目的

本研究の目的は、現状の防災訓練に関する問題点を明確にし、今後の防災訓練への取り組みを改善することで、万が一に備えて混乱なく対応できるようにする。

III 方法

1. 研究期間：令和2年6月10日～3年5月4日

2. 研究対象：全職員

3. 具体的方法

- 1) 防災訓練に関する現状を把握するため、アンケートを実施する。(令和2年度)
- 2) アンケート結果から、令和元年度防災訓練の問題点を抽出する。
- 3) 見直しを行い、令和3年度防災訓練を計画し、訓練を実施する。
- 4) 令和3年度現在、令和2年度と同様のアンケートを実施し、昨年度との結果を比較する。

4. 評価尺度

強制選択尺度のアンケートを使用する。

IV 倫理的配慮

アンケートに回答することにより研究に参加することを同意したこととする。防災訓練実施に関しては、事前に各ユニットで周知、館内放送やポスターを貼り、

お客様が混乱しないよう配慮した。

V 結果

令和2年度と令和3年度のアンケートの集計結果を比較すると、下記の通りになった。

1. 訓練に参加しましたか

	令和2年度	令和3年度
はい	14%	57%
いいえ	86%	43%
無回答	0%	0%

2. 参加して身になったと思いますか

	令和2年度	令和3年度
大変身になった	1%	18%
身になった	12%	35%
あまり身にならなかった	0%	3%
身にならなかった	0%	0%
無回答	87%	44%

3. 有事の際、避難誘導できますか

	令和2年度	令和3年度
出来る	2%	6%
たぶん出来る	6%	35%
難しい	5%	15%
出来ない	0%	0%
無回答	87%	44%

VI 考察

訓練の内容を一つのユニットへ限定せず、施設全体で取り組んだことにより参加率が上昇し、災害や避難することへの意識が高まったと考えられる。

しかしアンケート結果を見ると、「もっと実践的な内容にしてほしい」、「勤務次第では参加が困難。定期的に実施してほしい」との意見もあった。

参考文献

- 1) 平塚市「令和元年台風第19号対応検証報告書」
[200068857.pdf \(city.hiratsuka.kanagawa.jp\)](https://www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/200068857.pdf)(参照2021-05-13)



チームケア学会 研究発表抄録

題名	口腔ケアから考える利用者の生活支援(ファーストステップ)		
法人名	社会福祉法人大和会	事業所名	特別養護老人ホーム愛生苑
発表者	※時田 菜瑞紀	共同研究者	中村 慶子
サービス種別	入所【病院(特養) 老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

当施設では、職員間において口腔ケアの重要性の認識やスキルにばらつきがあった。その為、ケアに統一性が無く効果的な口腔ケアが出来ていないという課題を感じていた。

マニュアル整備と勉強会を行う事で口腔内の清潔の保持ができ最期まで気持ちよく、美味しい食事を食べて頂けるようになったことと職員育成の仕組みができたことを報告する。

II 目 的

1. 口腔ケアの向上
2. マニュアル整備と職員育成の仕組み作り

III 方 法

1. 研究期間

2020年6月～2021年4月

2. 研究対象

A事業所で働く介護職員 27名

3. 具体的方法

- 1) 職員アンケートを実施、現状の把握
- 2) 歯科衛生士による口腔ケアの勉強会の実施
- 3) 対象利用者をピックアップし歯科衛生士より
実地指導を受け、技術・方法を学ぶ
- 4) 職員が学んだ口腔ケアを実践・経過観察し結果
の評価・効果の有無を検証する
- 5) 職員アンケートで評価を行う

4. 評価尺度

- 1) アンケート結果によるパーセントスコア
- 2) 取り組み前後の口腔内環境の変化を比較

IV 倫理的配慮

本研究の対象者、御家族に説明し承諾を得た

V 結 果

1. 口腔ケアの大切さを再確認できた。
2. 食物残渣、口臭が減少した。
3. 対象利用者の口腔環境改善により職員の自信に繋がり、さらに質疑が活発になった。
4. マニュアル整備や勉強会の実施により、新人育成も活用できる事がわかった。

VI 考 察

アンケートを利用した事により全体の課題の把握ができた。また対象利用者を決めた事でグッズの使い方や身体の使い方など問題が具体的になり、アプローチ方法も明確にする事が出来た。

正しい知識を得てチームで取り組んだ事により、1～2週間で利用者の舌苔が減少した。舌苔が減少した事で味覚が改善され、味を楽しむ様子が見られるようになり、自己摂取する回数が増えた。口腔機能の維持向上は QOL 向上に繋がり食べる楽しみが増えた事はその結果である。また、職員のやる気と自信になり継続的支援に繋がっていった。成果で出た事で、新人育成にも活用出来る事がわかり新人職員が安心して現場に入れるようになった。

今後もマニュアルの見直しを行い、活動を継続することにより、利用者様の口腔内の清潔保持し最期まで美味しくお食事を召し上がっていただけるよう支援していく。

引用・参考文献

- 1) 歯科衛生士のための摂食・嚥下リハビリテーション, 医歯薬出版
- 2) 歯科衛生士のための口腔介護実践マニュアル, MC メディカル出版



チームケア学会 研究発表抄録

題名	歯っはっはっ ～食物残渣ゼロの取り組み～		
法人名	社会福祉法人大和会	事業所名	特別養護老人ホーム 和光園
発表者	※寒川大佑 藤井一也	共同研究者	桑原武士 遠藤望美
サービス種別	入所【病院・ <u>特養</u> ・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

口腔内に食物残渣が多く、口腔ケアが不十分なことが気になっていた。問題抽出のためにアンケートを行った結果、知識・技術、環境の不備の課題があがった。そこで今回歯科医師と連携し、適切な技術の習得を行った。さらに担当職員の声掛け等により意識が変化したことで継続した活動ができ、食物残渣が除去され口腔内の清潔が保持できた取り組みについて報告する。

II 目 的

1. 口腔ケアの技術習得と環境整備の実施
2. 食物残渣がなくなり、口腔内の清潔を保持する
3. フロア全体の口腔ケアに対する意識を変化させる

III 方 法

1. 研究期間：2020年10月～2021年6月
2. 研究対象

自歯があり介助必要な利用者6名、2階職員21名

3. 具体的方法

- 1) 資料・動画を使用した自己学習、担当職員の対面指導による技術の指導と口腔ケアの場所の確保・物品の手配などの環境整備
- 2) 対象利用者を選定し、歯科医師により月毎に口腔内の評価を行い、口腔内の状態をフロアで周知
- 3) 積極的な声掛けと現場からの意見を吸い上げ、それに対しアドバイスと問題点の改善

IV 倫理的配慮

本研究は利用者または家族に同意を得ている。

V 結 果

1. 歯科医師と連携し正しい知識を習得したことで、対象者以外の利用者にも応用することができた。
2. 対象利用者に対する適切な技術を習得し、実施したことで、食物残渣がゼロになった。

3. 口腔ケア場所を2か所から4か所に増やし、使用する場所ごとに利用者を振り分け動線を確認した。
4. マニュアル整備し口腔ケアの一連の流れを作った。
5. 口腔ケアに対するフロア全体の向き合う姿勢が変わり、習慣的に行うようになった。
6. 現在も状況に合わせて口腔ケアを実施することができており、口腔内の清潔は保持されている。

表1. A氏月評価8項目の合計点（良0点・悪24点）

月	11月	12月	5月	6月
合計点	18	7	4	1

VI 考 察

今回歯科医師と連携し、写真と文書を使い対象利用者に合わせた資料や動画作成を行い、自己学習を促した。その後、対面指導を行ったことでイメージができた。それらを用いて実際に行ってみた中で十分に行えていないところや、自信がないところは資料や動画を用いて用途別に繰り返し見直せたことが、技術の習得に効果的だったと思われる。

次に担当職員の積極的な声掛けや取り組みに対する姿勢を見ることで一人ひとりの口腔ケアに対する意識が高まり、自覚が芽生えた。また評価結果を都度伝えたことで口腔内が清潔になっていくことを実感できた。さらに職員の意見を吸い上げ取り入れたことにより、自信や達成感が生まれモチベーションの向上にもつながり、フロア全体の口腔ケアに対する取り組み方が変化したのではないかと考える。

今回技術の習得ができたことと担当職員の働きかけによってコロナ禍においても継続的に進め、口腔内の清潔は保持できた。

参考文献 1) 前川美智子：動作の“なぜ”がわかる基礎介護技術,P87～94,中央法規出版,2018



チームケア学会 研究発表抄録

題名	職員が求める育成環境からみえた今後の展望		
法人名	社会福祉法人苗場福祉会	事業所名	アーバンリビング鳥屋野
発表者	※三浦巳記	共同研究者	西村琴美 菅野南 久我祐香 金田諒
サービス種別	入所【病院・特養・老健・ 有料 ・サ高住】 通所【 デイサービス デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他 短期入所・栄養科】		

I はじめに

A 社会福祉法人では、28年に渡りプリセプター制度を用いて新人育成に取り組んできた。しかしB事業所では、シフトの関係上、複数の指導者が1人の新人を担当し、業務遂行型の育成となった結果、精神的ケアは後手に回るケースが多く存在した。それにより入職3年以内に退職する職員もいたため、2020年度から「メンター制度」の精神的支えという目的に着目した。精神的ケアに重点を置いたメンター制度導入の取り組みを報告する。

II 目的

法人の育成手段の課題を明確にし、委員会運営に提言する。

III 方法

1. 研究期間：2020年4月1日～2021年6月30日
2. 研究対象

アーバンリビング鳥屋野職員(42名)

3. 具体的方法

- 1) プリセプターシップにメンターを配置する
- 2) 職員の育成環境についてのアンケート
- 3) 委員会、事例研究チームでの検討会

4. 評価尺度

- 1) アンケート結果によるパーセントスコア
- 2) 2020年からの退職者推移

IV 倫理的配慮

調査対象の職員に説明し、誓約書にて同意を得た。

V 結果

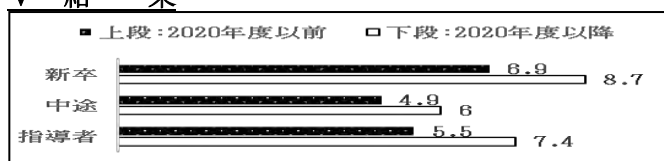


図1. 育成環境満足度（10段階）

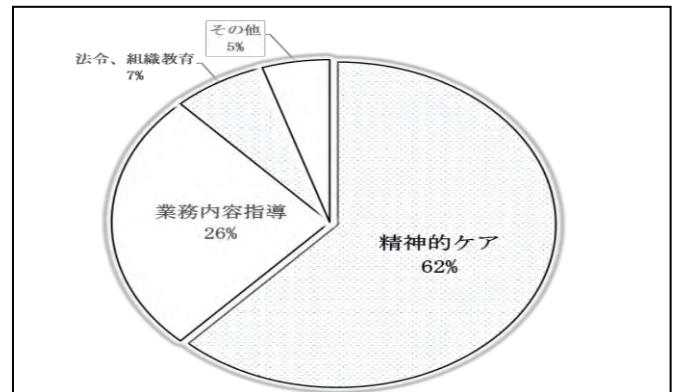


図2. 育成環境に求めること

表1. 3年以内退職者推移（名）

	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
新卒	5	4	0	0
中途	1	3	1	0
合計	6	7	1	0

図1.2、表1.からメンター制度の目的でもある精神的支えとしてメンターを配置した形が功を奏した。

VI 考察

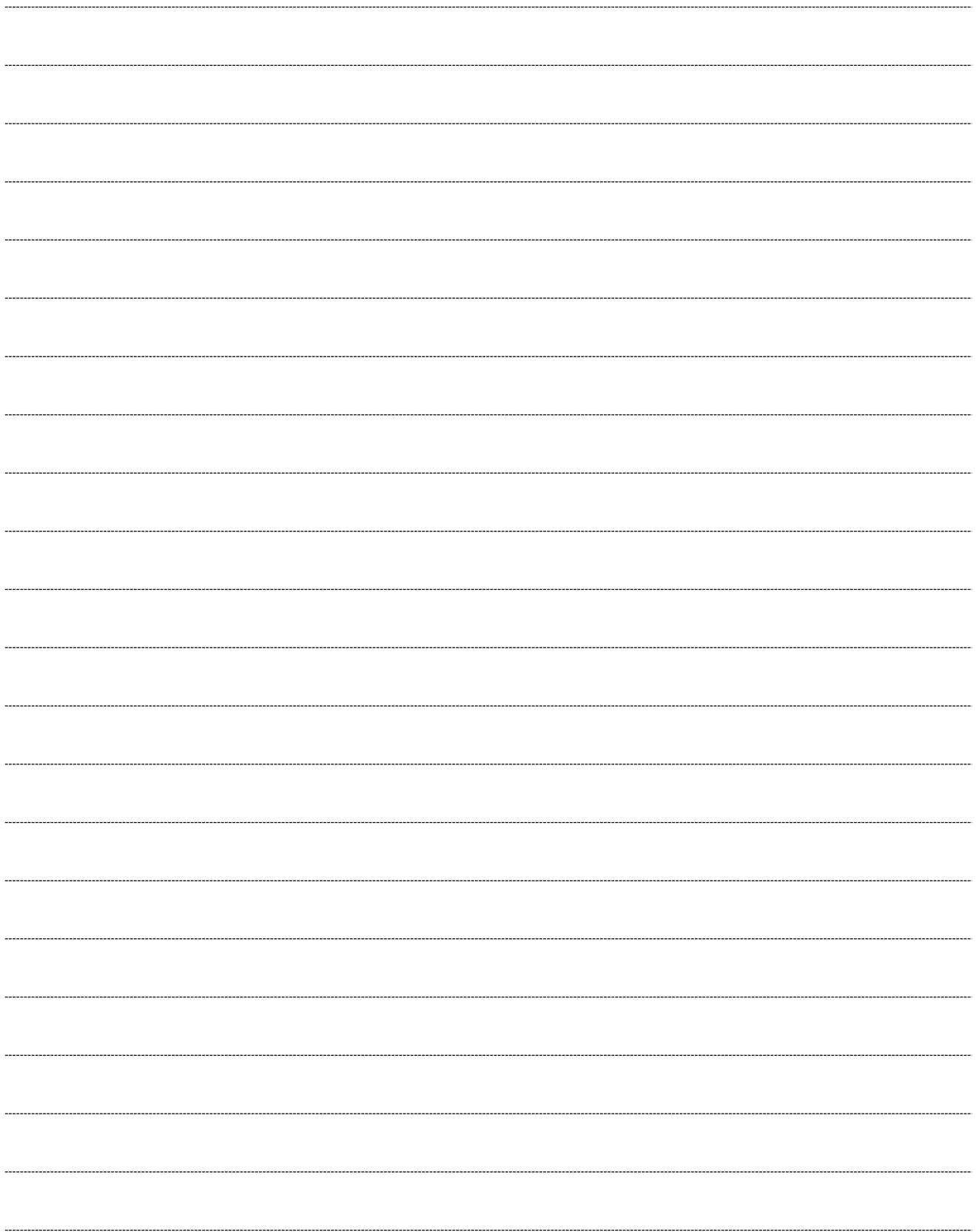
プリセプター制度は必要に応じ、メンターを配置する体制もあるが、法人内でどれだけ理解されているだろうか。立ち止まって考えてみると、業務遂行型育成になっていないだろうか。今回は従来型施設の結果であったが、特にユニット型施設こそメンターを配置し様々な立ち位置から新入職員や育成担当者の孤独や不安に寄り添う必要があると考える。

介護人材不足が懸念される中、獲得した人材を介護現場から離してはいけない。法人、施設で育成というテーマについて理解を含め実践能力を培う必要上、次年度の教育委員会へメンター制度導入を提言したい。

参考文献

- 1) 田家英二：介護職員の人材育成に関する文献的考察 鶴見大学紀要. 第3部, 保育・歯科衛生編 2017





研究発表会

《ROOM 2》

抄録

9 月 16 日 (木)

チームケア学会 研究発表 【 ROOM 2 】

発表時間		法人	題名	発表者	ページ
1	10：00 10：15	医療法人社団 藤友五幸会	お客様の希望を叶える為の第一歩 ～お誕生日御膳～	天野 ほのか 田中 悠吏見	33
2	10：15 10：30	医療法人 北辰会	みらいあグループ内託児所の食事、おやつに対する取り組み	孕石 麻彩	34
3	10：30 10：45	社会福祉法人 日翔会	食欲不振解消 ～亜鉛の力で食事摂取量アップ！！～	藤原 美加	35
4	10：45 11：00	医療法人社団 ひがしの会	口腔ケアによる QOL の向上について	小竹 涼帆	36
11：00 11：15		休憩（15分）			
5	11：15 11：30	社会福祉法人 苗場福祉会	一人で立ってお手洗いにいきたいんだ ～要介護4の90歳代の挑戦～	大森 葉月 菅谷 彩乃	37
6	11：30 11：45	社会福祉法人 苗場福祉会	活気に溢れた日常を再び	佐野 琢磨	38
7	11：45 12：00	医療法人社団 百葉の会	日常生活動作（ADL）を低下させない！ ～取り組みと課題～	平生 剛大 岩田 裕矢	39
8	12：00 12：15	医療法人社団 百葉の会	リハ特化デイサービスの重度化防止への取り組み ～フレイル基準を用いて～	田中 駿	40
9	12：15 12：30	医療法人社団 百葉の会	高齢者の生きる意欲にもたらす影響 ～デイサービスでの畑の取り組み～	櫻井 貴輝 栗山 浩一	41
12：30 13：30		休憩（1時間）			
10	13：30 13：45	医療法人社団 平成会	舌苔の汚れを絶対治す	山田 愛美	42
11	13：45 14：00	医療法人社団 緑愛会	高齢者のスキンケアについて	高橋 太	43
12	14：00 14：15	社会福祉法人 湖星会	施設再生への取り組み ～問題点の振り返りと目標管理への取り組み～	西田 裕佳	44
13	14：15 14：30	医療法人社団 平成会	いつまでも住み慣れた家で ～笑顔のある生活を～	小川 富子	45
14：30 14：45		休憩(15分)			
14	14：45 15：00	医療法人社団 百葉の会	実現！！多職種連携イベント ～楽しいと専門知識の融合～	石井 彩佳	46
15	15：00 15：15	社会福祉法人 湖成会	「得意」を生きがいに	大石 ふづき	47
16	15：15 15：30	医療法人社団 緑愛会	介護予防啓発事業「こやまハツラツ教室」の取り組み	大越 新那 長谷川 直輝	48
17	15：30 15：45	株式会社 ケアハーモニー	住み慣れた街で幸せに暮らすために ～地域連携と困難事例への挑戦～	矢野 亜里沙 水越 史江	49

チームケア学会 研究発表抄録

題名	お客様の希望を叶える為の第一歩 ～お誕生日御膳～		
法人名	医療法人社団藤友五幸会	事業所名	おおふじ五幸ホーム 食事サービスチーム
発表者	天野ほのか 田中悠吏見	共同研究者	食事サービスチーム職員
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【 <u>デイサービス</u> デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 短期入所・栄養科 】		

I はじめに

A 事業所では利用者の誕生日の対応として、毎月 10 日に一斉にお祝いする形であった。コロナ禍において施設内でのイベントも縮小し、面会制限等により利用者の生活の中で食事の重要性が高まっている。当施設内で行われた 2020 年度の嗜好調査でも、82%が食事を楽しみであると回答している。そこで、誕生日当日に利用者の好物を特別に提供し、楽しみや特別感を与えたいと考えた。

II 目的

ひとりひとりの思いや希望を叶えたお誕生日御膳を誕生日当日に提供し、個別ケアの推進を目指す。

III 方法

1. 研究期間:2020 年 9 月 7 日～2021 年 5 月 31 日

2. 研究対象

1) 2021 年 3 月 1 日～2021 年 5 月 31 日に誕生日を迎える利用者（男性 7 名、女性 17 名、計 24 名）

2) 2021 年 6 月在籍中の A 事業所 職員

（介護職員、看護師、ケアマネ、相談員、計 52 名）

3. 具体的方法

1) メニューの検討

2) 当部署職員が事前に希望のメニューを聞きとる

3) お誕生日御膳を提供し、利用者へ感想を聞く

4) 食事摂取量調査

5) 職員へアンケート実施

4. 評価尺度

食事摂取量の比較、利用者の反応・感想、職員アンケート実施

IV 倫理的配慮

対象者には口頭と文書にて説明を行い、研究協力の同意を得た。

V 結果

1. 食事摂取量集計

利用者 24 名中 21 名が完食し、普段との摂取量比較は主食 13%の増加、副食 7%の減少がみられた。

2. アンケート結果

利用者はお誕生日御膳の取り組みを喜ばれていたか？という質問は利用者が一番近くで関わっている介護職員と看護師の 95%が喜ばれていたと回答した。ケアマネから家族へ当日の記念写真を手渡した際は「元気そうで安心した」等、感謝の声を頂いている。

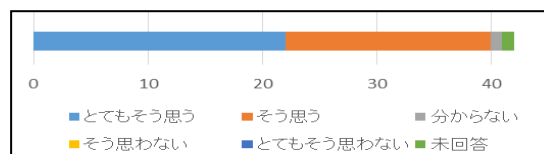


図1 「利用者は喜ばれていたか」 (人)

VI 考察

「施設入所高齢者にとって誕生日は、行事食の中で唯一個人的にお祝いされる年に一度の晴れの日であり、特別な喜び、満足感を実感できる日である」¹⁾と言われている。今回の取り組みは、アンケート結果や利用者の表情からとても喜ばれており、以前と比較して個別ケアの推進ができたと考えられる。

現在は指定したメニューの中から選択しているが、今後は利用者の本当に食べたいものを提供できるような仕組みを作ることが課題となっている。また、他部署職員との連携が十分に取れていなかった為、周知方法の見直しなどを行い施設全体で盛り上げていきたい。

参考・引用文献

1) 吉田真弓ら：特別養護老人ホーム入所者の食事満足度の測定, 藤女子大学 QOL 研究所紀要, 41-53, 2007



チームケア学会 研究発表抄録

題名	みらいあグループ内託児所の食事、おやつに対する取り組み		
法人名	医療法人北辰会	事業所名	蒲郡厚生館病院
発表者	孕石 麻彩	共同研究者	沢田 恵美
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他 【託児所】		

I はじめに

託児所職員から食事、おやつ内容について不満が聞かれ、また、栄養科内で乳児・幼児期の食事内容に関する知識が統一されていなかったりし、献立作成の際、個々で内容に差が生じていた。

II 目 的

本研究は託児所での献立内容について不満、要望をまとめ、栄養科内での乳児・幼児期に対する食事内容の知識統一を図り、利用児への食事に対する興味や満足度を向上させることを目的とした。

III 方 法

1. 研究期間：2021年4月1日～2021年7月3日

2. 研究対象：Aグループ内の託児所利用児

(主に1～3歳)8名と職員

3. 具体的方法

- 1) 託児所職員へ現状の不満、食事内容に関する要望についてまとめてもらい、それに対して改善を図る。
- 2) 栄養科内での乳児・幼児期に対する食事内容について統一を図れるようマニュアルを作成する。
- 3) 実際に献立を変更した際に、管理栄養士、託児所職員より利用児の反応を確認する。

4. 評価尺度

主観的にはなるが、託児所職員による利用児の食事に対する態度、食事内容に関する不満は減少しているのか聞き取り調査を実施する。

IV 倫理的配慮

利用児の保護者に対し個人情報とプライバシーの保護に配慮することを説明、同意を得た。

V 結 果

託児所職員からの食事に対する不満、要望は主に以下3点が挙げられた。

1. 主食の提供量が日により異なる。

主食量は量の基準を設けていなかった為、離乳完了前(1歳6か月頃)は軟飯100gと設定した。

2. 嗜好にあっていない。

年度ごとに利用児の特徴は異なり、適時託児所職員と意見交換する機会を取り入れるようにした。現在の利用児は、食事に関しては麺類・揚げ物を好む傾向にある為、提供回数を増加した。おやつ内容に関しては、残食量が多いものは提供をやめ、果物の頻度を増やした。

3. 子供たちの喜ぶメニューを提供してほしい。

飾り切りや、要望のあるメニューを適時取り入れることによって、食事への興味を引き出すことをした。

4. 1～3の結果をふまえ、基本の食事、おやつの提供に関するマニュアルを作成した。

5. 食事観察を実施し、利用児の「おいしかったよ」「全部食べることができたよ」という声があったり、いつもとは異なる食事を提供することで食事への興味が増えたりしていたと託児所職員から報告があった。

VI 考 察

今回の研究で、年度ごとに利用児の特性は変わることが分かった。継続して適時託児所職員と連携を図り、利用児の食事に対する興味、満足度の維持・向上に努めていきたい。



チームケア学会 研究発表抄録

題名	食欲不振解消～亜鉛の力で食事摂取量アップ！！～		
法人名	社会福祉法人 日翔会	事業所名	特別養護老人ホームゆずり葉
発表者	※藤原 美加	共同研究者	高山瑞貴、山根祥子
サービス種別	入所【病院・ <u>特養</u> ・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

高齢に伴い、食事が食べられなくなっていくお客様がおられる。「少しでも多く食事を食べて、元気に毎日を過ごしてほしい。」との思いから、食欲不振の原因の一つとして、「亜鉛不足」の可能性あることを知った。積極的に亜鉛を摂取することで、食欲不振が改善し、食事摂取量が増えるのではないかと考えた。

II 目 的

亜鉛を含む食品を提供、摂取して頂くことで、食事摂取量のアップを図ることを目的とする。

III 方 法

1. 研究期間 2020年12月～2021年2月

2. 研究対象

- 1) 食事摂取量の少ない入所者
- 2) 食事制限のない方
- 3) 主治医へ相談し「問題ない」と回答を得られた方
入所者90名のうち、1)～3)の条件に当てはまる方12名を選出し、研究対象とする。

3. 具体的方法

- 1) 亜鉛含有量の多い嗜好飲料品である、ピュアココアを使用する。
- 2) ピュアココア20gと人工甘味料を混ぜたものを、1日2回100mlのお湯に溶かし食事と共に提供。
- 3) 摂取前と3ヶ月後の食事摂取量・体重を比較する

4. 評価尺度

食事摂取量と体重を比較して評価を行う。

IV 倫理的配慮

研究の目的、取り組み内容をご本人様、ご家族様に説明し、同意を得ている。また個人の特定ができないよう氏名はアルファベットで表記する。

V 結 果

1. ピュアココアを使用し、3食平均摂取量を比較したところ、3カ月後に増えたのは9名であり、全体の75%を占めた。1名は摂取量が研究開始前よりマイナスとなった。次に、体重を比較した結果、1人あたりの平均が1.4kgの増であった。
2. 人工甘味料を混ぜて飲みやすくしたことで、12名全員が残されることなく飲んでいただくことができた。
3. 12名の内1名は研究期間内に退所となった。

VI 考 察

高齢になると味覚が薄くなるが、甘味は最後まで残りやすいと言われている。ピュアココアに人工甘味料を加えたことにより摂取しやすくなり、食事摂取量のアップや体重増加につながったと考えられる。また、お客様の発語が増えたり、表情が豊かになったり等の変化も見られた。今回の研究は、亜鉛不足の可能性があると考え、取り組みを行ったが、ピュアココアでどの程度「亜鉛不足」を補うことが出来たのかといったデータは明らかになっていない。これを踏まえ、今後は医師や看護師と協力し、血液検査や医学的データの活用を行い、支援に取り組んでいきたい。

参考文献

- 1) 西内美香：亜鉛経口投与による摂食促進効果に関する研究
- 2) 菊永茂司・小坂和江：高齢者における亜鉛の栄養状態と身体機能, 2013
- 3) 「八訂 食品分析表」P250～251, 女子栄養大学出版部, 2021



チームケア学会 研究発表抄録

題名	口腔ケアによる QOL の向上について		
法人名	医療法人社団ひがしの会	事業所名	小規模多機能ホームみのりの里安芸津
発表者	※小竹涼帆	共同研究者	愛田信之 市原広隆
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム <u>小規模多機能</u> ・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

当事業所において歯磨きや歯科受診を適切に出来ている方は少ない。口腔内を清潔に保つことで残存歯を守り、歯周病の改善・予防を図るための研究を行った。

II 目 的

本研究の目的は、口腔内の衛生状態の改善・維持により食事を含めた QOL の向上を目指すことである。

III 方 法

1. 研究期間:2021 年 4 月 20 日～2021 年 6 月 30 日

2. 研究対象

A 様 要介護 1 80 代男性 日常生活自立度Ⅲa

B 様 要介護 1 70 代女性 日常生活自立度Ⅱb

3. 具体的方法

1) 2021 年 4 月 20 日～2021 年 4 月 30 日

現状把握(口腔内の状態、口腔ケアが出来る環境、能力の確認)と評価

2) 2021 年 5 月 1 日～2021 年 5 月 10 日

口腔ケアの方法検討・実践自宅用・事業所用口腔ケアセットを用意して頂く。

3) 2021 年 5 月 15 日～2021 年 5 月 31 日

経過確認・1 次評価・見直しを行い、通い時、昼食後配食時は訪問し、食前に歯磨きを声掛けにて促す。

4) 2021 年 6 月 1 日～2021 年 6 月 30 日

評価実施。来所時食後の歯磨き、配食時食前の歯磨きに加え配食後の口腔ケアを視覚的に分かり易くする。

4. 評価尺度

口腔アセスメント【OHAT】を用いて評価する。

IV 倫理的配慮

本研究について対象者とご家族に口頭、書面両方で説明し同意を得た。

V 結 果

1. 2021 年 4 月 20 日～2021 年 4 月 30 日

A 様:残存歯 上 0 本、下 4 本であった。

B 様:下前歯 1 本、下奥歯 2 本抜けていた。

A.B 様宅の洗面所には歯ブラシはあったが埃をかぶっており使っている形跡がなかった。

2. 2021 年 5 月 1 日～2021 年 5 月 10 日

洗面台に歯磨きセットを設置するもご自身の意思で歯を磨かれている様子なし。

3. 2021 年 5 月 16 日～2021 年 5 月 31 日

訪問時、通い時ともに口腔ケア促しに対し、拒否なく実施される。

4.2021 年 6 月 1 日～2021 年 6 月 30 日

通い時食後の口腔ケア、配食時食前の口腔ケアは拒否なく実施される。配食時食後の口腔ケアの促しは指示書を使用し視覚的に分かり易くした。

OHAT スコア表による評価では研究開始時から変化は見られなかった。

VI 考 察

取り組み開始当初は『なんで磨くんかいね?』との発言あったが進めていくうちに『なんで?』の疑問は少なくなった。“歯を磨く”という行為に慣れてきていると考える。また、食卓に手作りボードを置くことで視覚的な促しを試みたが効果はなく、食後に磨かれている様子はなかった。「後でやろう」という思考にはなるがすぐに忘れていると考えられる。

これからも口腔ケア促しを継続し、まずは口腔ケアを習慣づけできるようにしていく。そしてこれ以上の悪化を防げるよう働きかけを継続し、QOL の向上を目指し取り組んでいく。

参考文献 :アサヒグループ食品 口腔アセスメント



チームケア学会 研究発表抄録

題名	一人で立ってお手洗に行きたいんだ～要介護4の90歳代の挑戦～		
法人名	社会福祉法人苗場福祉会	事業所名	特別養護老人ホーム ケアカレッジ
発表者	※大森葉月・菅谷彩乃	共同研究者	加藤理恵子・田中勝人
サービス種別	入所【病院・ 特養 ・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

A氏は、骨折後終日ベッド上で排泄介助を行っていたが、車椅子からの立ち上がりが頻回で、その都度本人の気持ちを落ち着かせて対応していた。職員は毎日事故のないように過ごしてもらいたい気持ちが強く、A氏の立ち上がりは認知症による行動と考え尿意がありトイレで排泄したいとの気持ちを理解することができずにいた。

新たな転倒事故を機にA氏の気持ちに寄り添い機能訓練をしたことで日常生活動作が向上し、他の疾患も改善できたなど、予想以上の成果が得られた事例を報告する。

II 目 的

行動の原因を解明し、意向に沿った機能訓練を実施することでA氏の日常生活動作が向上する。

III 方 法

1. 研究期間

2018年6月1日～2021年3月31日

2. 研究対象：A氏 女性 要介護4 90歳代

障害高齢者の日常生活自立度 B2

認知症高齢者の日常生活自立度 III b

既往歴 アルツハイマー型認知症

両大腿骨頸部骨折（術後）

3. 具体的方法

機能訓練の実施

- 1) 排泄誘導の実施
- 2) 車椅子と椅子(トイレ)の移乗訓練
- 3) 下肢の関節可動域訓練と筋力強化訓練
- 4) 車椅子の自走練習
- 5) 手摺を使用し立ち上がり立位保持訓練

4. 評価尺度

日常生活動作(ADL)の前後評価

トイレ排泄の有無

IV 倫理的配慮

ご家族に事例研究の発表と写真等を使用する旨を書面にて許可を頂く。また、当研究は湖山医療福祉グループのチームケア学会のみで使用する事を同意頂く。

V 結 果

ADL 変化	2018年6月	2021年3月
立ち上がり	全介助	一部介助
立位保持	不可	手摺があれば可能
移乗	全介助	一部介助
排泄方法	オムツ	リハビリパンツ
排泄場所	ベッド	トイレ

・機能訓練を行うことで上記ADLが向上し、骨折前と同じケアが可能になった。また、副次的効果として、臀部の痒みや、掻き壊しによる表皮剥離も解消した。移乗も職員2人から1人の介助に負担軽減できた。

VI 考 察

当初は骨折事故の再発を重視するがあまり、A氏の「トイレに行きたい」という行動背景を重視したアセスメントができなかったが、利用者の行動には意味があることを再確認させられ、潜在的な本人の欲求を探り実現させることで、事故を減らし、その方らしい生き方が出来ると学んだ。今後の課題は、利用者の行動の1つひとつの意味を考え、その方に合った評価スケールでチームアセスメントを実践できる職員の育成に取り組んでいく。

参考文献 1) 認知症介護実践研修標準テキスト, 監修 認知症介護研究・研修センター



チームケア学会 研究発表抄録

題名	活気に溢れた日常を再び		
法人名	社会福祉法人苗場福祉会	事業所名	デイサービスセンター アルマ美浜
発表者	※佐野琢磨	共同研究者	泉さおり、竹森孝之
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【 <u>デイサービス</u> ・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

末期癌で余命宣告を受けていたが、その事をご本人は知らないA氏。癌になる以前はガーデニングや手芸など気になる事は何でもやってきたそうだが、ご利用開始直前の居宅訪問時には「とにかく歩きたくない。寝ていたい。疲れるから何もしたくない」と無気力な様子であった。

II 目 的

デイサービスを利用することで無気力状態が改善し日常生活への意欲を取り戻してもらう。

III 方 法

1. 研究期間

2020年9月18日～2021年6月25日

2. 研究対象

60歳代 女性 要介護2 当初週2回利用 元美容師
屋外車椅子移動、屋内ピックアップ歩行器移動
身体障がい者3級

障害高齢者の日常生活自立度：A2

現病歴：転移性脳腫瘍（右大脳半球深部）

既往歴：右乳癌、右腋窩リンパ節再発、転移性肺腫瘍

3. 具体的方法

- 1) 様々なお客様と会話ができるよう配慮し、気の合うお客様との関係性を構築していく。
- 2) 機能訓練により身体機能の向上を図り、活動意欲を高めていく。
- 3) ご本人が希望を言い出せる環境を作る。

4. 評価尺

障害高齢者の日常生活自立度(寝たきり度)

IV 倫理的配慮

本研究はご本人・ご家族に口頭及び書面にて同意を得ている。

V 結 果

1. 特定の方と会話が弾んでいる様子が見られ、徐々に笑顔が増えるようになり、製作物への取り組みへ共に参加されるようになる。月が替わると「今月は〇〇作ったらいいんじゃない？」と提案して下さり、自ら製作物に取り組みられるようになった。
2. 初めはご本人の調子を伺いながら屋内歩行を重点的に実施し、意欲のない日は屋上へ車椅子で行き気分転換を図った。徐々に連続歩行距離が向上しそれと共に意欲の向上もみられ屋内移動形態がピックアップ歩行器⇒T字杖となり、自ら屋外歩行を希望されるようになった。屋外歩行の際には「外を歩くのは久々だから嬉しい」と話されていた。機能訓練中に話をしている中で「家族と一緒に外に出てきたよ！」と外出の話をされていた。
3. 髪の毛の伸びている職員を見て散髪を提案して下さり2名散髪をしていただいた。
4. A1レベルに機能・意欲向上し、週2回から3回へ利用回数が増えた。

VI 考 察

A氏にとって、他者とのコミュニケーションの活性化が、居心地の良い環境の創出に寄与し、自らやりたい事を提案できる人間関係が構築できたと考えられる。本事例の当初の目的を超え、自ら外出されるほどの変化を生み出したのは、デイサービスの多くのお客様やスタッフの関わりであり、本ケースで学んだ個に向き合う事の重要性を今後の様々なケースに生かしていきたい。

参考文献

- 1) 山口建：親ががんになったら読む本



チームケア学会 研究発表抄録

題名	日常生活動作（ADL）を低下させない！～取り組みと課題～		
法人名	医療法人財団 百葉の会	事業所名	デイサービスセンターアルク富士
発表者	平生剛大 岩田裕矢	共同研究者	井口智香 佐野牧子 大木一真
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【 <u>デイサービス</u> ・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

A事業所では、リハビリ特化型デイサービスとして、身体機能へのアプローチはもちろんのこと生活面に特化した機能訓練にも力を入れている。研究のきっかけとして A 事業所の取り組みにより日常生活動作（Activity of Daily Living:以下 ADL とする）にどのような変化があるのか知りたい、その変化を数値として現場に伝わるように可視化していきたいという思いからスタートした。

II 目 的

A事業所を利用する要介護認定を受けた方を対象とし、リハビリ特化型デイサービスでの取り組みにより得られたお客様の ADL 能力の変化を可視化し、成果と課題を明確にする。

III 方 法

1. 研究期間

令和 2 年 6 月 1 日～令和 3 年 5 月 31 日

2. 研究対象

A事業所利用者様の中で要介護認定者 56 名
(平均年齢:81.7±10.6 歳 平均介護度:2.2±1.0)

3. 具体的方法

- 1) ADL 低下予防のための個別機能訓練、生活動作における機能訓練、チームでの取り組みを実施する
- 2) ADL 能力を Barthel Index（以下 BI とする）で数値化し、食事、排泄、更衣に焦点を当て、取り組み実施前後での BI の推移を可視化する
- 3) 結果から A 事業所での取り組みについて見直し、成果と課題を明らかにする

4. 評価尺度

期間内で各項目の BI 値が向上した層、値に変化がなかった層、BI 値が低下した層に分け、期間内の最

も古いデータと新しいデータを比較した。

IV 倫理的配慮

今回の発表に掲載される情報、写真掲載については御本人、御家族より承諾を得ている。

V 結 果

56 名の対象者に定期的に訓練を実施した。

BI の変化を表 1 に示す。

表 1：BI の推移 (単位；人)

	向上	維持	低下
食事	3	51	2
排泄	5	49	2
更衣	9	46	1

VI 考 察

ADL 能力の低下を防ぐ為には、各種 ADL の低下項目とケアの実態を明らかにする事が重要である。林らは要介護高齢者を対象として ADL の調査を行い、わずか 6 ヶ月間で ADL が低下する¹⁾ 事を報告しているが我々の研究結果では特に更衣動作において上向きに転じた。低下層に関しては、一概に身体機能の低下だけでなく認知機能面や活動意欲の低下等が要因として挙げられ、A 事業所での取り組みとして身体機能における機能訓練だけではなく日常生活動作に結び付けた動作訓練によりこの結果に繋がったと考えられる。

在宅における「している ADL」の把握が不十分であり、「できる ADL」をケアマネージャーやご家族等に発信する機会が少なく、お客様の能力を活かしきれていないことが課題であると考えられる。

参考文献 1) 林悠太, 鈴木芽久美, 波戸真之介：通所介護サービスを利用する要介護高齢者の ADL 低下に関連する運動機能, 2017



チームケア学会 研究発表抄録

題名	リハ特化デイサービスの重度化防止への取り組み～フレイル基準を用いて～		
法人名	医療法人財団 百葉の会	事業所名	デイサービスセンター アルク富士宮
発表者	※田中 駿	共同研究者	
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【 <u>デイサービス</u> ・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

フレイルとは、要介護の前段階の状態と言われている。フレイル基準では、身体に関する5つを評価する。

野村らは、介護認定非該当者のフレイルの現状を報告しているが¹⁾介護認定者での研究報告は少ない。また、介護保険下でも重度化防止や自立支援が求められている昨今、この指標を通して評価することに意味があるのではないかと。そこで、本研究では、要介護認定者におけるフレイルの現状を把握し、実施してきたサービスの重度化防止に対する有用性を検討する。

II 目 的

A事業所に通う要介護認定者のフレイルの現状と変化を明らかにし、サービスの有用性を考察する。

III 方 法

1. 研究期間

2019年1月1日～2020年12月31日

2. 研究対象

A事業所を利用し、体重・握力測定を複数回以上実施しているお客様男性30名、女性35名、計65名
(平均年齢：82.8歳、平均介護度：2.1)

3. 具体的方法

- 1) 体重と握力を測定。介護度は経過を観察する。
- 2) マシントレーニング15分・小集団体操20分、レクリエーション20分×2回以上をご利用時に実施。

4. 評価尺度

体重減少と握力低下、両方該当を「フレイル濃厚群」、一方該当を「プレフレイル群」、両方非該当を「健常群」とし、2年間の変化を介護度と併せ比較する。

IV 倫理的配慮

対象者・ご家族に書面にて同意を得ている。

V 結 果

表1 2年間のフレイル基準比較

	2019年	2020年
フレイル濃厚群	9名(13.8%)	10名(15.3%)
プレフレイル群	44名(67.6%)	43名(66.1%)
健常群	12名(18.4%)	12名(18.4%)

表2 介護度の変化とフレイル基準の変化

2年間での 介護度の変化		フレイルの変化		
		向上	維持	低下
軽度化	5名	1名	4名	0名
変化なし	45名	7名	31名	7名
重度化	15名	0名	12名	3名

対象者に方法通り毎回サービス提供・運動実施できた。

VI 考 察

介護度が軽度化・変化なしの50名の内、43名はフレイルが維持・向上されており、身体機能の維持・重度化防止ができていたことがわかった。フレイルには多面的な運動プログラムが推奨されている。²⁾A事業所における、リハビリ職員によるマシントレーニングでの抵抗運動や小集団体操でのバランス訓練、レクリエーションや屋外歩行による有酸素運動などが身体機能に対して効果的であり、「リハビリ特化型」としての取り組みが身体機能維持に有用だったと考える。

今回は2項目のみの検討であったが、介護度の変化と併せることで高齢者の身体機能把握の指標として活用できる可能性があると考えます。

参考文献

- 1) 野村敬子他：地域在住高齢者の主観・客観的健康評価に関する検討 -プレフレイル・フレイルの現状と課題- 人間福祉学誌. 19巻(2020)2号 51-57
- 2) 牧迫飛雄馬：老化とフレイル-早期発見と効果的介入をデータから考える- 理学療法歩み 28巻



チームケア学会 研究発表抄録

題名	高齢者の生きる意欲にもたらす影響～デイサービスでの畑の取り組み～		
法人名	医療法人財団 百葉の会	事業所名	デイサービスセンターアルクそてつ
発表者	櫻井貴輝 栗山浩一	共同研究者	
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【 <u>（デイサービス）</u> ・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

A デイサービスでは、機能訓練に力を入れているが、運動や身体活動以外の時間を有意義に過ごしていただくことも重要ではないかと考えた。厚生労働省の調査では、農業活動が高齢者の心身や認知機能への成果、及び生きがい向上に繋がることの結果が出ていた。そこで、A 施設でも利用者の意欲を高め、生きがいに繋がりたいと思い、畑作業に取り組んでみようと考えた。

II 目的

畑作業を行うことが、利用者の意欲・生きがいに繋がっているかを評価する。

III 方法

1. 研究期間：2019年9月1日～2021年6月30日
2. 研究対象：デイサービス利用者の内、畑作業を希望された6名（男性2名、女性4名、平均年齢90.3歳、平均介護度0.89）
3. 具体的方法
 - 1) 開始前に企画会議を開催し、具体的な計画を立案
 - 2) 対象者の言動の変化を観察する。
 - 3) 意欲の評価は、「Mood Check List-Short Form5（以下、MCL-S.1）」を用いた。

IV 倫理的配慮

今回の研究発表については、プライバシーに配慮し、研究対象者とその家族に書面にて同意を得た。

V 結果

【企画会議・対象者の言動】畑の名称を「そてつファーム」と決定、対象者が職員を立派な農業家に育てることを目的とした。看板デザインは、利用者と職員から公募した中から決定した。A・E氏は、藁や肥料、道具等を持参し、職員に使い方を主体的に指導していた。B氏は歩行器歩行の為直接作業は少なかったが、

農作物の成長を楽しみにし、職員に声掛けや助言をしていた。C・D氏は積極的に作業に参加し、職員に野菜の育成方法や収穫時期等を指導していた。F氏は他者と会話しながら、楽しく作業していた。途中、A氏はADLが向上し自宅で畑作業をするため利用中止となり、B・C氏は施設入所となり利用中止となった。

【MCL-S.1の結果】A氏は利用中止にて評価不可。B氏は快感情が向上、C氏は快感情・リラックス感が大きく向上した。D氏は最終評価で全項目が大きく減点、F氏は途中で全項目が減点したが最終で向上した。

VI 考察

MCL-S.1 結果からは、農作業が意欲の変化に関連するとは言い難い。デイサービスでの活動は、対象者の生活の一部であり、それ以外の家庭環境等が生きる意欲に影響を与えることが推測できる。しかし、快感情やADLが向上した対象者がいたことや、対象者全員が何らかの形で作業に関わり、意欲的に取り組む姿勢からは、畑作業が高齢者の意欲や生きがいに繋がったのではないかと考える。野村は「高齢者は生きがいを喪失しやすいものの再獲得できる力をもつ²⁾」と述べている。今回、畑作業をするだけでなく、職員を育てることを目的として、職員と関わったことが、90歳の高齢者の生きる意欲を引き出したのではないかと推測される。今後も、高齢者が役割を持ち、生きる意味・価値を見出し、輝けるように関わっていきたい。

引用・参考文献

- 1) イチからわかる高齢者の農福連携～高齢者のゆるやか農業・農業活動～：令和元年度 厚生労働省 老人健康増進等事業
- 2) 野村千文：「高齢者の生きがい」の概念分析, 日本看護学雑誌, VOL25, p61-66, 2005.



チームケア学会 研究発表抄録

題名	舌苔の汚れを絶対治す		
法人名	医療法人社団 平成会	事業所名	小規模多機能型 健康倶楽部家「鶴成館」
発表者	佐藤 恵美	共同研究者	山田 愛実
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

A氏は数年前に認知症を発症、昨年8月に日常生活動作の低下によりA事業所短期入所を利用開始する。同年12月末よりA施設へ来られる。介助全般に抵抗、暴言・暴力行為がみられる。口腔内は舌苔が舌全体に厚く付着している状態であった。食事介助時「痛い、苦い」との訴えが時折あり、口腔内疾患の疑いを持った。しかし、抵抗が強く受診が難しい状況だったことからまずは口腔内の清潔保持に取り組むことにした。

II 目的

インターネットで、参考となる論文を見つけた。口腔ケアを適切に行うことで舌苔の除去、また、A氏の苦痛を緩和できるのではないかと考え実施した。

III 方法

1. 研究期間

令和3年2月下旬～令和3年6月30日

2. 研究対象

A氏 90代 要介護：5

診断名：アルツハイマー型認知症、アルコール性認知症、高血圧症

障害高齢者の日常生活自立度：B2

認知症高齢者の日常生活自立度：IV

3. 具体的方法

- 1) 参考文献をもとに以下の方法で職員2人対応にて毎食後口腔内洗浄介助を実施。
 - (1) 無理をせずご本人のペースに合わせる
 - (2) 口腔以外のところから触れて緊張をほぐす
 - (3) 安心して頂けるよう丁寧に声掛けをする
 - (4) 口腔内を観察し、短時間で実施する
- 2) 舌の状況を口腔内の写真を撮って職員間での周知。

4. 評価尺度

- 1) 写真による口腔内の状態の比較
- 2) 舌苔スコアの比較※舌表面を9分割し、それぞれのエリアに対して、舌苔の付着程度を、3段階(0、1、2)で評価し、合計スコアを算出する方法。

IV 倫理的配慮

対象者ご家族に本研究の説明を行い、個人情報使用に関する同意を得る。

V 結果

舌苔スコア 100%→100%と口腔衛生状態不良のままであったが、写真での比較では舌苔の減少は確認できた。次第にA氏も慣れ、暴言は吐かれるも口腔ケアに取り組み始めのような強い抵抗はなくなり、職員一人でも対応が可能となった。また、食事時の「痛い、苦い」との訴えもなくなった。

VI 考察

舌苔の減少はみられてきたが、溝状舌の改善もみられず、今後は保湿も必要と思われる。はちみつを使用した舌苔除去の先行研究を見つけ、6月下旬より開始した。また、唾液腺マッサージも実施していきたい。

参考文献

- 1) 角保徳：令和元年度業績集 高齢者の食事と栄養，口腔ケア，公益財団法人長寿科学振団，p191-199, 2020
- 2) 要介護者のための口腔ケアマニュアル，東京都南多摩保健所，p16-17, 2007
- 3) 口腔機能低下症に関する基本的な考え方，日本歯科医師会 p1, 2018
- 4) 須藤千佳子、小原美佳、安達喜美江、桜井ゆかり：はちみつを使用した口腔ケアによる舌苔の除去，厚生連医紙第18巻1号，p17-18, 2009



チームケア学会 研究発表抄録

題名	高齢者のスキンケアについて		
法人名	医療法人社団 緑愛会	事業所名	かがやきの丘 北棟 2 階
発表者	※高橋 太	共同研究者	須藤 建 竹田 ひろみ
サービス種別	入所【病院・特養・ 老健 ・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

A 氏は、2020 年 12 月頃から少しずつ身体の発赤疹と痒みが見え始めた。日を迫うごとに、発赤疹の数が増え全身に広がった。痒みに対するアレルギー薬の内服と軟膏を塗布していたが治まらず、昼夜問わず自身で掻いてしまい、皮下出血・剥離になることもあった。御家族様へ皮膚の弱い方が使える全身シャンプーを依頼し、使用を始めた。少しずつ改善が見られ、軟膏塗布の回数を減らし観察していたが、2021 年 2 月頃から発赤疹がまた増え始め、再度ケアの検討を行った。そこで、高齢者へのスキンケアを調べ実施した結果を報告する。

II 目 的

A 氏の強い痒みや苦痛を取り除く為、日常でできるスキンケアを行い治癒まで繋げる。同じような症状のあるお客様にも活用していく。

III 方 法

1. 研究期間 2020 年 12 月～2021 年 6 月
2. 研究対象 A 氏 80 代 女性 要介護 5
 <主病名> 認知症
 日常生活自立度 C2 認知症自立度 IV
3. 具体的方法
 - 1) 日常で出来る入浴スキンケアの実施
 - (1) 弱酸性の全身シャンプーを使用
 - (2) タオルを使用せず泡を作り手指での洗体
 - (3) ぬるめのお湯、短時間で入浴
 - 2) スキンケアについて棟内での勉強会を開催
 - (1) ミーティングやサービス担当者会議で
 皮膚状態の評価

IV 倫理的配慮

この研究に関する目的、取り組み内容を本人・ご家族

様に説明し、書面で同意を得ている。

V 結 果

弱酸性の全身シャンプーを使用し、泡を作り手指で洗体することで、患部・皮膚への刺激を緩和することができた。ぬるめのお湯に短時間入浴することで、身体の発赤を抑え痒みの発生を防ぐことができた。サービス担当者会議や毎日のミーティングで皮膚状態の情報共有をし、看護師と連携を図りながら対応方法を統一できた。A 氏も身体を掻く様子が減り夜間も良眠されている。6 月の研究期間中は、治癒まで至っていないが、発赤疹の範囲が狭まっており、改善傾向である。

VI 考 察

A 氏は、発赤疹の減少見られ、皮膚状態悪化することなく経過している。以前に比べ痒みの訴えも減り、落ち着かれている。身体を掻く様子も減り、皮下出血・剥離もなくなった。しかし、A 氏の全ての苦痛を取り除くことができていない為、取り組みを継続し、1 日でも早く苦痛の無い生活に戻れるように支援していきたい。今回の事例をきっかけにお客様の皮膚状態に合わせたケアの見直しや勉強会を開催したことで、お客様の皮膚状態をよく観察し、ケアを統一することができた。また、スキンケアの重要性を再認識し、スキルアップに繋げることができた。今回対応した A 氏の事例を参考にし、今後もお客様の様々な皮膚トラブルを改善できるよう、ケアを実践していきたい。

参考文献

- 1) 福田英嗣編：WOC Nursing, 高齢者のスキントラブルとその予防・ケア, P12～17, 2021 年 2 月号



チームケア学会 研究発表抄録

題名	施設再生への取り組み ～問題点の振り返りと目標管理への取り組み～		
法人名	社会福祉法人 湖星会	事業所名	特別養護老人ホーム ラスール泉
発表者	※西田裕佳	共同研究者	森谷 和田 上山 大道寺 上中屋敷
サービス種別	入所【病院・ <u>特養</u> ・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

当施設は令和元年、稼働率の低下と離職者数の増加を招いた。法人内 A 施設より支援をいただき、施設再生への取り組みを行った。今年度新体制となり、職員が自分たちで稼働率の低下や問題点を振り返る場が少なく、考えて行動ができていなかったことがわかった。そのため、振り返りと目標管理ツールの確立が必要であると考えた。

II 目 的

1. 施設稼働率の低下原因と問題点の振り返る
2. 1 で抽出した問題点と現状を SWOT 分析し目標管理を行える取り組みを構築する

III 方 法

1. 研究期間：令和 3 年 2 月 1 日～同年 5 月 31 日
2. 研究対象：部門長、主任、リーダー 計 16 名
3. 具体的方法

- 1) 各部門で支援前後の問題点と改善点を抽出
- 2) 長期入所・短期入所の稼働率、入院数の変化を可視化
- 3) 各部門リーダー以上の職員に対し、SWOT 分析の勉強会を実施
- 4) SWOT 分析をし、部門目標を導き出す

IV 倫理的配慮

職員が活動へ参加することで同意を得たものとする。

V 結 果

- 1) 稼働に対する意識と知識不足があった。
- 2) 各部門の役割遂行や連携が不十分であった。
- 3) 職員教育体制が整っていなかった。
- 4) 自部門の強みと弱みを理解し、考えられる問題点を全職員に周知した。

5) リーダー・主任が分析方法を学ぶことにより、自部署での問題抽出を早期に行い、対応策を考える思考パターンが確立されつつある。しかし、行動計画の立案までは至っていない。

支援前後の施設稼働等の推移として、長期入所は入院数が前年度比 75%減少し、平均稼働率は令和元年度 93%に対し、令和 2 年度は 97%へ上昇。短期入所は、利用者数の延べ人数が前年度比で約 1700 人増となり、平均稼働率も令和元年度 66%から令和 2 年度 90%への上昇となった。令和 3 年度も上記稼働を維持することが出来ている。支援前後の数値的变化や、支援内容を振り返ることで、自分たちの提供しているケアの振り返りが行えるようになり、強み・弱みなど客観視してケアの振り返りが行えるようになった。また、支援前後で自ら提供したケアが数値に反映されていると認識したことで、「認められた気がする」と話すスタッフもいた。

VI 考 察

支援の中で指導をもらうことにより考え方の変化を生み、行動レベルでの対応は可能になった。今回、そのことを可視化し振り返ることで、自分たちの行動と多職種間の連携がいかに大切であるかを再確認した。また、ケアの質や抱えている問題点を解決することが数字として反映されることも学び、モチベーションの向上要因になったと考える。施設全体や各部門で SWOT 分析をし、目標管理に反映させることによって、支援後の継続介入につながっていると考え。当施設では、SWOT 分析を学んでいる職員がほとんどおらず、取り組みの途中である。今後も継続した介入を続け、全職員が個人の目標管理へ反映できることを目標に継続して取り組んでいきたい。



チームケア学会 研究発表抄録

題名	いつまでも住み慣れた家で ～笑顔のある生活を～		
法人名	医療法人社団 平成会	事業所名	健康倶楽部郡山「アルコート並木」
発表者	小川 富子	共同研究者	古川 拓也
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・ <u>小規模多機能</u> ・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

A氏は自宅で長女と二人暮らししているが、2020年6月、長女から暴言等があったとA氏から町内会長へ相談があり、地域包括支援センターが介入。以後、当事業所への在宅支援の相談がありサービス利用開始。A氏は、昔からの母子関係の不仲が根強く、最近では認知症が進行し、数年入浴しておらず清拭や洗髪を稀に行う程度や、食材管理も困難。生活拠点の2階のトイレは壊れており、1階のトイレを促すもバケツに用を足す事もあり、不衛生な状況が続いている。また、外出する意欲もなく他者交流が少なくなり、長女がノイローゼ気味になっており、A氏の望む「自宅での生活維持」が難しくなりつつある。長女からは「施設に入れた方がいいのでは」との言葉が聞かれた。

II 目的

1. A氏が望む、「住み慣れた自宅での生活」の維持
2. 長女のA氏に対する介護支援の理解

III 方法

1. 研究期間

2020年6月～2021年7月

2. 研究対象

A氏(女性)80代、要介護度1、アルツハイマー型認知症、認知症高齢者の日常生活自立度Ⅲa

3. 具体的方法

- 1) 認知症ケアの理解
 - 2) A氏、長女、それぞれの意向や思い・双方が望むこれからの生活の把握（モニタリング・聞き取り調査）し全職員で共有
- (1) 強い拒否や被害的な面がある為、声かけに配慮
(2) 食材管理、環境整備の支援
(3) 数年入浴していないA氏へ入浴の声掛け

(4) サービス調整：訪問→通所→宿泊の流れでA氏に馴染んで頂き、親子の時間確保が出来る様にする。また、訪問を中心とした支援を図りA氏の支援、長女のレスパイトケアを中心に調整。

4. 評価尺度

サービス提供内容とその回数

IV 倫理的配慮

本研究において、個人情報利用に関する同意を双方に説明し了承を得ている。

V 結果

表1【サービス提供内容と回数】9月～宿泊支援のみ

R2.6月	訪問3	宿泊0	通い0
R2.7月	訪問8	宿泊0	通い1
R2.8月	訪問5	宿泊10	通い2

現在、A氏と長女に心のゆとりが得られ笑顔を取り戻している。A氏は性格が見違えるほど改善、長女も嫌悪感も軽減され、施設入所に至っていない。

VI 考察

利用当初は、自宅中心の生活支援ばかりを提案していたが、A氏と長女には「確立した時間」が必要である事に気付いた。在宅生活を維持する為にはレスパイトケアを取り入れる事も重要と理解し、両者が望む「自宅」での生活が維持できている。町内会長の理解もあり、地域住民の見守り体制も構築し、地域の輪が広がっている。認知症になっても住みやすい地域づくりをする為に、小規模多機能サービスの使命として取り組んでいく必要がある。

参考文献

- 1) 居宅サービス計画書作成の手引き，一般財団法人長寿社会開発センター，P43，2016



チームケア学会 研究発表抄録

題名	実現！！多職種連携イベント～楽しいと専門知識の融合～		
法人名	医療法人財団 百葉の会	事業所名	港区立芝高齢者在宅サービスセンター
発表者	※石井彩佳	共同研究者	田中千春・松崎真宏
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【 <u>デイサービス</u> ・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

A デイサービスの毎月のレクレーションやイベントは介護職が主に企画し実施している。毎月新たなレクレーションも取り入れているがお客様からマンネリ、あまり変わらないとの声を聞くようになった。そこで「お客様に知識の提供と楽しさを届けたい」と多職種の職員で行ったイベントの企画・開催を行った取り組みを報告する。

II 目 的

介護職、相談員、管理栄養士、理学療法士、作業療法士で施設内イベントを企画・開催し、今までにない「知識の提供と楽しみ」を届ける。

III 方 法

1. 研究期間

2020年5月～2020年7月

2. 研究対象

A デイサービスの利用者 計 155 名

3. 具体的方法

- 1) 知識の提供と楽しみが融合できるイベントの話し合いを夕礼後に 30 分以上おこなう。1 イベントにつき 10 回程度。5 月、6 月、7 月に季節にあったイベントを計画する
- 2) イベントは 2 部構成とし、1 部は企画職員の専門分野を発揮した内容。2 部は企画内容に応じて、お客様がご自身で行えるものづくりを実施。
- 3) 毎回終了後、お客様と職員にアンケート実施

4. 評価尺度

アンケート回答数内の満足度割合、回答内容。

IV 倫理的配慮

今回使用した写真及び個人情報の掲載においては、事前に承諾を得ている。

V 結 果

開催内容と日程は、5 月免疫力アップ 3 日程、6 月気分スッキリ 2 日程、7 月夏バテ防止 2 日程で実施できた。

アンケート回収率は 100%。全日程で 95%以上のお客様から良かった等の回答あり。その理由では「勉強になった」「このような企画をしてくれたことが嬉しい」等の感想を得た。今後やって欲しいイベントでは「健康に役立つこと」「手作り作業」「今日のようなイベント」等があった。

VI 考 察

お客様に施設での時間を楽しんでもいただくことは重要だと考える。「楽しむ」には多くの意味を持ち、歌を歌うことやゲーム的レクも楽しむことだが、学ぶことも楽しむにつながることに気付いた。

専門が異なる職員が「知識の提供と楽しみ」を考え、実施するまでには専門職が集まり話し合う時間を作るのが難しく苦労した。「レクリエーション活動援助計画の段階から実施まで携わっているスタッフの約 6 割が介護職、看護師¹⁾」とされているが、今回のように専門職が連携し、多職種で行うことで、新たな「学ぶ楽しさ」を生み出した。日頃から多職種連携の必要性は感じていたが、新たなイベントの企画・運営においても重要であることを学んだ。また、お客様も「学ぶ楽しさ」を喜んで下さることから、今後も「知識の提供と楽しみ」を融合させたイベントを多職種で企画・実施していきたい。

参考文献

- 1) 森山千賀子 土井晶子：日本の高齢者施設における余暇活動の現状と課題，P57，2009



チームケア学会 研究発表抄録

題名	「得意」を生きがいに		
法人名	社会福祉法人湖成会	事業所名	多機能ホームあった家
発表者	大石ふづき	共同研究者	後藤義仁
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・ <u>小規模多機能</u> ・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

老年期に生きがいが叫ばれる大きな理由は、喪失体験を乗り越えるためである。(引用文献 1)

A 氏は通いサービス利用の際、席に座って過ごされていることが多い。また、ご自宅でも、ほとんどを自室で過ごされている。週に 2 回訪問サービスを利用され、その訪問の際の会話の中で、「することがなくて退屈。することがないのもつらいの」との言葉が聞かれた。

A 氏はミシンでの洋裁が得意。得意な事を提供し、A 氏の生きがいを見つける為に取り組みを始めた。

II 目 的

A 氏が得意なミシンでの作品作りを提供し、退屈な気持ちを払拭する。あった家を利用する事で得意なミシンを生かし、施設で使える作品作りを行う。役に立つ事で、生きがいを見つけることができる。

III 方 法

1. 研究期間：2021 年 1 月 28 日～

2. 研究対象：小規模多機能型居宅介護 利用者

A 氏 90 代 女性 要介護 1

昔ご主人とテーラーを営んでいた。ご自身の洋服もミシンで作られていた。2018 年 5 月に大動脈弁狭窄症にて入院。退院後はお店もミシンも処分してしまう。

3. 具体的方法

- 1) あった家の利用の際にミシンを触れて頂く
- 2) 作品作り
- 3) 刺し子を提供

4. 評価尺度

施設で使える作品を作る。

IV 倫理的配慮

研究発表で使用する情報・写真等についてはプライバシーに配慮し利益相反がない事について同意と確認をしている

V 結 果

ミシンに触れることができ、マスク、バスマット、巾着袋などの作品を作ることができた。バスマットはあった家で使用している。しかしミシンは背中を痛めたことにより通いが休みがちになり中断した為、代替えとして「刺し子」を提供し、少しずつ行っている。

A 氏の希望で、生まれくる赤ちゃんの為にミシンでよだれかけ等の小物を作る計画を立てた。

A 氏の得意なミシンでの作品は、仕上げた達成感、仕上げた作品を褒められた事、作品が実際に使用された事で「誰かの役に立った」という充実感、また、私たちから A 氏が必要だというお互いの愛情が不可欠だと感じた。

VI 考 察

A 氏の役割づくりから得られる充実感と、私たちから A 氏が必要だという愛情を、お互いに感じられた時に、生きがいは感じられると思う。しかし、人の感じる程度は様々な環境や要因が作用する。

本研究では A 氏のための、複数人を同じ研究対象の中での要因を分析していく事で、目には見えない、生きがいを定義できると仮定した。

お客様の得意な事を伸ばし、誰かの役に立てるという事を、お客様の生きがいに感じていただけるように職員一丸となり、支援していきたいと思う。

引用文献

- 1) 伊勢真理絵 中野靖彦：老人の居場所と生きがいについての一研究, 愛知県淑徳大学教育学研究論文集 第 5 号



チームケア学会 研究発表抄録

題名	介護予防啓発事業「こやまハツラツ教室」の取り組み		
法人名	医療法人社団緑愛会	事業所名	川西湖山病院
発表者	※大越新那 長谷川直輝	共同研究者	川西湖山病院 リハビリテーション科
サービス種別	入所【 <u>病院</u> 】特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

近年高齢者の健康寿命を延伸するため、介護予防事業の重要性が高まっている。効果的なアプローチを行うため、リハビリ専門職等の地域人的資源の参画が求められている。リハビリテーション科で令和元年度より新たに組み込んだ事業について以下に報告する。

II 目 的

1. 地域に密着し、地域在住高齢者の介護予防を図る。
2. A 町の課題や高齢参加者の心身機能に合ったプログラムを検討し機能維持を図る。

III 方 法

1. 研究期間：令和元年 9 月～令和元年 11 月
2. 研究対象：A 町在住で、介護認定を受けていない 65 歳以上の地域高齢者 15 名（平均年齢：74.0 歳）
3. 具体的方法：
 - 1) 期間中の月 2 回、B 病院を会場として「こやまハツラツ教室」を開催する。
 - 2) 初回及び最終実施日に、体力測定（握力、30 秒立ち上がりテスト：以下 CS-30、片脚立位テスト、5m 歩行）を実施。
 - 3) 最終日に介護予防教室の満足度アンケートを実施。
4. 評価尺度：体力測定の結果を t 検定にて分析する。

IV 倫理的配慮

本事例には、個人を特定できる内容は含まれていない。

V 結 果

表 1. 体力測定結果 ※有意差があるもののみ記載

テスト項目	初回	最終	有意差
握力（左）/kg	21.4	23.5	0.011
握力（右）/kg	23.3	23.3	0.945
CS-30/回	19.8	23.5	0.001
5m 歩行（通常）/秒	5.0	4.6	0.035

アンケートでは、運動・レクリエーション・講話にて半数以上が“満足”、介護予防教室の満足度は 90% が“とても満足”と回答あり。参加者からは「バランスの良い内容で大満足」といった意見が寄せられた。

VI 考 察

こやまハツラツ教室では、参加者から高い満足度を得ることができた。その背景には、療法士が内容の構成から関わったことで、高齢者の生きがいがづくりや住民同士のふれあい、物忘れへの対応等、A 町の介護予防事業において求められている項目に合わせた内容を実施できたことが挙げられる。また各専門職が講話を行い、参加者からの質問に答えることで、介護予防への意識を高め、疑問を解決できた。

今まで実施してきた介護予防体操では、座位のみでの体操や、全員が同じ体操を行うものがほとんどであったが、本教室では参加者の身体機能に合わせてグループを構成し、グループごとに療法士を設置した。そのため、リスク管理を行いながらも、参加者の評価に合わせて低下傾向にある機能に特化した立位・歩行を中心としたプログラムを提供できた。その結果、非利き手の握力、CS-30、歩行スピードが向上し、その他の項目でも機能維持が図れた。中でも下肢筋力及びバランス能力の改善ができたと考えられる。また、非利き手の積極的な運動への参加により、隠れた廃用性の進行から脱却したことで、結果に大きな変化がみられた。さらに、今後も療法士の専門性を活かした介護予防事業を行うことで、地域在住高齢者の身体機能維持や生きがいがづくりを支援していく。

参考文献

- 1) 川西町高齢者保健福祉計画（第 8 次）・川西町介護保険事業計画（第 7 期），2018.3



チームケア学会 研究発表抄録

題名	住み慣れた街で幸せに暮らすために ～地域連携と困難事例への挑戦～		
法人名	株式会社 ケアハーモニー	事業所名	コンフォルト緑岡
発表者	※矢野 亜利沙 水越 史江	共同研究者	長嶋 智明 倉持 富美江 阿部 智史
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・ サ高住 】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・ 小規模多機能 ・看護小規模】 その他 【福祉用具貸与】		

I はじめに

A氏は利用開始前、行動・心理症状が顕著にみられ日中夜間問わず警察やA高校での保護が多くあり、2019年5月にB事業所内本部で保護をし、地域包括・警察・A高校との連携した支援を開始。ご主人の要介護認定とサービス提供拒否、お子様との音信不通、ご自宅の生活環境が整っていないなかで、地域・地域包括、B事業所の全職員で連携しサービス提供に向けて取り組んだ事例を報告する。

II 目的

1. 住み慣れた街で安心した在宅生活の継続ができる。
2. 地域と連携してご主人との信頼関係を構築し、A氏のサービス提供に繋げる。

III 方法

1. 研究期間

2019年5月21日～2021年7月30日

2. 研究対象

A氏 80歳代 女性 要介護3 病名 アルツハイマー型認知症 既往歴 両変形性膝関節症

3. 具体的方法

- 1) ご主人及びご本人との信頼関係構築の為、事業所単独と地域包括同席でのご自宅訪問（安否確認とコミュニケーション）
- 2) 事業所全職員及び併設事業所職員、本部職員、A高校、自治会長、民生委員、地域包括と保護をした際の対応方法及び当時の状況について情報共有及び対応方法の統一。

4. 評価尺度

2019年5月以降の当事業所でのサービス提供拒否等困難事例対応件数5件。

IV 倫理的配慮

本研究の対象となるお客様、ご家族へ個人情報の取扱い及び写真の使用について説明、同意を得る。

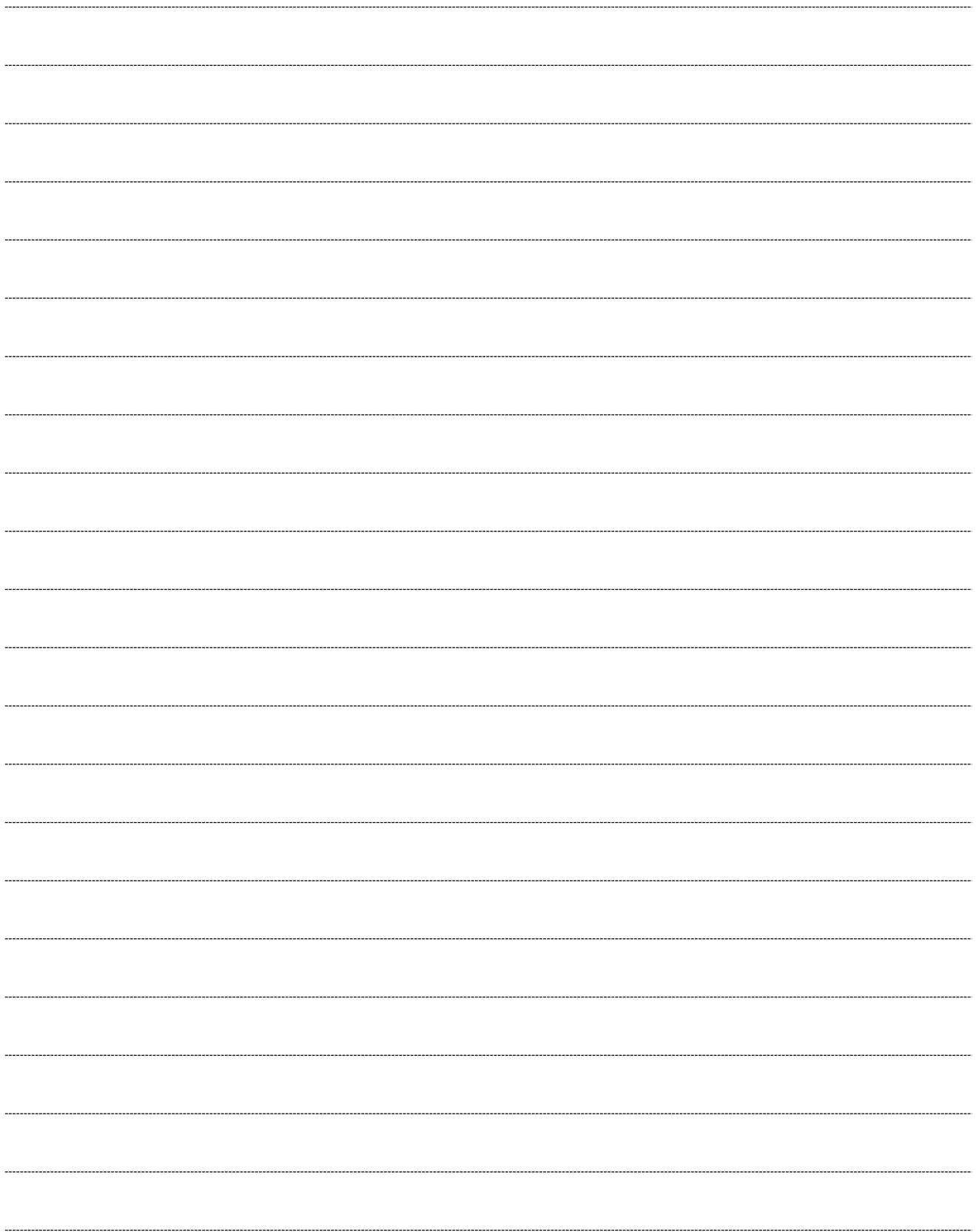
V 結果

2019年5月21日から信頼関係構築に向けて、職種、職域を超えて連携をしサービス提供に向けて取り組んだが、2019年8月8日にご主人が熱中症で救急搬送され、ご主人より「妻をお願いできるのは、コンフォルト緑岡さんしかない」とのお言葉頂き、緊急宿泊でのサービス提供開始となる。ご主人も入院によりADLが低下し、要介護3の認定を受けサービス提供開始となり在宅生活を継続するが、ご自宅の老朽化で在宅生活が難しくなるなか、住み慣れた街で暮らしたいとの思いもある中、併設のサービス付き高齢者向け住宅への入居を提案。2020年9月18日にご夫婦で併設のサービス付き高齢者向け住宅に入居し、定期的に徒歩5分程のご自宅の様子を確認に行くなどご夫婦で穏やかな生活を送っている。

VI 考察

今回の研究で、地域と地域包括、併設事業所との連携の重要性について改めて認識し、現在も困難事例に取り組んでいる。サービス提供地域の高齢者数を見ると、潜在的な困難事例も多数あると思われる為、地域連携を更に強化し、地域住民に親しまれ信頼されて、地域で永続発展する事業所づくりに取り組んでいきたい。





研究発表会

《ROOM 3》

抄録

9 月 16 日 (木)

チームケア学会 研究発表 【 ROOM 3 】

発表時間		法人	題名	発表者	ページ
1	10：00 10：15	社会福祉法人 カメリア会	自宅での看取りの支援とその実現へのプロセス	熊谷 崇	53
2	10：15 10：30	社会福祉法人 苗場福祉会	みんなで乾杯したい。～看取りケアからの復活～	森山 尚子 上村 直子	54
3	10：30 10：45	医療法人社団 百葉の会	意思疎通困難な方の看取りケア ～「食べたい」想いを汲み取る～	佐野 夏美	55
4	10：45 11：00	医療法人社団 百葉の会	デイサービスで叶えることが出来る看取りケア	高橋 香 實川 愛奈	56
11：00 11：15		休憩（15分）			
5	11：15 11：30	医療法人社団 湖聖会（東京）	介護職員の姿勢に関する意識改善を目指して	関口 香織	57
6	11：30 11：45	社会福祉法人 カメリア会	トロミを統一しよう！	藤村 よし子	58
7	11：45 12：00	社会福祉法人 カメリア会	入居者様の声をつなげる取り組み	朝日 義信	59
8	12：00 12：15	社会福祉法人 白山福祉会	チームケアの基本を問う（ステージ1）	片山 あかり 矢萩 利文	60
9	12：15 12：30	酒井福祉法人 苗場福祉会	ヒューマンエラーを理解し誤薬事故を防止しよう	佐藤 和美	61
12：30 13：30		休憩（1時間）			
10	13：30 13：45	医療法人社団 百葉の会	グループホームに平行棒導入 ～歩く機会と笑顔が増えた～	宮内 夏実	62
11	13：45 14：00	医療法人社団 水澄み会	FIMを活用し丁度いい声掛けのタイミングを探る ～入浴からの支援～	石川 加奈子	63
12	14：00 14：15	医療法人社団 平成会	みんな大好きヤ・ク・ル・ト！ ～免疫力と腸内環境改善の効果～	望月 慎太郎	64
13	14：15 14：30	社会福祉法人 湖星会	その食材食べやすいですか？ ～安全な食事提供のために～	高橋 瞳	65
14：30 14：45		休憩（15分）			
14	14：45 15：00	社会福祉法人 緑愛会	「私は元気だよ」～コロナ禍における家族との繋がり～	栞原 朱美	66
15	15：00 15：15	株式会社 テイクオフ	在宅生活を守るための社会的処方のあるかた ～コロナフレイルからの脱出～	小関 麻理	67
16	15：15 15：30	社会福祉法人 草加福祉会	現代の介護にこそ【映え】が必要！むしろ最優先 ～ケア스타그램～	加藤 隼	68
17	15：30 15：45	株式会社 ライフアシスト	ひとりのできるもん!! ～身の回りのことを自分で出来るようになるための一考察～	濱田 里美 水金 奈美	69

チームケア学会 研究発表抄録

題名	自宅での看取りの支援とその実現へのプロセス		
法人名	社会福祉法人 カメリア会	事業所名	カメリア藤沢 SST
発表者	※熊谷 崇・根本 樹	共同研究者	当該ユニット職員 各専門職
サービス種別	入所【病院・ <u>特養</u> ・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

コロナ禍でご利用者とご家族が直接的な接点が取れない中、看取り対応となった対象ご利用者（以降 A 氏と呼ぶ）を「大切な人」というご家族の強い想いが源となり、そこからご家族がご自宅での看取りを決断され、それを実現した、という特別養護老人ホーム A 事業所での初めてケースが 2020 年度にあった。

家族と利用者に寄り添う対応のリーディングケースとして、ご帰宅（退所）までの流れでどのようなことがあり、各セクションでどのような連携をしてきたのかを振り返る必要があると感じたのがきっかけである。

II 目 的

前述した自宅での看取りまでのプロセスを検証と考察を通して、この取り組みをグループ内に広げ、特別養護老人ホーム施設の『看取り』対応の 1 つの考え方、選択肢として提案することを目的とする。

III 方 法

1. 研究期間

2019 年 6 月（ショートステイ利用開始）
～2020 年 9 月 27 日（ご自宅での逝去）

2. 研究対象

- A 氏（当該利用者様、女性 80 歳代）
- 1) 性格：社交的、歌が好き、怒り易い
 - 2) 食事形態
入所時：常食、一口大（自力摂取）
末期：ミキサー食、トロミ材使用（全介助）
 - 3) 移動：手繋ぎ歩行→ティルト型車椅子

A 氏のご家族
当該ユニット介護職
管理栄養士
言語聴覚士
介護支援専門員

3. 具体的な方法

- 1) 上記研究期間におけるケース記録を精査。
- 2) ケース記録を基に、及び各研究対象者（職種）から以下の内容の聞き取りを実施。
(1) 介護職員による介護指導について。
(2) 管理栄養士による栄養指導について。
(3) 言語聴覚士による嚥下指導について。
- 3) A 氏家族から、ご帰宅から逝去までの様子等の聞き取りとケース記録との照合。

IV 倫理的配慮

A 氏ご家族に今回の看取り対応事例を用いての研究発表の意向や趣旨等を説明し、その上で A 氏やご家族様写真の使用や対応のプロセスの発表許諾を得た。

V 結 果

2020 年 9 月 18 日にご帰宅（退所）、同月 27 日、ご家族に看取られ逝去。1 年経過しご家族から聞き取りの中で、多くの感謝の言葉を頂くと共に、帰宅後のご家族の数多くの対応を伺うこともできた。

VI 考 察

介護施設（携わる各職員）として

1. 各専門職の知識、経験、ノウハウの保持
2. ご家族、ご利用者とのコミュニケーション
3. ご家族の気持ちを汲み取る大切さ、思いやりが必要（大切）である。



チームケア学会 研究発表抄録

題名	みんなで乾杯したい。～看取りケアからの復活～		
法人名	社会福祉法人苗場福祉会	事業所名	特別養護老人ホーム みさと苑
発表者	※森山尚子・上村直子	共同研究者	高波直樹 斎藤由紀子 風巻美穂
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

2020年9月28日右肺膿胸にて入院されたA氏は同年12月14日退院となった。担当医からは終末期に差し掛かっており看取り期に入っていると話しあり。退院と同時に看取りケアを開始した。退院直後は、食事摂取も進まない状況であったが家族様の協力により摂取量も増加し、生活意欲も高まってきた。A氏は退院時より使用していた在宅酸素の吸入に対し「これがヤダ」とカニューレを装着することに対して不満を抱かれた。A氏に意向にそって穏やかに生活していただくために、「何とかできないだろうか」と考え、職員と家族様が一丸となって看取りケアの実践を行った結果、看取り期から入院前の生活へ戻ることが出来た事例を紹介する。

II 目的

A氏・家族様の意向に沿った看取りケアの実践。

III 方法

1. 研究期間

2020年12月2日～2021年3月21日

2. 研究対象

A氏 80歳代 男性 要介護3

日常生活自立度 B2 認知症自立度 IIb

〈既往歴〉肺炎、膿胸、心不全、胸膜炎疑い

3. 具体的方法

1) 申し送りの際に、数値だけでなく、A氏の言葉・表情など詳細に申し送りを行うことで情報共有を職員間で密に行う。

2) 2週間毎に看取りカンファレンスを行い、現状に合わせプラン作成し実施する。

3) 家族様へ状態を報告し、意向の確認を行う。

4. 評価尺度

入院前のADLと、退院後・現在のADLの比較を行う。

IV 倫理的配慮

家族様には本研究の説明を口頭と書面で行い同意を得た。

V 結果

1. 介護スタッフから多職種への情報共有ができ状況に合わせた対応が迅速にとれた。「みんなで乾杯したい」「山に鉄砲を持って熊狩りに行きたい」と意欲的な言葉が聞かれ入院前の状態に戻れた。
2. 短期間にモニタリングを行うことで日々の変化に合わせ状況把握ができA氏の身体状況や意向に沿ったケアが実践出来た。
3. 家族様の協力により食事にこだわらず、好みものを召し上がった事で食事量・体重ともに増加した。

【表1. 退院後からの食事量・体重の変動】

	~12/24	~1/8	~1/22	~2/3	~3/18
食事量	2割	6割	9割	10割	10割
体重		31.7 kg		31.9 kg	33.7 kg

※2月は体調安定し、期間を概ね1ヶ月とした。

VI 考察

看取りケアとは、利用者の状態や家族の意向に合わせて適宜変更しながらすすめていく必要がある。A氏が入院前の生活を取り戻せたのは、本人様や家族様、そして職員が状態に合わせ柔軟に対応出来たからと考えられる。今後も増えていくであろう看取りについて自分がどのように最期を迎えたいのか利用者本人の想いに寄り添いケアの実践を行っていきたい。

参考文献・引用文献

高齢者施設における看取りターミナルケアとは

<https://kaigoworker.jp/column/358/>

介護ワーカー 公開日：2021年2月9日



チームケア学会 研究発表抄録

題名	意思疎通困難な方の看取りケア～「食べたい」想いを汲み取る～		
法人名	医療法人財団 百葉の会	事業所名	メディカルケアハウス リライフ宇東川
発表者	※佐野夏美	共同研究者	影山知里
サービス種別	入所【病院・特養・老健・ 有料 ・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン¹⁾」(以下ガイドラインとする)には、本人の意思が確認できない場合は、意思を推測し、他職種がチームで看取りの方針を決定するとある。今回、脳挫傷により意思疎通及び経口摂取が困難となったA氏の看取りケアにおいて、しぐさ、表情から食べたい想いが汲み取れた為、最期まで口から食べる支援を選択した。A氏への関わりを振り返り、今後の看取りケアを充実させたいと思い本研究に取り組んだ。

II 目 的

A氏への関わりを振り返り、本人の意思を尊重した看取りケアが、チームで実践出来ていたかを評価し、今後のケアに繋げる。

III 方 法

1. 研究期間

2021年2月1日～2021年6月15日

2. 研究対象

A氏80代女性、脳挫傷により要介護4、左半身麻痺、意思疎通・経口摂取困難、胃瘻からの経管栄養

3. 具体的方法

経過記録、振り返りカンファレンスから、ガイドラインに基づき、本人の意思を尊重し、チームで看取りの方針を決定し実践出来ていたか評価する。

IV 倫理的配慮

研究対象者のご家族様に対し、今回の研究の趣旨・目的を書面にて説明し同意を得ている。

V 結 果

経過記録：介護職、看護職、機能訓練士は、A氏に食べてほしいという想いを持って観察し、しぐさや表情より「食べたい」という意思があると汲み取った。

A氏が食べることが出来る様に模索し、得られた情報を全職員に発信した。主治医は、リスクを説明すると共に家族の食べてほしいという想いを尊重していた。言語聴覚士はA氏と職員の架け橋となり、食べる事を目標に嚥下評価を実施、相談員・ケアマネージャーは、家族の不安な気持ちを受け止め、情報を共有し意思決定の支援を行い家族の合意の元、実践に移していた。

振り返りカンファレンス：「食べてほしいという職員の想いは一致していた」「リスクはあったが、最期まで可能な限り経口摂取ができた」等と、「職種間・職員間での関わりに差があった」「状態変化に応じた話し合いが十分ではなかった」「いつからが看取りケアなのかわからず悩んだ」等が挙げられた。

VI 考 察

高口氏は「どんな最期を迎えるかは、そのお年寄りが誰に出会ったかで決まるのです²⁾。」と述べている。A氏に食べてほしいという職員の想いと、家族の想いがひとつになったからこそ、言葉にならないA氏の「食べたい」という想いを汲み取る事が出来たと推測出来る。いつから看取りなのかではなく、出会ったその時からお客様の大切な時間として捉え、どう関わっていくのかが重要と考える。今後は看取りケアの体制整備や研修の実施、振り返りカンファレンスの定着を図ることで、各職種が専門職としての役割を発揮し、その方らしい尊厳ある看取りケアが実践出来るようにしていくことが課題である。

参考・引用文献

- 1) 厚生労働省:人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン, 2018.
- 2) 高口光子:生活支援の場のターミナルケア介護施設で死ぬということ, 株式会社講談社, 2016.



チームケア学会 研究発表抄録

題名	デイサービスで叶えることが出来る看取りケア		
法人名	医療法人財団 百葉の会	事業所名	港区立台場高齢者在宅サービスセンター
発表者	※高橋香・實川愛奈	共同研究者	デイサービス職員
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所 <u>（デイサービス）</u> デイケア・認知症対応【 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

看取り期に入った A 氏に対し、相談員として A 施設で通所の希望を叶えたいと思った。しかし、デイサービスでも在宅での看取り期のケアが可能なのか、前例も無く対応出来るかと不安があったが、結果、お亡くなりになる前日までサービスを提供し続けることが出来た。

II 目 的

初めて取り組んだケアを振り返り、デイサービスにおける看取りケアの可能性を明らかにする。

III 方 法

1. 研究期間

2020 年 3 月 19 日～2020 年 12 月 14 日

2. 研究対象 A 氏、90 代、女性、要介護 5

既往歴：アルツハイマー型認知症、脳梗塞後遺症
家族構成：長女（仕事あり）と 2 人暮らし

3. 具体的方法

- 1) カンファレンスで A 氏の現状を職員に伝え、ケア方法の確認や不安の共有を行った。
- 2) A 氏の食事・水分摂取、排泄・清潔保持、過ごし方を検討しケアを実践した。
- 3) A 氏の今の状態を把握し連携していく往診医、訪問看護との協力体制を整えた。
- 4) 家族の思いにも寄り添えるよう支援した。

IV 倫理的配慮

対象となる A 氏の家族へ、本研究と研究発表の説明を行い同意を得ている。

V 結 果

1. 不安の声は上がったが、最期まで A 氏のケアをしたいという意見にまとまった。
2. A 氏の身体状況が大きく 3 段階に変化し、状

態に合わせケアの方法を変えた。

3. 医師や訪問看護へ不安に思っていた事を直接相談し、急変時や清潔保持について協力を得た。
4. 家族にも生活がある為、「介護をしながら就労しなければならない。」でも「家で看取りたい。入院もさせたくない。」そんな想いを引き受けることが出来た。亡くなる前日まで利用され、家族からは「悔いのない介護が出来た」との言葉をいただいた。

VI 考 察

不安から始まった看取りケアだったが、介護職は、相談出来る環境や看護師がいるという安心感もあり最終的には「関わってよかった、もっと積極的に関わりたかった」という気持ちに変化していった。看護師は判断する責任による重圧感と共に、「関わってよかったけど、ずっと不安を抱えていた」という不安感も明らかになった。

A 氏の状態に合わせて、職員が高い柔軟性を持っていたからこそ、送迎方法や過ごし方、記録等の工夫が行えた。また、関係機関との協力体制を構築することにより、A 氏や家族の想いをしっかり受け止めることが出来たと考えられ、その更なる充実が看護師の不安軽減に繋がると考える。

この A 氏をきっかけに、看取り期にある方が安心して在宅生活を継続出来る為に、デイサービスに通う事が一つの選択肢になるかもしれない。私たちは、自信を持って提案し、その希望に応えたい。

参考文献

- 1) 深澤圭子・高岡哲子：福祉施設における終末期高齢者の看取りに関する職員の思い、2011 年



チームケア学会 研究発表抄録

題名	介護職員の姿勢に関する意識改善を目指して		
法人名	医療法人社団 湖聖会(東京)	事業所名	介護老人保健施設 キーストーン
発表者	※関口 香織	共同研究者	小野澤 学、黒崎 千鶴、津島 慶吾
サービス種別	入所【病院・特養・ <u>老健</u> ・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

A 施設では、お客様の姿勢の崩れが散見され、褥瘡や誤嚥性肺炎に繋がるケースもみられた。姿勢ケアグループが活動した結果、お客様の姿勢やケアに対し職員の意識や行動がどのように変化したかを報告する。

II 目 的

1. 介護職員1人1人が不良姿勢・良姿勢を認識し、姿勢の修正ができる(褥瘡・誤嚥性肺炎の予防)。
2. 褥瘡・誤嚥性肺炎リスクが高い人に対し、介護職員からの問題提示や提案・対策ができる。

III 方 法

1. 研究期間

2019年4月～2020年3月

2. 研究対象

介護職員(上半期 2020年4～9月 37名、下半期 2020年10月～2021年3月 43名)

3. 具体的方法

- 1) 介護職員向けアンケート
- 2) 姿勢に関するポスター
- 3) 姿勢に関する問題集
- 4) 食事姿勢の確認

4. 評価尺度

アンケートによる介護職員の姿勢に関する意識の変化やケアの実施状況の検証。

IV 倫理的配慮

アンケート・問題集は匿名にて実施。またアンケートは実施する旨を各フロアのリーダーに説明し実施。

V 結 果

表1において、お客様の姿勢に関心を持つ職員が増加(Q1)。しかし座位の修正(Q7)や職員間の連携(Q10)、ポスターの活用(Q11)の実施状況は減少。

褥瘡への意識や褥瘡予防ケアの実施(Q2～6)は意識・実施共に高い割合で維持できているが、皮膚の観察、定期的な体位交換に関しては実施頻度が減少。

食事姿勢に関しては(Q7～9)、特に「食事環境の設定」は意識・実施状況共に改善が見られなかった。

表1 介護職員向けアンケート		アンケート配布数 上半期：37部 下半期：43部	
アンケート質問内容	上半期	下半期	
Q1. お客様の姿勢で気になることがあった	はい：62% いいえ：36% 無回答：3%	はい：67% いいえ：26% 無回答：7%	
Q2. 褥瘡の好発部位を意識してケアに取り組めた	はい：96% いいえ：5%	はい：91% いいえ：9%	
Q3. 皮膚状態の観察を意識してケア出来た	はい：96% いいえ：5%	はい：88% いいえ：12%	
Q4. 設定されたポジショニング写真を確認して実施出来た	はい：92% いいえ：8%	はい：91% いいえ：9%	
Q5. ポジショニング後衣類をきれいに整えた	はい：96% いいえ：5%	はい：91% いいえ：9%	
Q6. 定期的に体位交換が行えた	はい：96% いいえ：5%	はい：86% いいえ：14%	
Q7. 車椅子座位での姿勢崩れを定期的に修正した(食事含む)	はい：100% いいえ：0%	はい：81% いいえ：19%	
Q8. お客様の足裏が床に着いた状態で食事が出来た	はい：70% いいえ：30%	はい：70% いいえ：30%	
Q9. 食事のテーブル・椅子の高さが適切か確認した	はい：86% いいえ：11% 無回答：3%	はい：79% いいえ：21%	
Q10. お客様の姿勢について職員間で相談することがあった	はい：86% いいえ：14%	はい：77% いいえ：23%	
Q11. 姿勢ケア通信を見てケアに役立つことがあった	はい：86% いいえ：11% 無回答：3%	はい：79% いいえ：21%	

VI 考 察

早期のポジショニング設定、ポスターによる知識の共有を行った事で褥瘡に関する知識や関心に向上が見られたと考える。しかし入・退所者の増加に伴う業務量の増加により、定期的な皮膚の観察・体位交換が出来ていない現状であった。食事姿勢の修正や環境設定に関しては改善が見られず、食事と姿勢の関連が浸透していない事が要因と考えられた。

今後の課題として、職員の姿勢に関する知識・技術の向上、不良姿勢について話し合いの実施、姿勢ケア実施後の再評価・対策の修正等の統一した対応が挙げられる。上記取り組みを施設全体に浸透する事で、今後の褥瘡・誤嚥性肺炎の減少に繋げていきたい。

参考文献

- 1) 内田学：姿勢から介入する摂食嚥下 脳卒中患者のリハビリテーション, メジカルビュー社, 2017
- 2) 田中義行：オールカラー 介護に役立つ! 写真でわかる拘縮ケア, 株式会社ナツメ社, 2016



チームケア学会 研究発表抄録

題名	トロミを統一しよう！		
法人名	社会福祉法人カメラア会	事業所名	カメラア桜ヶ丘
発表者	※藤村よし子、小宮望	共同研究者	給食委員会
サービス種別	入所【病院・ <u>特養</u> ・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

私たちの施設では、水分のトロミ付けにおいて統一した規定がなく、ユニット内や個人の判断でバラバラにトロミを付けていた。しかしながら個人の嚥下機能に合っていないトロミ付けは危険であり誤嚥性肺炎へのリスクが高まるのではないかと考えた。

どの職員でも統一したトロミを付けられることにより、また言語聴覚士の指導を元にした多職種における判断によりお客様の状態に合ったトロミを付ける事で、誤嚥性肺炎の予防や統一したサービスの提供に繋がると考え、取り組んだ結果をここに報告する。

II 目 的

1. 施設内での統一したサービスの提供
2. 誤嚥性肺炎の予防
3. 無駄のないトロミ剤の使用によるコスト削減

III 方 法

1. 研究期間

2020年11月～2021年5月

2. 研究対象

施設内全お客様と職員

3. 具体的方法

- 1) お客様のイニシャルを記載できるトロミ表作成
- 2) 職員へのアンケート、評価、フィードバック
- 3) 誤嚥性肺炎の件数の確認比較
- 4) トロミ統一前と後の使用量の比較

4. 評価尺度

- 1) 職員へのアンケートの実施
- 2) トロミ統一前と後の入院者数の変動の比較
- 3) トロミ統一前と後のトロミ剤使用量と費用の比較

IV 倫理的配慮

職員にこの研究・発表について説明・同意を得た。また氏名はイニシャルで記載し、個人が特定されない様配慮を行った。

V 結 果

1. 職員アンケートでは、94%の職員がトロミ表配布後トロミの統一が出来たとの回答を得られた。
2. トロミ統一前の7～11月の入院者の内、肺炎が原因の方の割合は30%、統一後の12～4月の割合は19%と減少が見られた。
3. トロミ統一前の月の平均使用量は30kg、金額125,880円、トロミ統一後の月の平均使用量は22kg、金額は69,685円と、使用量は-8kg、金額は-56,195円となった。

VI 考 察

今回の研究の成果として、職員のトロミの統一の意識の向上とお客様の肺炎での入院者の割合の減少、トロミ剤のコスト削減へと繋がった。

しかし、職員アンケートよりトロミ表配布後のトロミの統一が出来たとの回答は94%であったが、摺り切りを行っているか、しっかり攪拌が出来ているかなどの問については行っているとの回答は7割程度回答であった。

今後の課題として全職員に正しいトロミの知識を付け、トロミについてより一層統一したサービスの提供に繋がりたい。

参考文献

- 1) 一般社団法人日本摂食嚥下リハビリテーション学会 <https://www.jsdr.or.jp/>
- 2) 株式会社フードケア <https://www.food-care.co.jp/>



チームケア学会 研究発表抄録

題名	入居者様の声をつなげる取り組み		
法人名	社会福祉法人カメラア会	事業所名	特別養護老人ホーム カメラア藤沢 SST
発表者	朝日 義信	共同研究者	介護課、ケアマネージャー
サービス種別	入所【病院・ 特養 ・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

A氏は会話が可能な70代 四肢麻痺の入居者である。四肢麻痺のためコールボタンが押せないことから、必要な時に必要としていることを私たち職員がキャッチできる環境を作るため、今ある環境（設備）で何が出来るのか考え、A様の教え子B様の想いをかたちにするお手伝いをさせていただいた取り組みをご報告する。

II 目 的

四肢麻痺の方でも必要な時にコールを呼ぶことができる環境にすることを目的とする。

III 方 法

1. 研究期間

2021年3月～2021年5月

2. 研究対象

特養：A様 70歳代 男性 四肢麻痺
自分の意見を口頭で伝えることができる。

3. 具体的方法

今ある環境（スマートスピーカー）で出来ることをA様と一緒に職員と案を出し、またA様の教え子B様からのご提案のリモコンモジュールを使用したコール方法やコールメーカーからの情報提供案なども検討や実施や評価を行った。

案1：音楽による呼び出し（実施）

案2：動物の鳴き声による呼び出し（実施）

案3：リモコンモジュールによる呼び出し（実施）

案4：息吹きかけによる呼び出し（検討）

案5：人工呼吸器による呼び出し（検討）

4. 評価尺度

評価項目をコスト、通知性、安心感で、尺度（点数）を3点、2点、1点、-1点で評価した。

IV 倫理的配慮

ご本人様やご家族様やご友人の方には主旨や発表することを説明し承諾済み。

V 結 果

検討案	内容	方法	実施状況	費用	評価				結果
					コスト	通知性	安心感	点数	
案1	音楽による発報	スマートスピーカーからの音	聞こえづらい	¥0	◎	×	×	3	△
案2	動物の鳴き声による発報	スマートスピーカーからの音	ユニット内聞こえるが他の方の対応時は聞こえづらい	¥0	◎	△	△	7	○
案3	リモコンモジュールを使った発報	既存のコールシステムにアクセス	リモコンコールを接点付きに変更し、B様制作のモジュールと組み合わせでコールシステムにアクセス成功	¥27,500	△	◎	◎	8	◎
案4	息吹きかけによる発報	別ユニット	センサーメーカーが取れ引きしていない	¥50,000 ほど	×	-	-	-2	×
案5	人工呼吸器による発報	別ユニット	医療機器のためアクション不可	高額	×	-	-	-2	×

◎・・・3、○・・・2、△・・・1、×・・・0、-・・・-1点

案2の動物の鳴き声も良かったが、案3の教え子B様が提案し制作されたリモコンモジュールを使用した案の評価が一番高かった。

案3のコールの流れ



VI 考 察

今ある資源を活用して何か出来ないかと知恵を絞った職員がいて、ご利用者A様の教え子B様の想いをかたちにし実現するお手伝いをさせていただき、何よりご利用者A様が「安心・安全」な生活環境を整えることが出来た。



チームケア学会 研究発表抄録

題名	チームケアの基本を問う（ステージ1）		
法人名	社会福祉法人 白山福祉会	事業所名	特別養護老人ホーム 桜の丘
発表者	片山 あかり 矢萩 利文	共同研究者	ミネベアミツミ株式会社
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

本研究のねらいとして、医療介護現場における暮らしのリスクマネジメント手法が変わりつつある中、桜の丘では開設から全室に BSS（ベッドセンサーシステム：ミネベアミツミ(株)登録商標）を設置している。また、本研究は、長期的な視点を持ち、※情報通信技術の活用（※以下 ICT 化推進とする。）とお客様の生活の質向上の土台が、科学的思考に基づいてどのように関係しているかを問うものである。そして、それは、チームケアの土台でもある情報共有の確実性、スピード化、簡素化、行動までの時間短縮につながるという仮説に基づいて行うこととした。

II 目 的

本研究の目的は、「福祉業界の社会的評価向上への寄与」、「利用者の生活の質の向上」であり、それは「医療福祉の社会的評価向上へのステップ」、「誰でも働けない独占的専門の地位向上」、「時間の価値への意識向上」につながることを意味する。また、チームケアの柱と考える「お客様の生活向上や暮らしのリスク回避」に対して価値を生み出し、それをご家族へ開示することにより多職種にご家族が参画しているという意識付けにも繋がり、お客様、ご家族、就労者（施設、法人、グループ）3者全てにメリットを生み出す。結果、チームケアの※オペレーションシステム改革（※以下 OS とする。）を行うことで、ご家族の不安解消や安心感向上と就労者の負担軽減にもつながる。

III 方 法

1. 研究期間：ステージ1（2019～2020 年度）
2. 研究対象：法人内拠点にご入居の 128 名
3. 具体的方法：BSS（ベッドセンサーシステム：ミネベアミツミ(株)登録商標）および記録共有システム

（ケアコラボ）を ICT 化推進のメインシステムとして活用。お客様の暮らしのリスク回避割合、ご家族様の安心度合（アンケート調査）、就労者（多職種）の負担軽減（1 日の行動分析を秒単位で算出して作業の時間増減を算出）を検証した。

IV 倫理的配慮

本研究対象のお客様については、生活の質向上の為にデータ活用を企業と連携して検証、分析することについて入居時に同意を頂いている。

V 結 果

表 1 ステージ1の研究結果

区分		2019 年度	2021.1~2
	転倒・転落率 Ave.	14.0%	0.0% 達成
	居室内転倒・転落率 Ave.	9.0%	0.0% 達成
	転倒・転落数抑止効果数	2019 対比で 20.8 名/月	
	アクシデント効果における安心度	94%	
	情報常時開示システム活用満足度	95%	
	TC 負担軽減時間（作業）	10,422 H	14,431 H
	その経済効果値	24,881 千円	34,423 千円

※転倒・転落率とは、当該月件数／当該月入居者数（現在も 1.0%未満継続中）。就労者負担軽減は ICT 化全てを示す。

※ご家族（アンケート形式：2020.12 実施 回答率 78.6%）

VI 考 察

第 2 ステージに向けて、チームケアに相關する内容や関連性を更に研究していき、施設運営の柱となるチームケア手法の OS 改革に向けて進めていく。

引用文献

1) 吉森保：「LIFE SCIENCE」科学的思考について、p20, 日経 BP, 2020 年 12 月 21 日

参考データ（共同研究データ）

社会福祉法人白山福祉会、ミネベアミツミ株式会社



チームケア学会 研究発表抄録

題名	ヒューマンエラーを理解し誤薬事故を防止しよう		
法人名	社会福祉法人苗場福祉会	事業所名	健康倶楽部中子の森 グループホーム深雪
発表者	※佐藤和美	共同研究者	グループホーム深雪職員 14名
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【 <u>グループホーム</u> ・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

職員の確認ミス、いわゆるヒューマンエラーによる誤薬事故が発生した。確認の回数を増やす対策が取られたが、事故が発生するたびに同じような対策を取っており効果に疑問を感じた。なぜ人間はエラーを起こすのか、そのメカニズムを理解することがヒューマンエラーの防止にとっての第一歩であると考え取り組みを開始した。

II 目 的

ヒューマンエラーの理論に基づいた誤薬事故防止策を立案し実践することで、人的要因の誤薬事故をゼロにする。

III 方 法

1. 研究期間：2020年10月～2021年6月
2. 研究対象：グループホームA事業所 職員14名
3. 具体的方法
 - 1) 文献を参考にヒューマンエラー発生のメカニズムを理解する。
 - 2) 現行の与薬マニュアルをヒューマンエラーの理論に基づき弱点を分析する。
 - 3) ヒューマンエラーのメカニズムに基づいた誤薬事故防止対策を立案し実践する。
 - (1) 利用者や与薬する薬を利用者の写真、薬の写真と照らし合わせ確認する。
 - (2) 配薬ケースを確認のしやすいものへ変更し誤認識を防止する。
 - (3) 配薬作業を簡略化し注意力の低下を防ぐ。
 - (4) 注意力や判断力が低下するようなあわただしい環境下での確認作業を廃止する。また不要な確認を減らすことで、「誰かが確認しただろう。」という過信を防ぐ。

4. 評価尺度

取り組み前後のヒューマンエラーによるインシデント、アクシデント件数の比較により評価する。

IV 倫理的配慮

研究対象者に本研究、発表について説明し同意を得た。

V 結 果

表1 施行前後のインシデント・アクシデントの比較

	施行前 5カ月 2020年9月～2021年1月	施行後 5カ月 2021年2月～2021年6月
アクシデント	2件	<u>0件</u>
インシデント	21件	14件

アクシデントにつながるヒューマンエラーは半減しかつ回避ができたことでアクシデント発生はない。

VI 考 察

人間は環境や体調など様々な要因により間違いを起こす。したがって、「しっかり確認しよう」といった意識に訴えかける対策は必要ではあるが、高い効果を恒久的には得られにくいと考えられる。今回の取り組みでは、人間の能力を補う様なシステムに移行できれば、ヒューマンエラーを防止できる事の実証ができた。『人間は必ず失敗するもの』その前提を忘れず、失敗させないためのシステムを今後も構築し、服薬関連だけではなく現場で起こりえる介護事故を防いでいきたい。

参考文献

- 1) 「ヒューマンエラーの原因～人が間違える12の理由」 レジリエントメディカル

<https://resilient-medical.com/human-error/cause>

(最終閲覧日 2021年7月15日)



チームケア学会 研究発表抄録

題名	グループホームに平行棒導入 ～歩く機会と笑顔が増えた～		
法人名	医療法人財団 百葉の会	事業所名	百葉介護センターわかば
発表者	※宮内夏実	共同研究者	関口奈穂子
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【 <u>グループホーム</u> ・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

グループホームは近年重度化が進み、お客様の対応ケアについて直面している課題が多い中、重度になっても、本人の意思を尊重していく事が最も重要であると言われている。2021年4月、A事業所は、リハビリ強化型複合型施設として再スタートをきる中、「グループホームでも機能訓練を強化したい」という職員からの声が高まり、お客様の筋力・意欲向上へ繋げる為、グループホームにも平行棒訓練を取り入れる事となった。

II 目的

お客様A氏は、年齢を重ねるごとにご自身で歩くことに対し、疲労や不安を感じるようになっていく。グループホームでの日課である軽体操やレクリエーションに加えて平行棒訓練を取り入れた事で、A氏の機能向上と意欲向上への効果がどのように変化したかを研究し明らかにする。

III 方法

1. 研究期間

2021年3月15日～2021年6月14日

2. 研究対象

A氏 90歳代 要介護4 歩行器使用
左大腿骨転子部骨折、認知症、慢性心不全

3. 具体的方法

- 1) 介護職が体調に配慮しバイタルチェック、ストレッチ、平行棒訓練(1日21m)を毎日行う。
- 2) 平行棒記録に実施結果を記録する。

4. 評価尺度

- 1) 平行棒導入による日常歩行機会の変化
- 2) 平行棒記録による、A氏の心境内容（意欲、疲労度）

IV 倫理的配慮

対象者と対象者の家族には、本研究の目的について電話にて説明と写真使用について同意を得ている。

V 結果

期間中はほぼ毎日平行棒訓練を実施し、加えてトイレへの移動の際、歩行距離を伸ばすことができた。

表1に歩行機会、疲労度の変化を示す。

表1 歩行機会と疲労度の変化（単位：回）

		3/15～4/14	4/15～5/14	5/15～6/14
歩行機会	平行棒訓練	22	27	28
	トイレ時 長距離歩行	97	113	131
疲労に関する発言		7	3	2

VI 考察

今回の研究を通じて、平行棒訓練はお客様の機能向上と意欲向上につながり、生活の維持向上に効果がある事がわかった。介護職が平行棒訓練実施前にストレッチを欠かさず、A氏の体調面に気にかけて関わったことは、日を迫うごとに職員のA氏を想う気持ちが高まったからだといえる。訓練を重ねる事で、A氏の歩きたいと思う意欲も更に高まり、訓練以外でも運動機会を作りたいと職員の意識変化も同時に高まった。高齢であるA氏が今後ともご本人の意思で生活し続けていく為に、看護師等、医療面の連携強化し、安全環境の充実に図りたいと強く感じた。今後もA氏の歩きたいという想いを大切に、チーム一丸となって寄り添っていきたい。

参考文献

- 1) 公益社団法人日本認知症グループホーム協会「認知症高齢者グループホームにおける介護サービス提供の実態に関する調査研究事業報告書」P12.P51



チームケア学会 研究発表抄録

題名	FIM を活用し丁度いい声掛けのタイミングを探る ～入浴からの支援～		
法人名	医療法人社団 水澄み会	事業所名	デイサービスセンターもやいの家うのはな
発表者	※石川加奈子	共同研究者	田原華奈枝、波田野友香
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【 <u>デイサービス</u> デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

2019 年より通所を利用されている A 氏は、利用開始当初はご自分で入浴時の着替え交換をしていた。しかし、職員の都合で着替え交換をしてしまい、本人のできる日常生活動作(Activity of Daily Living:以下「ADL」とする)を奪っていないか、自立支援の妨げになっていないか、日々の支援の中でこのような疑問を感じた。今回、職員の統一した入浴支援が必要ではないかと考え取り組んだ。

II 目 的

A 氏の生活機能の維持・向上を目指すために、機能的自立度評価表(Functional Independence Measure : 以下「FIM」とする)の清拭項目・更衣項目を活用し、職員が統一した支援を提供する。

III 方 法

1. 研究期間

2021 年 6 月 12 日～2021 年 7 月 19 日

2. 研究対象

A 氏 要介護 1 HDS-R 9 点

3. 具体的方法

- 1) FIM 勉強会・周知(6/8)
- 2) FIM 評価表立案・作成
- 3) 6 月:A 様の「している ADL」の把握・分析、長谷川式簡易知能評価スケール:(以下「HDS-R」とする)の実施。 7 月:支援の検討・実施・評価

4. 評価尺度

FIM の清拭・更衣項目を採点

IV 倫理的配慮

対象者及びご家族様に本研究の説明を口頭と書面で行い、書面にて同意を得た。

V 結 果

表 1.FIM 評価結果

FIM 評価	清拭	更衣	備考
6 月 12 日	5/7 点	5/7 点	初回評価
6 月 30 日	5/7 点	5/7 点	実施後評価
7 月 17 日	5/7 点	5/7 点	実施後評価

VI 考 察

FIM は対象者の ADL の自立度と介護量を点数で把握することができ、情報共有しやすいメリットがある。FIM を活用して支援の指標として取り組むことができたことは成果と考える。

高山らは「FIM を活用することで、プランの立案、動作への着目、観察ができるようになっており一定の成果があった²⁾」と述べている。利用者の自立支援のためには、職員間の情報共有や、支援の方法を決定して統一した関わりを継続していくことが重要であると考え。今後は ADL を点数化して「見える評価シート」を検討していきたい。

参考文献

- 1) FIM「清拭項目・更衣(上半身、下半身)項目」

引用文献

- 2) 高山光代ら：FIM が向上するには？-入浴，更衣動作の介助方法統一を目指して-，p15～18，岡山リハビリテーション病院研究会誌 第 18 号，2019



チームケア学会 研究発表抄録

題名	みんな大好きヤ・ク・ル・ト！ ～免疫力と腸内環境改善の効果～		
法人名	医療法人社団 平成会	事業所名	健康倶楽部館 ファンコート厚木
発表者	望月 慎太郎	共同研究者	森・山中・板谷・益子・多湖
サービス種別	入所【病院・特養・老健（有料）・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

「高齢者は免疫機能が低下しているため、感染症を発症しやすく、集団感染を起こしやすいと言えます。¹⁾」又、高齢になると、食事や水分摂取量、日常生活動作の低下に伴い、運動機会の減少や様々な疾患等から便秘に陥りやすい。A施設では、令和2年5月からヤクルトを導入している。ヤクルトに期待されている効果は様々あるが、今回、①免疫力向上効果②腸内環境改善効果に着目し、高齢者の心身に及ぼす影響を検証することにした。

II 目的

NEW ヤクルトカロリーハーフ（以下、ヤクルトと称す）が高齢者の心身に及ぼす影響について検証する。

III 方法

1. 研究期間

飲用前：平成31年5月1日～令和2年4月30日

飲用後：令和2年5月1日～令和3年4月30日

2. 研究対象

全入居者（新規入居・退居者含む）179名

3. 具体的方法

毎日1本、時間帯は決めずヤクルトを飲用。①発熱者や入院者、感染者の統計を比較②ヤクルトの飲用前後の排便の量、質についてのお客様アンケート調査・インタビューを実施。又、下剤や浣腸の使用量を比較。

IV 倫理的配慮

個人情報特定できないように配慮

V 結果

免疫力検証結果として、飲用前と飲用後を比較すると、発熱者や入院者は総じて減少した結果であった。又、飲用前に、インフルエンザの疑いで検査を実施した件数が9件、ノロウイルス疑いの件数が4件確認で

きたが、飲用後は検査数0件、疑い者も0名という結果であった。腸内環境改善効果の検証結果として、アンケートの結果から、2%～5%の方に便秘傾向が緩和・改善された。下剤の使用状況に関しては、下剤の使用回数や頻度は共に減少。坐薬は、飲用後の方が増加したが、浣腸回数は、減少に転じていた。

VI 考察

コロナ禍において、面会や外出等の制限により、活動性の低下や精神的なストレスから、高齢者の心身の健康に影響を及ぼしたことは容易に考えられる。年を重ねても、心身の健康を維持する為には、日々の運動や栄養バランスのとれた食事は重要な要素である。その上で、みんなが大好きなヤクルトを毎日飲み続けたことで、免疫力UP、腸内環境改善効果に、少なからず相乗効果を齎したと言える結果であった。最後に、ヤクルトを飲む時間が異なっていたことや、お客様アンケートの実施する時期が、飲用開始から1年後のため、記憶の正確性に欠ける可能性は考えられた。今後は、提供時間を統一し、短い期間でのアンケートを実施することで、また、違った結果も見えてくるのではないだろうか。

参考・引用文献

- 1) ヤクルトホームページ <http://www.yakult.co.jp> (閲覧日 2021.5.30)
- 2) 公益財団法人長寿科学振興財団（免疫系の老化）
<https://www.tyojiyu.or.jp/net/index.html> (閲覧日 2021.7.12)
- 3) ヤクルトサイエンス (NO.26)
https://www.yakult.co.jp/institute/report/pdfsciens_N026.pdf (閲覧日 2021.6.15)



チームケア学会 研究発表抄録

題名	その食材食べやすいですか？～安全な食事提供のために～		
法人名	社会福祉法人 湖星会	事業所名	特別養護老人ホーム みどりの郷
発表者	※高橋瞳 渡邊麻衣	共同研究者	山本小百合
サービス種別	入所【病院・ <u>特養</u> ・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

令和3年1月に食材による窒息事故が発生した。その事故をうけ、施設の全職員対象に食材に関する意識調査を行ったところ、現在使用している食材やメニューの中で食べにくい、飲み込みにくいなど、危険を感じたものが複数挙げられた。また、提供方法が職員によってばらつきがあり、統一されていないことがあった。

II 目的

1. 誤嚥を防ぐ為の安全な食事提供
2. 職員の摂食嚥下に関する知識と窒息リスク認識の向上

III 方法

1. 研究期間

令和3年1月～6月までの6か月間

2. 研究対象

経口摂取されている施設入居者 95名

3. 具体的方法

- 1) 誤嚥リスクの高い食材の洗い出し
- 2) 調理方法や提供方法の見直しと改善
- 3) 勉強会の実施と提供方法の周知
- 4) 実施後の振り返り

4. 評価尺度

引用文献における「介護食アドバイザー資格取得講座1.2」と「ホームヘルパーお料理サポートシリーズ3」に沿って評価・検討を行う。

IV 倫理的配慮

個人が特定できるような個人情報・写真は使用していない。またこの研究において対象者に不利益、負利益は生じない。

V 結果

1. アンケート結果をもとに調理方法や提供方法を見直し、再検討した。具材が大きい、硬くて食べづらい、飲み込みにくいという意見も多く挙げられていた。リスクが生じてしまう食材については加熱時間を延長したり、切り方を変更したりしたことでお客様が食べやすいように改善することができた。

2. 全職員対象に嚥下についての勉強会を実施し、嚥下のしくみに関して理解することで職員の危機管理、リスクへの意識向上につながった。また、カット方法やリスクの高い食材の写真、提供方法を記載したラミネートを作成・配布することで提供方法を統一することができた。実際に職員からも、安心感を持って食事提供ができるようになったという声が聞かれた。

VI 考察

窒息の主な原因は、食材による環境因子と摂食嚥下能力の個人因子など多方面にわたる。今回は食材による環境因子に着目し、誤嚥リスクにつながる食材への気づきと検討が必要であると考えた。栄養科として、リスク食材を安全に召し上がって頂けるよう工夫を重ねていくことが重要である。さらに、提供するユニット職員の摂食嚥下に関する知識と誤嚥リスクへの認識を持ち、統一した食事提供をすることで窒息事故防止に有効であると思われる。定期的に勉強会と食材のアンケートを実施することで、継続した安全な食事提供につなげていく。

引用文献 1) 椎野恵子・小菅陽子：かみやすい、飲み込みやすい高齢者のためのやわらかメニュー, p14-15, 女子栄養大学出版部, 2017 2) (株) キャリアカレッジジャパン, 介護食アドバイザー資格取得講座テキスト 1-2 章、2-2 章, (株) キャリアカレッジジャパン



チームケア学会 研究発表抄録

題名	「私は元気だよ」～コロナ禍における家族との繋がり～		
法人名	社会福祉法人 緑愛会	事業所名	グループホーム新緑の丘
発表者	※栗原朱美	共同研究者	加藤愛良、塩野敬子、加藤卓真、高橋美智子
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

新型コロナウイルス感染症予防のため長期にわたり面会ができない状況が続いている。顧客満足度アンケートでは、前年度 95%だった『満足度』が 76%に低下し『どちらとも言えない・わからない』が 24%となり、家族から心配の声も聞かれた。お客様の様子をどう伝えていくかを模索し、実践したことを報告する。

II 目 的

お客様が元気に過ごしている姿を家族へ伝えたい。

III 方 法

1. 研究期間

2020 年 4 月～2021 年 5 月

2. 研究対象

研究期間利用中家族 18 名

3. 具体的方法

- 1) オンライン面会の導入と案内の変更
- 2) ブログを委員会で管理し定期的な情報発信
- 3) 広報誌の内容見直し
- 4) 写真の有効活用による個別の DVD 作成
- 5) 情報発信ツールについてアンケート調査

4. 評価尺度

情報発信ツールに対する満足度と認知度をアンケートにより確認(全利用者家族)

IV 倫理的配慮

家族に研究の目的を説明し、承諾を得ている。

V 結 果

1. 案内に QR コードを追加したが、面会登録件数に効果は見られなかった。お客様より、「何を言っているか分からない」という意見があり、首かけタイプのスピーカーを準備したことで対応出来た。画面越しに顔を見て話しをすることの違和感はなく、

「私は元気だよ」と笑顔で家族と会話をしていた。

2. 2020 年 4 月から 12 月までのブログ更新回数は 3 回。委員会での管理を始めた 2021 年 1 月以降は 24 回と安定した件数の掲載ができた。

3. 行事等特別な時だけではなく、普段の様子も写真に残せるよう、居室担当者に協力を仰ぎ広報誌への顔写真の掲載頻度に偏りが出ないようにした。ブログの案内を URL のみではなくイラストを使用し検索の仕方を分かりやすく表示した。

4. キーパーソン以外の多くの家族にも日常の様子を知って頂くことができた。写真の仕分けや編集に時間を要し、作成者の負担が大きかったため写真の保存方法等再検討が必要。

5. キーパーソンの年齢が高いほどオンライン面会とブログの満足度、認知度が低いこと、広報誌と DVD の満足度、認知度が高い事が分かった。

VI 考 察

これまでの生活に馴染みのある広報誌と DVD は手に取って見て頂く事で満足度に繋がった。

オンライン面会やブログに関しては難しいと感じている家族が多く活用できていないが、キーパーソンの年齢層に関係している可能性があるため、キーパーソン以外の若い年代の家族へのアプローチが今後の課題である。

今後もどのような状況であってもお客様の元気な姿を家族に伝えられる施設を目指していきたい。

参考文献

- 1) 花王プロフェッショナルサービス、介護施設がオンラインの面会を取り入れるメリットとは
<https://pro.kao.com/jp/medical-kaigo/topics/business/20201006/> (最終閲覧日 2021/5/31)



チームケア学会 研究発表抄録

題名	在宅生活を守るための社会的処方ありかた ～コロナフレイルからの脱出～		
法人名	株式会社 テイクオフ	事業所名	ケアセンターとこしえあたご
発表者	※小関麻理	共同研究者	とこしえあたご職員一同
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム 小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

当事業所利用中の一人暮らしの A 氏。令和 3 年 4 月に突然食事が摂れなくなった。会話も少なくなり、歩くのもままならない状態になった。1 週間で体重が 6 キロ減少し、命の危険性を感じた。かかりつけ医で受診し、検査を受けたものの大きな異常は見当たらなかった。そこで、コロナ禍による心と体の活力が低下する状態、コロナフレイルではないかと考えた。独居高齢者を襲うコロナフレイルにおいて、本人が望む生活を継続するために取り組んだことを報告する。

II 目 的

独居高齢者がコロナ禍で遭遇したコロナフレイルについて探ると同時に、今後も続くであろうコロナ時代とどう向き合うかの検証を行った。

III 方 法

1. 研修期間

2021 年 4 月 20 日～2021 年 7 月 15 日

2. 研究対象

当事業所ご利用中の A 氏を含む独居高齢者 5 名

3. 具体的方法

- 1) A 氏に対して ADL 向上の取り組みの実施
 - (1) 再度食への関心を持てるような工夫。
 - (2) 今の状況でのご家族様との関わりを検討。
- 2) 独居高齢者の体重の増減を比較しコロナフレイルについての経過観察。

4. 評価尺度

独居高齢者 5 名の体重の増減

IV 倫理的配慮

本研究の対象となるお客様、ご家族様へ個人情報の取り扱いについて書面にて説明、同意を得る。

V 結 果

1. ご家族様から毎年この時期にタケノコ汁を作って食べるとお聞きし、A 氏の食事への関心を再び取り戻していただくために、一緒にタケノコ汁を作って食べた。その時は懐かしさもあり喜んでいただけたも食欲向上までには至らなかった。また、1 年間電話だけの会話でしか娘さんとの関りが取れなかったことからリモート面会を試みた。顔を見て関わった事で本人の気持ちが向上した。少しずつ活気を取り戻し、食欲や意欲向上に繋がった
2. 独居高齢者のうち、ご家族が県内にいる方と県外にいらっしゃる方の体重の増減を比較したところ県内にいらっしゃる方は現状維持か 1 キロ程の増加があった。対して県外にご家族様がいらっしゃる方は 2 キロから 3 キロの減少があった。

VI 考 察

今回の研究において家族の力を再認識できた。当たり前にできていた何気ない家族との時間が閉ざされてしまった時のお客様のダメージは、想像以上に大きかった。私達が今できる事は社会的処方すなわち「つながり」を守る事である。With コロナ、アフターコロナが続く今日、コロナフレイル予防は不可欠である。コロナフレイル予防には積極的なオンラインの活用が必要であると言われている。新しい形での顔の見える面会、お客様とご家族様を繋ぐためにも ICT 化を推進し、独居高齢者が安心して大好きな自宅で生活ができるように私達も支援していきたい。そして、コロナが収束した時、笑顔でご家族様と会える日をお客様と一緒に待ちたいと思う。

参考文献

- 1) 近藤克則・飯島勝也：高齢者の健康状態を守るためにコロナ禍で求められる社会的処方, 榊医学書院



チームケア学会 研究発表抄録

題名	現代の介護にこそ【映え】が必要！むしろ最優先 ～ケアスタグラム～		
法人名	社会福祉法人 草加福祉会	事業所名	アウル大金平
発表者	※加藤 隼	共同研究者	石井奈緒子
サービス種別	入所【病院・ <u>特養</u> ・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

コロナ禍になり面会が難しい中、ご家族もお客様に会えない寂しさが続いている。これを受け、お便りを作成することでご家族にも安心を届けられたことを報告する。

II 目 的

お客様の日常や楽しく生活されている様子をお知らせする。また、ケアの報告や担当職員からの連絡事項などをお伝えすることにより、ご家族とユニット職員の信頼関係の構築を図ることが目的である。

III 方 法

1. 研究期間

2020年3月から2021年6月

2. 研究対象

特別養護老人ホームA事業所ユニット型3階のお客様20名とご家族。

3. 具体的方法

居室担当がお便りを作成し、写真を添えて毎月ご家族に送付。今回アンケートを送付し、ご家族にお便りの感想を伺う。

4. 評価尺度

面会以外の方法でのご家族との交流での効果検証。

IV 倫理的配慮

ご家族にアンケート送付の際、研究目的の為に使用する承諾をいただく。

V 結 果

特別養護老人ホームA事業所ユニット型3階20名のご家族に送付し、12名からの回答を得られた。お便りが届くことについて、オンライン面会をご利用している方のうち「良かった」と思った方が5名中5名、オンライン面会をご利用していない方では7名中6名だった。「日常の様子がよく分かって安心する」「直接会えないから、施

設内のお知らせは貴重」「楽しみにしている」など喜ばれるお声を多く頂いた。また、お便りは届いたキーパーソンのご家族だけでなく、離れたところに住んでいるご家族にLINEで写真を送られている方もおり、皆様でご覧になっていた。お便りの改善点やご要望については「洋服など必要な物を書いてほしい」「もう少し詳しく知りたい」「大変ありがたい」というお声があった。

VI 考 察

オンライン面会利用の有無に拘らず、「良かった」との回答を12名中11名から頂けたということは、一定の満足度が得られたのではないと思われる。

また、アンケートの回答を職員と閲覧した際、「お便りを実施していたことで、ケアにフィードバックができる」「これだけ喜んで頂けるとやりがいを感じる」「ご家族が求めていることを、どのように伝えていくか新たな課題が見えた」との声があがった。

例えば水分摂取が少ないお客様に対し、声掛けしながら少しずつ召し上がっている状況をお便りでお伝えしたところ、ご家族より昔からそうであったと直接連絡があった。ご自宅にいた頃の対応についてアドバイスも頂き、ユニットで話し合うことにも繋がった。

ご家族に日常の様子を伝えたいという思いから始めたが、ご家族に喜ばれるだけにとどまらずユニット職員にも変化がみられ、今までと違う視点で生活課題を見据えることも出来るようになった。開設当初は居室担当も無く日々お客様の対応しか出来なかったが、3年目を迎えコロナ禍ということもあり、お客様だけでなくご家族に対しても深く関わりを持ちたいという思いが出ていた。今後施設全体の取り組みとして水平展開していくと同時に、ご家族へのアンケートも定期的の実施し、ご意見やご要望に応えていきたい。



チームケア学会 研究発表抄録

題名	ひとりのできるもん！！～身の回りのことを自分で出来るようになるための一考察～		
法人名	株式会社ライフアシスト	事業所名	放課後等デイサービス ライフ南手城
発表者	※濱田里実・※水金奈美	共同研究者	濱田里実、橋辺圭那、水金奈美
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【放課後等デイサービス】		

I はじめに

A 施設では、児童が大人になって少しでも自立した生活を送るために必要な様々な練習をしている。保護者は「先生やおともだちと過ごしながら少しでも自分でできることを増やしてほしい。」という思いがある。

II 目的

A くん自身が興味・楽しさを持てる用具を取り入れて行うことで、達成感を積み重ね、「自分でやろう」という意欲を育て、身の回りのことをひとりでできるようになる。その第一段階として、「片付け・手洗い・うがい」を1人でできるようになることを目的とした。

III 方法

1. 研究期間：2019年7月1日～2020年3月31日

2. 研究対象：A くん。男児。小学校低学年。療育手帳 B。単語や二語文での会話可能。発音が不明瞭な時もある。視覚優位である。

3. 具体的な方法

本児の到達度をミーティング時に振り返り、ひとりでできるようにスモールステップを設定していく。

- 1) ミーティング・担当者会議で課題の抽出
- 2) 用具の選定・準備
- 3) 用具の説明・練習の実施(来所後に実施)
- 4) 好きな活動(おやつ購入・オセロ・フラフープ)

4. 評価尺度

片付け「1人で出来た」3点・手洗い「1人で出来た」3点・うがい「1人でできた」3点。「指導員の言葉かけあり」2点。「指導員と一緒にできた」1点。「できなかった」0点。1日の合計最高で9点とし、評価を行った。1ヶ月80%を超えることが目標。

IV 倫理的配慮

ご本人は未成年のため、目的を保護者へ口頭と書面

で説明し、顔写真の掲載に関してもご了承を得ている。また、いつでも参加を取りやめることができ、不参加でも何ら不利益を被ることはない旨を説明した。

V 結果

取り組み当初は36.8%だったが、3月には81.7%を達成することができた。

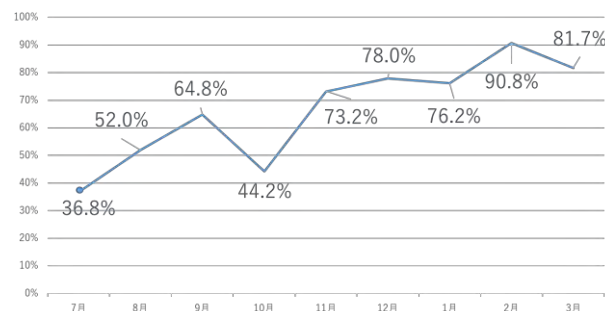


図1 達成度の推移(2019年7月1日～2020年3月31日)

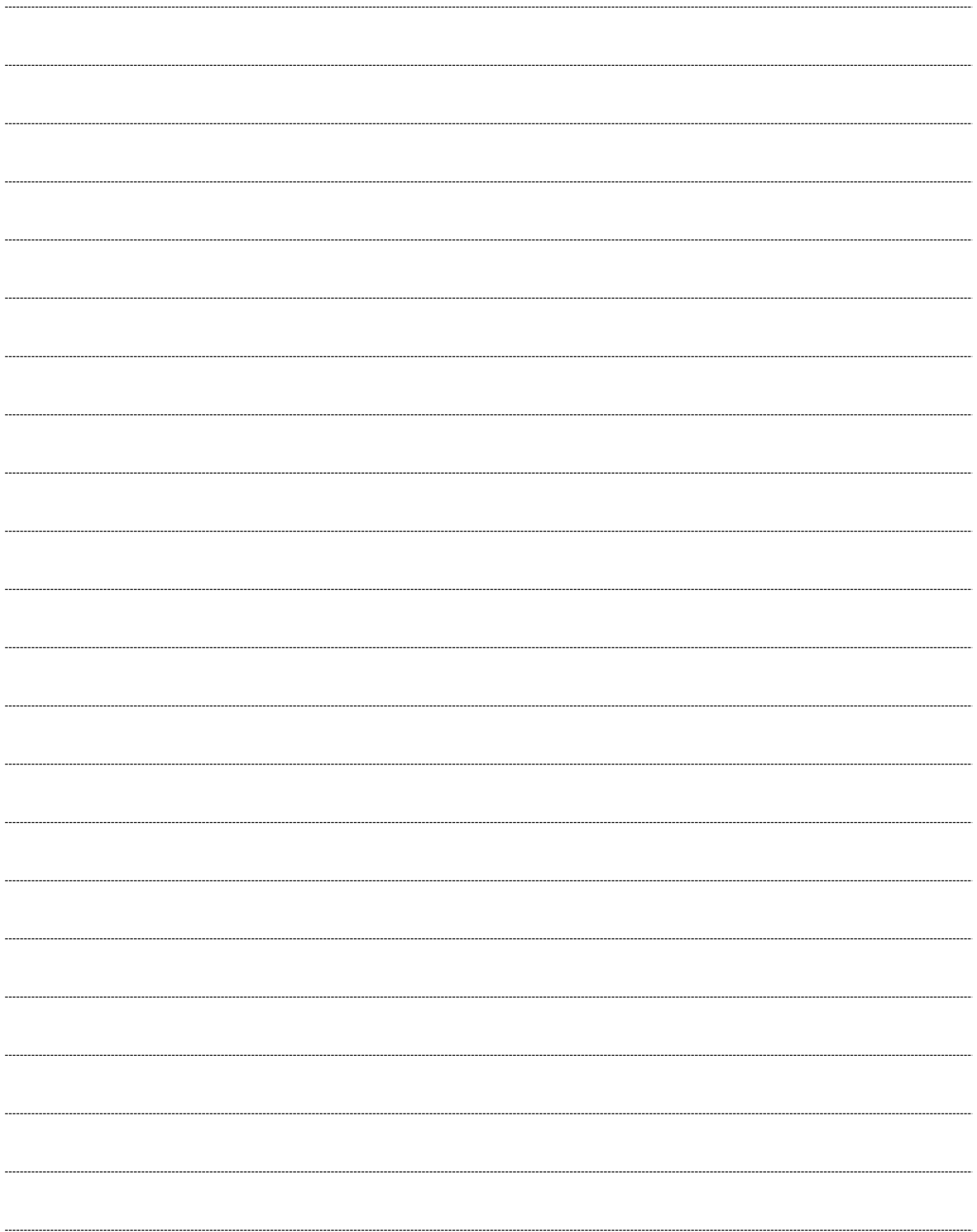
VI 考察

視覚優位な A くんに対して、ボードやカードなど見て分かる用具を用いることで、来所後に行うことを意識出来るようになった。日により気分には波があるが時間を置き、「かっこいい」「すごい」等のほめほめ作戦を執行することで気持ちを切り替え1人でこなしている。褒められることで嬉しさや達成感を積み重ね、A くんが身の回りのことを自分で取り組めるように、これからも支援をしていく。

参考文献

諏訪利明監修、林大輔著：TEACCH プログラムに基づく自閉症児・者のための自立課題アイデア集, 身近な材料を活かす 95 例, p. 113、中央法規出版, 2019





研究発表会

《ROOM 4》

抄録

9 月 16 日 (木)

チームケア学会 研究発表 【 ROOM 4 】

発表時間		法人	題名	発表者	ページ
1	10：00 10：15	社会福祉法人 狭山公樹会	お客様が安心して暮らせる施設にしたい ～ガチな事故防止委員会の挑戦～	片平 隼人	73
2	10：15 10：30	医療法人社団 百葉の会	「されて嫌なことをしない」「してさしあげたいことをする」ケアの取り組みと職員の変化	齊藤 和稔	74
3	10：30 10：45	社会福祉法人 湖成会	個人のスキル向上と統一したケア ～自らが百恵の郷で介護を受けたいと思う為に～	平野 千晶 鈴木 隆広	75
4	10：45 11：00	社会福祉法人 湖星会	デイサービスでお客様に楽しんで頂く為に ～コロナ禍での取り組み～	安齋 基博	76
11：00 11：15		休憩（15分）			
5	11：15 11：30	医療法人社団 ひがしの会	終末期における食事摂取について「最期の時までその方らしく、食べることを楽しんで」	島内 晶子	77
6	11：30 11：45	医療法人社団 平成会	アロマセラピーと認知症 ～難聴の方の不安軽減～	加藤 勇志	78
7	11：45 12：00	社会福祉法人 平成会	お風呂でスッキリ！ ～届け！職員と家族の思い～	大堀 晃司	79
8	12：00 12：15	株式会社 テイクオフ	今日は何作る？ ～食事作成のプロセスを生活リハビリとして取り入れて～	佐々木 香織	80
9	12：15 12：30	社会福祉法人 カメリア会	遠隔音楽用法の取り組み 第一報 ～基礎作りと今後の課題～	佐藤 皆美 古屋 明里	81
12：30 13：30		休憩(1時間)			
10	13：30 13：45	社会福祉法人 湖成会	その方らしく安心して過ごせる居場所へ・・・	杉田 美季	82
11	13：45 14：00	医療法人社団 百葉の会	分析は重要 ～前職の経験を生かして～	高田 知明 窪寺 沙予	83
12	14：00 14：15	医療法人社団 百葉の会	厨房の働き方改革 ～新調理システム導入による変化～	藤浪 奈菜	84
13	14：15 14：30	医療法人社団 百葉の会	部署間連携におけるコミュニケーションの重要性 ～いきいきプラザの業務改善を通じて～	井上 明莉	85
14：30 14：45		休憩(15分)			
14	14：45 15：00	社会福祉法人 湖星会	胃ろうから完全経口摂取へ ～自分らしさを取り戻すまで～	伊藤 美穂	86
15	15：00 15：15	社会福祉法人 湖星会	「おい、食いつちだ」	白井 美帆	87
16	15：15 15：30	社会福祉法人 湖成会	新しい食事提供のあり方 ～真空調理の可能性～	榊 ちづる	88
17	15：30 15：45	社会福祉法人 草加福祉会	食形態の見直し ～誤嚥予防～	梅津 かすみ	89

チームケア学会 研究発表抄録

題名	お客様が安心して暮らせる施設にしたい～ガチな事故防止委員会の挑戦～		
法人名	社会福祉法人狭山公樹会	事業所名	特別養護老人ホームひろせの杜
発表者	※片平 隼人	共同研究者	佐々木 啓介 有松 蘭
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

開設3年を過ぎ組織風土が形成しつつある中でいくつかの課題が見えてきた。その一つに機能不全状態の事故防止委員会の存在がありこの危機感を組織創生のチャンスと捉え取り組んだ経過と結果を報告する。

II 目 的

事故防止委員会を中心とし、リーダー筆頭に職員一人ひとりが「安全」を認識している組織風土を醸成していく。

III 方 法

1. 研究期間 2020年11月～2021年8月
2. 研究対象 当事業所の事故防止委員会
3. 具体的方法
 - 1) 事故防止委員会を月2回開催
 - 2) 事故防止委員会メンバー交代(11月)
 - 3) 事故報告書の書式改定
 - 4) 各ユニット事故集計・分析報告
 - 5) 事故対策実施モニタリング表作成
 - 6) 受傷確認表の作成
 - 7) 受傷消失確認のルール設定
 - 8) 事故防止委員会メンバー交代(4月)
 - 9) 全職員対象の意識調査を実施(5月)
 - 10) インシデント・アクシデント発生状況一覧の作成(7月)

4. 評価尺度

インシデント・アクシデント報告件数

IV 倫理的配慮

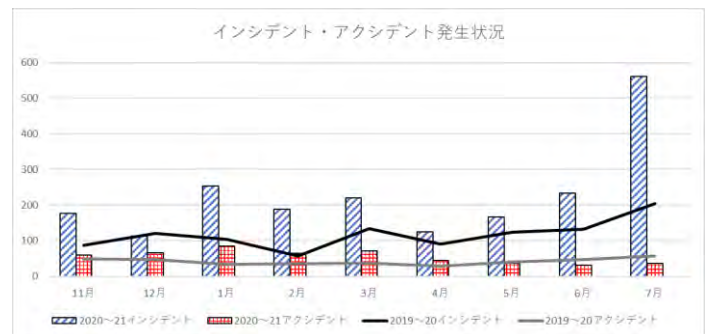
本研究にあたり、職員へ口頭にて説明し、書面にて同意を得ている。

V 結 果

当初の委員会では委員の発言も乏しく、状況報告の

みであったが、回を重ねるにつれ、意見が多くなってきた。更に情報共有が進むと、委員の役割と安全対策が明確になり、インシデント・アクシデントの報告件数が変化した。また、事故をきっかけに対象ユニットに内部研修を行った。内部研修が好評であった事が職員間で広がり、他ユニットから内部研修の申し込みがあった。職員の意識調査においては役職者と一般職員では意識の差が出る結果となった。

図1 インシデント・アクシデント発生状況



VI 考 察

「人は誰でも必ずミスをする」ことを前提に個々の職員の努力に頼るのではなく、組織で取り組み、ミスを発見する仕組みをつくることが重要である。月2回委員会開催、11月から委員メンバーに各リーダーを選出した2点は委員会の発信力と実行力を強化させ、組織全体で事故防止に取り組む姿勢の基盤になったと考えられる。特に当初からのねらいでもあったリーダーの理解と成長無くしてこの取り組みは完成し得なかったと推測する。委員会は心理的安全性を踏まえた内部けん制の仕組みを確立していくことで、ガチな委員会が人材育成機関になると考えられる。

参考文献 1) 山田 滋：事例に学ぶ 介護リスクマネジメント 事故・トラブル・クレーム対応 60のポイント,中央法規出版株式会社,2020



チームケア学会 研究発表抄録

題名	「されて嫌なことをしない」「してさしあげたいことをする」ケアの取り組みと職員の変化		
法人名	社会福祉法人 百葉の会	事業所名	特別養護老人ホーム ラスール掛川
発表者	※齊藤和稔	共同研究者	渡會容賀子・松下理奈・中田卓見
サービス種別	入所【病院(特養)老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

2020年2月1日にA社会福祉法人よりB事業所を事業譲渡いただいた。同時に職員達から不平不満が聞かれ、新体制はマイナスからのスタートとなったが、同じ道を歩む為にリーダーとして具体的なケア方針を職員達に明確に示すことから始めた。1年経過し、不平不満があった職員達がお客様を想い、考え、行動していく変化がみられるようになった。

II 目的

「自分がされて嫌なことをしない」「自分がしてさしあげたいことをする」という分かりやすいケア方針を明確に示すことにより、職員の心情と行動の変化にどう影響したのか明らかにし、職員育成とリーダーとしてのチーム作りで大切にすべきことを明確にする。

III 方法

1. 研究期間 2020年4月～2021年6月
2. 研究対象 2021年4月1日に在籍職員
3. 具体的方法

- 1) ケア方針をテーマとした研修の実施
- 2) 定期ユニット会議で1名カンファレンス実施
- 3) 企画実施の声かけ・支援と実施件数の比較
- 4) 全職員へ無記名のアンケート実施

4. 評価尺度

1年間を振り返り、職員の考え方の変化の実証

IV 倫理的配慮

対象者に対しては、口頭にて説明のもと無記名で参加自由での実施とした。

V 結果

1. ケア方針をテーマとした研修実施：24回
2. カンファレンス実施人数：72名

3. 施設企画実施数について年度対比を表1に示す。

表1 企画実施年度対比表 (件)

2020年(4月～6月)	2021年度(4月～6月)
3	12

4. アンケートは、全職員の内90%が回答。

質問1「ケア方針の理解と実践ができましたか？」出来ると回答者65%。

質問2「自分自身が1年間通じて気持ちや心境の変化はありましたか？」あると回答者65%。

VI 考察

伊藤らは「部下に主体性を持たせるには、言動で主体性を示すことが大切¹⁾」と述べており、今回リーダー自らが職員にケア方針を明確に示すことをしてみせることから始め、「自分が」を問い続けたことで、職員の心情と行動の変化が見られた。その変化により、職員の「してさしあげたい」が引き出され、お客様への企画の増加が見られた。何より職員が、したいことをのびのび言える自信に繋がっている。

リーダーがチーム作りをする上で、職員との共通体験を繰り返しながら、直接方針を示す場面設定と伝え続けることの重要性を改めて実感した。しかし、やりたいことがやり切れない、ケアが不安というアンケート記入もあり、やりたいことがのびのび出来る組織と体制作りは今後も続けていく。

参考文献・引用文献

- 1) 伊藤守：主体的に動く「オズの魔法使いに学ぶ組織作り」, 2014



チームケア学会 研究発表抄録

題名	個人のスキル向上と統一したケア～自らが百恵の郷で介護を受けたいと思う為に～		
法人名	社会福祉法人 湖成会	事業所名	特別養護老人ホーム百恵の郷
発表者	※平野千晶・鈴木隆広	共同研究者	
サービス種別	入所【病院・ 特養 ・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

2020年6月の看護部門会議内で「介護職員への個々のスキルアップが必要ではないか」と意見が飛び交った。職員への統一した介護技術指導が十分に行われず、「自己流の知識」また「業務をこなさなければ」というケアの中で、アクシデント件数が減少しない現状である。介護職員がケアの目的・方法・手順を理解し、お客様に安心したケアを提供する為に指導方法を考えた。【動画学習】に着目し、繰り返し確認ができる動画を活用した取り組みを報告する。

II 目的

1. 介護職員の個々の介護技術・知識に対しスキルアップを図り、専門職としての意識を高める。
2. 介助方法が統一できるよう、介護技術・知識を習得し、お客様に安心でより良いケアの提供を行う。

III 方法

1. 研究期間：2020年4月～2021年6月
2. 研究対象：特養お客様50名、介護職員19名
3. 具体的方法
 - 1) 2020年7月～陰部洗浄（ベット上、女性）
 - 2) 2020年10月～移乗介助（ベット→車椅子介助）
 - 3) 2020年12月～陰部洗浄（トイレ、男性）
 - 4) 2020年12月職員にアンケート調査
 - 5) 2020年1月～個人介助（A様.B様.C様.D様）
 - 6) 2020年4月～2021年6月アクシデント件数

4. 評価尺度

職員アンケートとアクシデント件数。

IV 倫理的配慮

研究発表で使用する情報・写真等についてはプライバシーに配慮し利益相反がない事に同意と確認をしている。

V 結 果

実践した結果の介護職員へのアンケート調査では「実際に介護現場で活かしているか」について確認を行った。19名中19名が「勉強になった」「活用できている」と回答が得られ、動画学習を活用した職員の満足度は100%であった。「今後学びたいこと」について「知識・技術を高めたい」という意見が聞かれた。

入所のお客様の転倒・転落・外傷のアクシデント合計数を月ごとに比較した結果、アクシデント件数に変化は見られなかった。

VI 考 察

「動画学習」を取り入れたことは、介護職員への良い刺激・前向きな学習意欲につながったことがアンケート結果からも考えられる。「映像は文字よりも2倍記憶に残る」（参考文献1）と示されている。職員一人一人が動画の介護技術と自分のやり方との比較が行え、介助方法の見直しを行う事が出来た。アンケート結果から、正しい介護技術と知識が理解でき、技術に不安を感じていた職員の安心に繋がったと考える。動画学習を通じて、誰もが同じ内容の研修を受けられ、統一したケアを実践することで、お客様へ安心できるケアの提供が少しずつ行えている。今回の結果から一度の学習では統一したケアを継続していくことは難しいという事がわかった。繰り返し学習できる機会をつくり、定着させる事が今後の課題である。

参考文献

- 1) 短時間で深く学べる。「効率的な勉強法」4つのステップ

引用文献

- 2) 「動画で勉強」は本当に効果的なもの？効果的な理由とおすすめ動画コンテンツを紹介



チームケア学会 研究発表抄録

題名	デイサービスでお客様に楽しんで頂く為に ～コロナ禍での取り組み～		
法人名	社会福祉法人 湖星会	事業所名	デイサービスセンターラースール伊達
発表者	※安齋 基博	共同研究者	デイサービス職員
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【 <u>デイサービス</u> ・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大が続き、A事業所でも感染を危惧し、デイサービスをお休みされるお客様が続出した。新型コロナウイルスの感染防止対策をしつつ、お客様にデイサービスに来て頂き、楽しんで頂きたいという思いがあり、このテーマとなった。

II 目 的

1. チームとして、ご本人様、ご家族様にラースール伊達ではしっかりとした感染防止対策をしているという事をアピールし、デイサービスを楽しんで頂く事。
2. 新型コロナウイルスが流行し行動範囲が狭くなり、外出出来ず、自宅で過ごすしかないお客様が体を動かしたり、楽しめる機会を提供する事。

III 方 法

1. 研究期間

2020年4月から2021年6月まで

2. 研究対象

デイサービスご利用者様

3. 具体的方法

- 1) 送迎車内、フロア内にオゾン発生装置を設置。フロアテーブルには透明アクリル板を置き飛沫感染防止を実施。手指消毒は入所送迎時ご自宅で、車両乗車前、食事、おやつ前、退所帰宅前に行う。検温を送迎前、フロア内で定期的に実施。
- 2) お客様、ご家族様、ケアプラン作成事業所の担当者様に新型コロナウイルス感染予防対策チラシを配る。
- 3) 接触しなくても楽しめるレクリエーションの検討と実施。体を動かす機会が減った為、その代わり音楽を聴きながら体を動かせる体操プログラムを重点的に実施。お客様が特に楽しみにしておられる調理レク

リエーションの提供方法を検討し実施。

4. 評価尺度

利用者人数の推移

IV 倫理的配慮

本研究について事前に説明し、同意を得る。本研究の中に登場する個人情報についても事前に個人情報の取り扱いについて説明し、同意を得る。

V 結 果

2021年6月現在で、事業所内での新型コロナウイルス発生者はゼロ。2020年4月時点では新型コロナウイルス感染予防の為にデイサービスをお休みしていたお客様がいたが、現在は全員が復帰された。レクリエーションでは音楽を聴きながら体を動かす体操プログラム、風船を落とさず投げ合う風船バレー、漢字当てゲーム等を感染防止対策を実施しながら実施。食べ物を扱うイベントでも、感染対策を強化し、開催。マスク越しではあるか、お客様の素敵な笑顔を見る事ができた。ラースール苗穂とリモートを通じて交流を行い、お互いに地域に纏わる質問を出し合ったりとレクリエーションを行う事ができた。お客様、ご家族様に新型コロナウイルス感染予防対策をしているという事をお知らせし、デイサービスを安心してご利用頂く事に繋がった。

VI 考 察

チームとして、お客様の安全の為に取り組み、現状を変えようとした取り組みが、お客様に安心して楽しみを提供出来、ご家族様の介護負担の軽減を支援できる場としてデイサービスの本来の役割が果たせたのだと思う。今後も新型コロナウイルス対策の強化に努めて感染者ゼロ、お客様に楽しんで頂けるデイサービスを目指していきたいと思う。



チームケア学会 研究発表抄録

題名	終末期における食事摂取について「最期の時までその方らしく、食べることを楽しんで」		
法人名	医療法人社団ひがしの会	事業所名	介護付有料老人ホームヘルスケアホーム井口
発表者	※島内晶子	共同研究者	永金、田中、山崎、石井
サービス種別	入所【病院・特養・老健・ <u>有料</u> ・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

本研究では、下血を繰り返し検査入院したが、高齢の為精密検査が行えず原因不明のまま、医師より看取り期にあると宣告されて施設へ戻られ、食欲低下の為食事水分摂取が殆どできなくなった入居者に対して行った取り組みを発表する。

II 目 的

施設での終末期における食事摂取のあり方について、既存の提供する食事にこだわらず、家族の協力を得ながら本人・家族の希望を尊重した食事を提供することで、本人の喜びに繋がり、家族・職員共に後悔の少ない看取りケアを行えるか検証する。

III 方 法

1. 研究期間

2021年3月～2021年5月31日

2. 研究対象

A様 90歳代 女性 要介護4

3. 具体的方法

- 1) 本人の好きな物等を伺い、通常のメニュー以外で施設から提供できる食事内容を検討し、家族にも協力していただく。
- 2) 食べられた物やその時の反応等を別ノートへ詳細に記録し、それを基に定期的なカンファレンスを実施しケアに活かす。

4. 評価尺度

食事水分摂取量の比較と体重の変化の観察

IV 倫理的配慮

A様の家族には本研究の説明を行い口頭と書面の両方で同意を得た。

V 結 果

【食事内容】

全粥、1cm刻み食を提供。高栄養のエンシュアは食べやすいゼリー状にする。1日に1個ゼリーを提供。家族からの差し入れ。

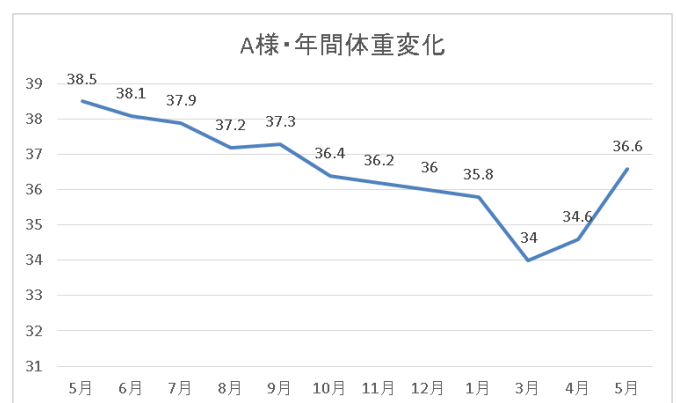


図1 体重変化

VI 考 察

家族が「食べられるものを食べて、少しでも体力をつけてほしい」という希望により、A施設で出来ることを考え、食事提供をした。食事は椅子に座って食べることに着目し、毎食実施してきた。食事量に大きな変化はなかったが、幸いにもADLに変化がなく、座位保持が出来たため、入院前と同じように、3食とも食堂で椅子に座って食事を提供した。その結果、離床を促し、規則正しい生活となり、寝たきを予防できた。近くに住む長男から初め、「これまで十分関わってきたので、何があっても悔いはないが、遠方にいる長女・次男はしばらく本人と面会できておらず、元気な時のイメージしかない。現状を受け入れ、納得して看取る心の準備をする時間が欲しい。」と言われていたが、取組を行っていく中で家族より「母が自分達のことを解るうちに会えて良かった。」との言葉が聞けた。これからも、本人の趣向を聞き取り、好きな食事を提供していけるようチームで取り組んでいく。



チームケア学会 研究発表抄録

題名	アロマセラピーと認知症～難聴の方の不安軽減～		
法人名	医療法人社団平成会	事業所名	介護老人保健施設グリーンケアハイツ
発表者	加藤 勇志	共同研究者	
サービス種別	入所【病院・特養・ 老健 ・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

認知症で声出しのある方が、難聴のために声が大きく、周りのお客様にも影響が出ていた。あまり声出しが大きくなるとこちらの言葉も理解されない状態だった。以前ほかの方に行ったアロマセラピーに効果がないかという話になり、取り組みに至った。

II 目的

アロマを使用することで、難聴のある認知症の方の不安を少なくし、声出しの軽減を図る。

III 方法

1. 研究期間

令和3年5月12日～令和3年6月15日

2. 研究対象

A氏 既往歴：アルツハイマー型認知症、
難聴、うつ滞性皮膚炎

3. 具体的方法

- 1) 令和3年5月12日～令和3年5月25日
アロマを使用しない状態で声出しの時間データを収集。
- 2) 令和3年6月2日～令和3年6月15日
アロマを使用し、声出しの時間データを収集。
- 3) 実施したアロマセラピー
 - (1) アロマ液
水 50ml に対し、ラベンダー：オレンジ (2:1)
 - (2) 実施方法 声出しの多い午後の時間13時、16時。噴霧する

4. 評価尺度

実施前と実施後のお客様の状態を比較する。

IV 倫理的配慮

研究対象とさせていただくこと説明し、ご家族にご理解を得ている。

V 結果

5月12日～5月25日のアロマを使用した期間については、声出し時間の合計は約57.5時間（1日平均約4時間）という結果となり、6月2日～6月15日のアロマセラピー使用期間の声出し時間の合計は約28.2時間（1日平均約2時間）と、約50%声出し時間が軽減した。

VI 考察

アルツハイマー型認知症においてまず嗅覚障害がおこり、海馬の萎縮により記憶障害になっていく¹⁾。軽度の認知症の方の認知機能改善に効果があるとのことだが、嗅覚細胞は再生しやすいとのことで、認知症で難聴を持った方でもアロマセラピーの効果が示された。ご本人の気持ちの安定を図る為に夜間に良いとされるラベンダーとオレンジのオイル²⁾を用いた。また、トイレの誘導を行うことでも声出しが止まる可能性もあったが、アロマセラピーを行っていなかった時とトイレに行く回数はほぼ一緒だったので、アロマセラピー自体の効果は証明できた。今回は短期間であったが、アロマセラピーを継続して行っていくことで匂いへの慣れが生まれ、効果が薄れてしまうことも考えられる。また、ほかのアロマでも別な効果があるのかも試していきたい。

参考文献

- 1) 立花直樹：認知症対応型通所介護施設におけるアロマの効果と課題（聖和短期大学紀要6号），P39～P52，聖和短期大学，2020
- 2) 野田明子、宮崎総一郎、浦上克哉：アロマセラピーの快眠・認知機能改善効果への期待，P42～P48，健康文化，2018



チームケア学会 研究発表抄録

題名	お風呂でスッキリ！ ～届け！職員と家族の思い～		
法人名	社会福祉法人 平成会	事業所名	リアンヴェール美里
発表者	※大堀晃司	共同研究者	
サービス種別	入所【病院・ 特養 ・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

A 施設に入所中の A 氏は、強い入浴拒否があり入浴されておらず、1～2 か月に 1 回ご家族様が温泉にお連れし入浴されていた。しかし、新型コロナウイルス対策として直接面会の制限を開始し、ご家族様との温泉外出が出来なくなったことで、ご家族様は「無理矢理でも施設で入浴して欲しい」と話されていた。家族の思いと衛生面を考え、「定期的な入浴が行えたら」という思いから始まった入浴支援の取り組みを報告する。

II 目 的

定期的な入浴が行えることで、A 氏の衛生面を保持し、快適で安心な生活が送れるよう支援する。

III 方 法

1. 研究期間

2020 年 6 月～2021 年 4 月

2. 研究対象

A 氏 80 代 女性 要介護度 3
高血圧 ラクナ梗塞 アルツハイマー認知症

3. 具体的方法

- 1) A 氏との信頼関係作り。
難聴で聞き取れない際に怒ってしまわれる為、職員と関わる時間が薄めである。信頼関係を築く為、職員は 1 日最低でも 5 分ほどの世間話などを行い、関りを持つようにする。
- 2) 入浴していない期間が長く有ったので、居室での足浴・部分清拭等から始め、慣れて頂いた後に脱衣場へと場所を移して行う。
- 3) 浴室内を造花や風景画を貼り、興味をひくレイアウトにし誘導を行う。
- 4) 拒否の理由はどのようなもので、どのような声

かけでどこまで誘導できたかを詳しく記録に残し、最も誘導できた声かけに統一して対応行う。
5) 介護課職員だけではなく、リハビリ課や看護課職員も、入浴の声掛けを行う。
6) ご家族様と連携し、どのような誘導方法が良いか相談し協力して頂く。

4. 評価尺度

研究前と研究後での入浴回数を比較する。

IV 倫理的配慮

本研究の対象となる A 氏のご家族様へ、個人情報の取り扱いと写真掲載について口頭にて説明、同意を得ている。

V 結 果

関係作りやレイアウト変更、声掛けの統一などの取り組みを始め、徐々に脱衣場まで誘導する事が出来るようになり、足浴・部分清拭・洗髪を行う事ができた。令和 3 年 3 月に「耳が遠いから文字だと読めるかもしれません」とご家族様が手紙を作成して下さい、その手紙を用いて時間をかけて本人が理解できるよう声掛け・誘導を行い女性職員対応で入浴される。その後、4 月に 2 回入浴する事が出来た。

VI 考 察

今回の取り組みは、様々な角度からアプローチを行いユニット職員・他部署・ご家族が連携し対応を継続する事で入浴実績を得ることが出来た。A 氏の難聴や認知能力の低下もあり、統一手法でも入浴に繋がらない事もあるが、これからも A 氏の定期的な入浴が行える様、チーム全体でのサポートに取り組んでいく。

参考文献

- 1) 杉山孝博：マンガでわかる認知症の 9 大法則と 1 原則，98P～103P，株式会社法研，2017.7



チームケア学会 研究発表抄録

題名	今日は何作る？ ～食事作成のプロセスを生活リハビリとして取り入れて～		
法人名	株式会社テイクオフ	事業所名	ケアステージおれんじ二色根
発表者	※佐々木 香織	共同研究者	ケアステージおれんじ二色根職員
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・ <u>認知症対応</u> 】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

「元気に過ごしたい、事業所にずっと通いたい」という本人の意志、「認知症の進行を遅らせて意欲的に過ごして欲しい」という家族の意向から、事業所で行った取り組みを報告する。

II 目 的

デイサービスという限られた環境下での生活リハビリテーションがどのような心理的影響があるかを研究する。

III 方 法

1. 研究期間

2021年3月1日～2021年7月10日

2. 研究対象

A様 女性 80歳代 要介護1 脳血管系疾患
アルツハイマー認知症 生活自立度 IIb

3. 具体的方法

- 1) お客様のカンファレンスを行い、できる事・できない事が何かを情報共有する。
- 2) 食事作成のプロセスを生活リハビリテーションとして「献立の作成」「必要な材料の調達」「調理」「盛り付け」と工程別に分けて実行に移す。
- 3) 介護日誌や連絡帳に細かく記載し、家族との情報共有図り、行動意欲・心理状態がどのような変化として表れているかを記録する

4. 評価尺度

1ヶ月ごとの変化を記載し、家族・事業所による5段階評価を行う。

IV 倫理的配慮

研究対象となるお客様及び家族に研究発表の目的・方法を口頭と文章で説明。お客様のプライバシーに配慮し、個人情報には研究発表以外の目的では使用し

ない事を同意書にて同意を得ている。

V 結 果

1. 意欲の低下により、自宅で家事全般が行えていない事が判明する。
2. 工程別に実行に移し、初めは調理に否定的だったが、徐々に自身の嗜好が聞かれこだわりが聞かれるようになった。
3. 料理を作った事を家族に報告したり、自宅で今までした事がなかった事を意欲的に行うようになった。

VI 考 察

今回の研究では調理という1つの項目に絞った内容で支援を行っているが、本人にとって、新たな役割を見出す事が出来た。本研究が及ぼす影響により、調理以外の生活リハビリテーションへの意欲も見られていることから、目的は達成できたと思う。

「やらされている」ではなく、「やりたい」と思える支援を行ったことが、良い結果に繋がったとも考えられる。今後はケアマネージャーとも連携を取りプランに落とし本格的に行っていく。

お客様の心身及び、家庭状況や、その方を取り巻く環境を知らなければ、生活リハビリテーションを在宅生活に活かす事は難しく、その方らしく生活していく為には、それぞれのお客様に合った物を見つけ、連携を取り支援していかなければならないと改めて感じた研究であった。

参考文献

- 1) 西田征治：調理活動プログラムが認知症者の作業遂行技能に与える影響，2017

<https://www.bing.com/search?q>



チームケア学会 研究発表抄録

題名	遠隔音楽療法の取り組み 第一報 ～基礎作りと今後の課題～		
法人名	社会福祉法人カメラア会	事業所名	グループホーム カメラア
発表者	※佐藤皆美 古屋明里	共同研究者	宮田友美・白木瑛梨佳・金子元子
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

認知症の人に対して音楽を用いて関わる時には、1人ひとりに合わせた配慮が必要であり、グループホーム(以下 GH)では、音楽療法士(以下 MT)とユニット職員(以下 CW)が、お客様の心身の状態に寄り添いながら対面音楽療法を提供している。ではそれが遠隔音楽療法となった場合、MT と CW は何に配慮したらよいのか、Zoom を使用しチームで体験することにした。

II 目 的

双方向型の遠隔音楽療法を試行。配慮が必要な点をまとめ、得られた知見を今後の認知症ケアに寄与する。

III 方 法

1. 研究期間 2021 年 4 月～6 月 (1 回 15 分×2 回)

2. 研究対象および具体的方法

1) 試行に向けて

職員間で目的を共有。日頃の対面音楽療法の様子を参考に MT が活動内容を立案した。

2) 主な活動内容は挨拶/手遊び歌/歌謡曲歌唱/挨拶。

3) MT 側の環境

MT1 名が別室から遠隔音楽療法を配信。伴奏にキーボードとウクレレを使用。背後にホワイトボードを配置し、歌詞を掲示した。バーチャル背景も活用し、季節の花やハワイの風景等を映しなら会話を促し実施した。

4) ユニット側の環境

場所はリビングのテレビ前。CW1 名(安全確保・接続音響確認・相互交流の補助)と GH お客様 3 名が遠隔音楽療法に参加した。

A 様:90 歳代女性 アルツハイマー型認知症

B 様:100 歳代女性 混合型認知症

C 様:90 歳代女性 アルツハイマー型認知症

活動前後の表情²⁾と、発言や行動を CW が記録。

5) 試行後、取り組みで得た知見を職員間で共有。

IV 倫理的配慮

お客様ご家族様に研究の同意を頂いている。

V 結 果

チームで体験し「各職員の動き」「行いやすい音楽活動の特徴」「言語/非言語コミュニケーションの割合」「物的課題」について得られた知見を共有することができた。表情変化に個人差はあるが、お客様同士の会話を発展する場面が若干確認された。

VI 考 察

音楽療法は人間関係の中で音楽が用いられる営み³⁾であり、特に対面音楽療法では、音楽以外の要素、つまりその場に居るすべての「人」が環境となり互いに影響し合って活動が展開していく。しかし遠隔になると「空気感」を瞬時に察知し、その時々のお客様の状態に音楽で寄り添うことが難しい。その際に必要となるのが、MT と CW、あるいは CW 同士の共通した目的意識とチーム力であると今回の体験で再認識した。

今回の取り組みは「チームで体験する」に重きを置いた。これからも、音楽を通した認知症ケアについて探求し、チームでチャレンジしていきたいと思う。

参考・引用文献

1) 佐々木和佳・伊志嶺理沙・二俣泉:

認知症 ケアと予防の音楽療法, p14～p34, 春秋社, 2009

2) 特別プロジェクト 特別委員会 MT チーム:

音楽療法参加アンケート, 4)フェイススケール, 日本音楽療法学会, 2013

3) 宮本啓子・二俣泉: 音楽療法を知るーその理論と技法ー, p17.18, 杏林書院, 2014



チームケア学会 研究発表抄録

題名	その方らしく安心して過ごせる居場所へ・・・		
法人名	社会福祉法人湖成会	事業所名	デイサービスセンター稲瀬
発表者	杉田美季	共同研究者	
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【 <u>デイサービス</u> ・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

高齢者が施設に入所する事によるリロケーションダメージの事例は多く聞かれる。通所介護サービス利用を通してお客様やご家族に心身的ダメージがあるのではないかとA氏との関わりで、改めて気づかされることがあった。私達が行っているケアがお客様やご家族様にどのように影響を及ぼすのか考察し、ケアの見直しと改善を図った結果を報告する。

II 目 的

その方らしく安心して過ごせる居場所を提供できるケアの工夫と継続をしていく。

通所介護サービスの利用における在宅生活への影響を職員が理解し、サービス向上に繋げる。

III 方 法

1. 研究期間：2020年7月1日～2021年6月30日

2. 研究対象：A氏 80歳代 男性 要介護5

1) 障害高齢者の日常生活自立度：C1

認知症高齢者の日常生活自立度：Ⅲb

2) 要介護のお客様及びご家族様 15名抜粋

3. 具体的方法

1) A氏の状態・言動の情報共有を職員及びご家族、他事業所と図る為に「共有連絡帳」を活用した。

2) A氏への声掛け、ケアにおけるA氏への言動変化を分析、検証した。

3) A氏の送迎時に、ご家族の介護における不安を汲み取り、不安の解消に努める取り組みを行う。

4) 既存のお客様、ご家族様へのサービスを利用した当初の在宅生活への影響などの聞き取り調査及びアンケートの実施する。

4. 評価尺度

ご家族への聞き取りアンケート。

IV 倫理的配慮

研究発表で使用する情報・写真等についてはプライバシーに配慮し、利益相反についても確認した

V 結 果

1. 利用開始時、A氏の帰宅願望の防止策ばかりに気を取られて、A氏のストレスは増加していた。

2. 事業所ごとサービスの提供方法や環境の違いがA氏にとってストレスとなっている事に気づき、連携し改善したことで、A氏の言葉が変わる。職員間でもA氏が発している言葉や、言葉に裏にある気持ちも汲み取れるようになった。

3. ご利用時の様子や企画をご家族へ報告すると「迷惑をかけて申し訳ない」という不安な思いから、「デイサービスに楽しんで行ってくれている」という安心する思いに変わっていた。

4. アンケートでは、お客様やご家族の利用後の負担感もある事がわかった。その事は、職員にも話せない事もある事がわかった。

VI 考 察

リロケーションダメージを軽減する為には、お客様をはじめご家族とも信頼関係を築くことが大きいと感じた。アンケートでは、ご利用開始から1ヶ月の間が信頼関係を築く上で大切な時期であり、その間に通所サービスとしてご家族への向き合い方が今後の課題となった。

利用時の写真や送迎時にご家族と言葉を添えた関わりを持つことが、この期間集中的に行えるようなケアを目指したい。



チームケア学会 研究発表抄録

題名	分析は重要 ～前職の経験を生かして～		
法人名	医療法人財団 百葉の会	事業所名	ゆひもや
発表者	高田知明・窪寺沙予	共同研究者	
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【 <u>デイサービス</u> ・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

A 事業所は 2018 年度、2019 年度と過去記録したことの無い程の低稼働となった。生活相談員が新たに着任し、営業職での経験的視点から見たとき圧倒的に低稼働に対する分析やアクションが不足していると強く感じた。

II 目 的

異業種で展開していた営業における分析の知識や経験を、介護の営業にも適応させることが可能なのか。稼働向上に繋げる事が出来るかを明らかにすること。

III 方 法

1. 研究期間 2020 年 4 月～2021 年 5 月
2. 研究対象 A 事業所を利用のお客様 81 名
3. 具体的方法

- 1) 予定稼働と実績稼働の差異を把握
- 2) キャンセル率の把握、分析
- 3) 分析に応じたお客様へのアプローチ
- 4) 強み、弱みの把握のためのアンケート実施
- 5) 増回へのアプローチ検討

4. 評価尺度 年度別での稼働率の変化

IV 倫理的配慮

データ分析にあたり、個人名についての表記は A 事業所内のみに留める。

V 結 果

1. 予定稼働と実績稼働の差異を毎日把握することで、キャンセル数を把握する事が出来た。
2. キャンセル率の把握・分析を行う事で私用によるキャンセルが多く、振替利用が少ない事が判明した。
3. 振替の案内を作成、お客様やご家族様へ定期的

に案内を配り周知を継続的に実施。

4. お客様やご家族様が、A 事業所に対して持っている印象を認識する事が出来た。
5. 売りを前面に押し出した増回案内を実施。人気レクリエーションや、毎月定番のレクリエーション企画につなげることが出来た。

稼働率は表 1 に示す通りであった。

表 1 年度別稼働率 (単位：%)

2018 年	2019 年	2020 年	2021 年
69.0	69.2	80.9	87.8

VI 考 察

今回の取り組みの結果から他業種で活用していた分析やアクションは、介護の世界でも適応することが出来ると言える。畑農鋭矢・水落正明は「仮説で終わらない事が大切」「現実の観察やデータ分析に基づいて結論を見出すべき¹⁾」と記しており、事象に対する究明として分析が重要である事を述べている。今回の取り組みで使用した分析手法は、お客様にご利用いただいた結果としての稼働や予算への過不足を、数字を入力するだけでその日若しくはその週の内に把握出来る。地道な対応ではあるが、どここの事業所でも対応が可能な活動であると言える。また、過不足の具体的な数字や取り組み目標を全職員に提示する事で、今足りないことを分かりやすく伝えることもでき、結果的に目標達成のために一体となって活動する事につながり、職員のモチベーション向上にも繋げる事が出来た。だからこそ、A 事業所は今後もこの分析を継続する。

参考文献

- 1) 畑農鋭矢, 水落正明: データ分析をマスターする 12 のレッスン



チームケア学会 研究発表抄録

題名	厨房の働き方改革～新調理システム導入による変化～		
法人名	医療法人財団 百葉の会	事業所名	介護老人保健施設 星のしずく
発表者	藤浪 奈菜	共同研究者	長倉 桃
サービス種別	入所【病院・特養 老健 有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

私達、栄養士はお客様 1 人 1 人に合わせた食事ケアを実践する為、日々業務に取り組んでいる。しかし、やりたいケアがたくさんある一方、時間外勤務の増加や退職者が続くことも課題であった。“働き続けたい職場”を作りたいと思っていた時、新調理システム「クックチル」の導入が始まった。クックチル：事前調理し提供直前に再加熱する調理・提供方法

II 目 的

クックチル導入が“働き続けたい”と思える職場作りに効果があるか明らかにする。

III 方 法

1. 研究期間：2018 年 4 月 1 日～2021 年 3 月 31 日
2. 研究対象：食事サービス部常勤 10 名非常勤 15 名
3. 具体的方法：1)クックチル導入の手順検討実施
2)勤務体制・業務の見直しと変更
4. 評価尺度

クックチル導入前後の業務と時間外勤務の比較

IV 倫理的配慮

対象者には研究内容および、データの使用は本研究以外の目的では使用しない旨を説明し、同意を得た。

V 結 果

1. クックチル導入後の流れ（2019 年 4 月より導入）
2019 年 4 月：施設内で朝食のみ活用
2019 年 5 月：グループホームへの配送開始
2020 年 5 月：施設内で 3 食に活用
2. 勤務体制の見直しと変更
2019 年 11 月から早・遅番の人数を削減。2020 年 10 月から早番の出勤時間を 30 分遅らせることで退職理由に挙がっていた早朝勤務の負担軽減ができた。その分日勤帯を増やせ、日中に事務時間の確保が可能と

なり、時間外勤務が 78%減少した。

表 1 業務改善と時間外の変化

期間	2018 年	19.4 ～ 19.10	19.11 ～ 20.9	20.10 ～ 21.3
業務改善			早遅人数削減	早番 6 時
平均時間外	202 時間	183 時間	60 時間	40 時間

VI 考 察

クックチル導入効果として①労働環境の改善と人件費の削減②計画生産による作業の平準化・効率化による生産性の向上とあり、今回同様の結果が得られた。話し合いを繰り返し、ゼロから仕組みを作り上げ、導入 7 ヶ月は時間外勤務が減らなかったがクックチルの仕組みづくりや職員への周知・育成などクックチルを体得する為にかかった時間だったことが整理された。また、役割の明確化に伴って、業務の細分化を行うことにより業務の偏りが減り、時間外勤務の削減に繋がったと考えられる。

更に配送先のグループホームと進捗や成果の振り返りを行う中で「食事が美味しい」「ケアに集中する時間が増えた」等の意見から、やりがいの実感や改善の機会となった。クックチルの導入だけではなく「このケアをやり続けたい」や「働き続けたい環境を作りたい」という想いをチームで共有できたことがチームを変えていく力になったと考える。私達はチームでお客様の為の食事ケアを考え続けていく。

参考文献・引用文献

- 1)鈴木久乃・殿塚婦美子・長田早苗:栄養・食事管理のための対象者別給食献立, P69, 株式会社建帛社, 2017



チームケア学会 研究発表抄録

題名	部署間連携におけるコミュニケーションの重要性～いきいきプラザの業務改善を通じて～		
法人名	医療法人財団 百葉の会	事業所名	港区立三田いきいきプラザ
発表者	※井上明莉	共同研究者	江口芳江
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 <u>その他</u> 【いきいきプラザ】		

I はじめに

いきいきプラザは、高齢者の学習活動・介護予防・健康づくり・交流の場を提供する公共施設である。業務部署は総合運営、喫茶運営、トレーニング運営の3つがあるが、新型コロナウイルスに伴う業務の過多により、総合運営部署の業務負担が大きくなった。そこでこの局面を「職員の意識を根本から変え、部署間連携を強化するチャンス」であると捉え、3部署の職員が協力して効率的に業務を行うための改善を行った。

II 目 的

効率的な部署間連携に必要な要素を検討し、連携の効果を考察する。

III 方 法

1. 研究期間

2020年3月～2021年5月

2. 研究対象

施設職員 14名

3. 具体的方法

- 1) 職員への聞き取り調査およびアンケートによる、現状の不足点や不満点の把握。(2020年8月)
- 2) ミーティングの実施と業務改善策の検討。
- 3) 業務改善の実践と効果確認。
- 4) 振り返りアンケートの実施。(2021年5月)

IV 倫理的配慮

発表における写真等の掲載については、利用者様の同意を得ている。また、職員には研究に関する同意を得た上で個人の特定ができないように配慮している。

V 結 果

職員からの聞き取りとアンケートからは、他部署の業務を把握していないことや、連携不足が挙げられたため、3部署全ての職員が参加するミーティングにて

業務改善策の募集を行い、以下の業務改善を試行した。

1. 部署が平等に業務を担えるように受付担当などを割り振った職員配置表を作成し運用
2. 貸室の貸し出し有無や消毒状態の可視化
3. 職員の行動予定や休憩時間の可視化
4. 事務室内にタスク記入ボードを導入

振り返りアンケートの結果、対象の職員全員が「他部署の業務に携わる機会が増えた」「部署を越えて館全体で連携して業務が行われるようになったと感じる」と回答した。自由記載では「他部署の職員とコミュニケーションをとる機会が増えた」「相談しやすい環境になった」といった記述があった。また、他部署の業務を担うことにより、今まで関わりのない利用者様と会話をするきっかけが生まれ、利用者様が新規のサービスを利用する等の副次的効果も見られた。

VI 考 察

山口によると「チームワーク行動が発達し、定着していくプロセスにおいて、メンバー間のコミュニケーションが重要な役割を持つ¹⁾」ことが指摘されている。今回の業務改善により、部署の垣根を越えて業務を分担したところ、職員同士の声かけやお客情報共有が活発に行われるようになった。これは職員同士のコミュニケーションがとりやすくなったことで、チームとしての結束力が強まった結果なのではないかと考えられる。また、些細なことでも相談できる環境になったことにより、より働きやすい職場に変化したと言える。部署間で密接なコミュニケーションを構築することが、よりよい施設づくりに繋がることを理解した。

参考文献・引用文献

- 1) 山口裕幸：チームワークの心理学ーよりよい集団づくりをめざしてー，サイエンス社，2008。



チームケア学会 研究発表抄録

題名	胃ろうから完全経口摂取へ～自分らしさを取り戻すまで～		
法人名	社会福祉法人 湖星会	事業所名	特別養護老人ホーム ラスール苗穂 入所
発表者	※伊藤美穂	共同研究者	菅原加奈子 和田佳子 江端真弓
サービス種別	入所【病院・ <u>特養</u> ・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

食に対する嫌悪感から嘔吐を繰り返され胃ろうを造設、生きる気力を失いA施設へ入居されたA氏。他のお客様の言葉をきっかけに食への興味を持つようになり、胃ろうを中止して完全経口摂取となるまでチームで取り組んだ。A氏の湧き出る「食」への意欲を叶えることで、生活の中に楽しみが生まれ、生きる気力を取り戻すことができた。

II 目 的

経口摂取を可能にすることで夢や生きがいを持った生活に繋げたい。

III 方 法

1. 研究期間

令和2年7月2日～令和3年7月20日

2. 研究対象

A氏 80歳代女性、令和2年4月、くも膜下出血後に食欲低下し胃ろうを造設する。

3. 具体的な方法

- 1) 多職種によるカンファレンスを開催、経口摂取を開始する。
- 2) 会話や記録から想いや心境の変化を汲み取る。

4. 評価尺度：食事の機会と生活の変化

IV 倫理的配慮

本研究を行うにあたり、対象者および家族へ研究の趣旨と目的を説明し、同意を得ている。

V 結 果

「あんたご飯食べたの？」生きる気力を失っていたA氏の心が、他のお客様からのこの言葉で揺れ動いたのをスタッフは感じた。A氏から食べたいという意欲が見受けられるようになり多職種でカンファレンスを開催。誤嚥防止の為の見守り、頻度や量、時間帯に

ついて検討し経口からの摂取を開始した。次第にA氏の食に対する意欲が高まるにつれ、オヤツを希望される頻度も増えていった。ある日、A氏が職員のカップラーメンを見て「それ食べたい」と希望されたため、オヤツばかりでなく数口でもいいので食事を食べてもらいたいと思い、多職種で再びカンファレンスを開催しソフト麺を提供した。徐々に食べられる喜びから、皆と食べたいという思いへ変化が見られ、ソフト食で昼食のみ提供開始。問題なく経過され、ついにA氏から胃ろうの拒否が見られるまでとなり3食経口摂取が開始となった。経口摂取できるようになるとともに、リクライニングから車椅子、ベッド上の排泄からトイレでの排泄と生活も様変わりしていった。今では、広告をみて洋服を買いに行きたいと話されたり、自発的に食器洗いをされたりとA氏らしさを取り戻した日常生活を送られている。いつかは娘様と外食へ行きたいという希望をもてるようになった。

VI 考 察

入居当時は「死にたい」「死に場所を探している」と生きることに後ろ向きな発言ばかりだったA氏が、他のお客様の言葉や楽しそうに食事をされている環境により「食」への意欲がかき立てられた。そんな中、A氏が表現した言葉を逃さず、A氏のタイミングで想いを叶えられたことで、食に対する嫌悪感を抱くことなく、成功体験に繋げることが出来たと考えられる。1つの成功体験をA氏・ご家族・職員が共有し「食」という共通の目標を掲げ取り組んだ結果、A氏らしさを取り戻され、希望を持つことへ繋がったと考える。

参考文献

- 1) 竹内孝仁：胃ろうよさようなら、p61～63, 筒井書房, 2011



チームケア学会 研究発表抄録

題名	「おい、食いっただ」		
法人名	社会福祉法人 湖星会	事業所名	特別養護老人ホームラースール坂下
発表者	※白井美帆	共同研究者	山口美和子 佐野由紀江
サービス種別	入所【病院・ <u>特養</u> ・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

A氏は、毎日の食事をとても楽しみにされ、他の入居者様と一緒に、おいしそうにご飯を食べられていた。しかしむせ込む事が多くなり、ある日急に飲み込む事が全くできなくなってしまった。食べたいという気持ちはあり、胃ろうとなつてからも「おい」と、職員を呼び、ご自分の口元を指さし「食べたい」と訴えられていた。A氏のもう一度口から食べたいという思いに対して、私たち職員の取り組みをここに報告する。

II 目的

胃ろうとなつたA氏に、口から食べていただく事で、心地よい思いに浸かり、生きている自分を支えるといった心理的効果を期待して、「食べたい」「味わえる」という幸せを感じていただき、A氏の思いを実現する。

III 方法

1. 研究期間

令和元年11月1日から令和2年2月29日

2. 研究対象

A氏 90歳代 女性 要介護5

平成29年7月入居 食事形態、軟飯一口大 入院を機に全粥一口大、全粥きざみと、飲み込みも少しずつ悪くなり5月12日よりミキサー食となる。9月中旬頃よりむせ込み見られるようになり、下旬には全く飲み込めなくなる。10月10日胃ろう造設となる。

3. 具体的方法

朝夕の口腔ケアの実施。唇の乾燥予防と味わう楽しみとして、口腔ケア後にはちみつを塗る。事あるごとの口腔体操の実施。看護師、介護職員と協力し、2月の誕生会に向けて食べられるものを選ぶ。無理なく食べられる物として、綿あめと大好きなチョコレートを

湯せんで溶かして、食べて頂くとした。食す際は、万が一に備え吸引機を準備し、看護師が立ち会う事とする。

IV 倫理的配慮

本事例実施、公表に当たり、口頭にてA氏のご家族に対して趣旨、およびプライバシー保護に関する説明を行い、同意を得る。

V 結果

綿あめ機を購入し、目の前でお作りし視覚や味覚、嗅覚から綿あめを楽しんで頂いた。A氏は、他の入居者様と一緒に食べられる事を好まれており、協力ユニットの方々も一緒に参加し、皆さん「おいしい、おいしい」と食べられていた。A氏は、自ら口を大きく開けられ、ちぎった綿あめを「うまい、うまい」と食べられ、ご自分の口を指さし、お代わりを訴えられていた。A氏の好きなチョコレートも、自ら口を開けられ、食べることを楽しまれている様子であった。誕生会に息子様も招待し、一緒に食べることが出来、とても嬉しそうであった。

VI 考察

好きな物をおいしく食べる、季節の物を味わうことは、生きる上での大きな喜びであり、楽しみである。

私たち介護職は、常にこれが最後の食事になるかもしれないと考えながら、日々お年寄りにたずさわっている。今回、綿あめとチョコレートを食べられたA氏の表情はとても明るく、持ち前のひょうきんさもあり、おどけた顔をされたり、とてもうれしそうであった。

胃ろうにすることによって、栄養状態は改善され、生き延びる事は出来るが、食べる喜びは得ることが出来ない。A氏の笑顔をこれからも見続けて行きたい、明るくおどけた顔をずっと見続けていきたいと思う。



チームケア学会 研究発表抄録

題名	新しい食事提供のあり方～真空調理の可能性～		
法人名	社会福祉法人湖成会	事業所名	特別養護老人ホーム月のあかり
発表者	※榊 ちづる	共同研究者	中野珠寿・永田花鈴
サービス種別	入所【病院・ <u>特養</u> ・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

小規模事業所での食事提供の方法が見直され、真空調理を活用している事例が見られている。大規模事業所と小規模事業所との連携強化と食のこだわりを守るため、大規模事業所の栄養部門として、法人が大切に行っている“食”へのこだわりが真空調理で守られるのかを考え、実践したことを報告させていただきます。

II 目 的

小規模事業所では、真空調理でも通常の調理と変わらず美味しい食事が提供できているのか、そのメリットとデメリットをまとめる事で、今後の食事提供のあり方も見直す事ができると考えた。また、真空調理という調理方法のメリットは他でも活かすことができると考えた。

III 方 法

1. 研究期間

2019年4月～2021年5月

2. 研究対象

小規模事業所をご利用しているお客様18名

3. 具体的方法

- 1) 月のあかり栄養部門内での真空調理への意識と職員の教育体制
- 2) 小規模事業所の食事に関わる作業時間と職員の精神的な負担感の調査
- 3) 顧客満足度調査、ミールラウンド
- 4) 大規模、小規模事業所でのお互いの強みと弱みの整理
- 5) 湖成会の“食”へのこだわり

4. 評価尺度

顧客満足度調査アンケート、ミールラウンドでの評価。

IV 倫理的配慮

研究発表で使用する情報・写真等についてはプライバシーに配慮し利益相反がない事に同意と確認をしている。

V 結 果

真空調理法は様々な料理に応用が可能な為、工夫と取り組みによりバリエーションが広がる事が分かった。献立の勉強を定期的に行っていく事で調理技術は向上し、調理の幅が広がる。

小規模事業所では、調理時間が1日5時間削減する事ができた。また、光熱費の削減にもつながった。しかし、対応をしている介護職員は食を提供する事だけに満足をしてしまい、大切にしたい食事に対しての意識は低い事が分かった。

顧客満足度調査、ミールラウンドでは真空調理でも満足度は高い結果だった。しかし、真空調理に不向きな食材は提供をしていない事がわかった。

VI 考 察

真空調理方法だけでは私たちが目指す食への満足度が足りない、お客様の目の前で五感を刺激する「食べたい」を引き出す取り組みを行う事で、お客様の満足度は高くなる。また、真空調理の可能性として、日常の食事、非常食、夜間食などを引き出す事が今後の課題となる。

参考文献

最新調理機器で作る魅力メニュー旭屋出版編集部



チームケア学会 研究発表抄録

題名	食形態の見直し ～誤嚥予防～		
法人名	社会福祉法人 草加福祉会	事業所名	マナーハウス横山台
発表者	※梅津 かすみ	共同研究者	東田 弘樹
サービス種別	入所【病院・ <u>特養</u> ・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

嚥下食において「不均一なトロミ和えの誤嚥リスク」に加え「極刻み食の誤嚥リスク」という新たな見解を受け、今一度より安全な食形態を見直す必要性が発生した。

II 目的

誤嚥リスクに対して食形態を見直すことにより、誤嚥性肺炎の発生予防および症状悪化による状態不良からの入院の抑制を図る。

III 方法

1. 研究期間：令和3年4月～7月
2. 研究対象：「極刻み」提供中のお客様15名。
3. 具体的方法：現行食形態に対し、言語聴覚士(以下ST)より下記1) 2) の指摘を受けた。
 - 1) 「極刻み」は、ばらけやすく誤嚥のリスクがある。
 - 2) 刻み食のトロミ和えのムラは誤嚥リスクがある。
 そこで「極刻み」を廃止する代替形態として調理員がトロミ和えをする「刻みトロミ」という選択肢を設けた。実質「食形態UP」となるため、「極刻み」廃止に伴う変更選択肢として「刻みトロミ」と「ムース」の2択とし、下記(1)(2)の段階を経て、食形態の見直しを行った。
 - (1) 「極刻み」対象者を「刻みトロミ」もしくは「ムース」にあらかじめ振り分ける。
 - (2) STによる摂食嚥下評価にて、食形態を最終決定。
 - (3) 介護職員に食形態変更後にアンケート実施。
4. 評価尺度：食形態とトロミ工夫による嚥下状況向上の検証。

IV 倫理的配慮

今回の食形態見直しの目的および本研究について、ご本人および家族に説明し、同意を得ている。

V 結果

1. 対象者15名中のST評価後の食形態内訳結果は、

刻みトロミ:8名、ムース:4名、極刻み:3名。

2. 極刻み:義歯調整2名、継続希望1名であったが、3名とも6月中には刻みトロミ以上に変更済みである。
3. 刻みトロミになった計11名全員がムセなく経過中。中には喫食量も増加した方がいる。
4. 調理側:トロミ和えや個別盛り等の作業時間が増えた。
5. 令和2年度の誤嚥性肺炎発生者11名に対し、極刻み廃止後から7月までは発生者1名で経過している。
6. 介護職員へのアンケート結果(回収率74%)
 - Q1. 食形態の基準: より明らかになった(65%)
 - Q2. 食形態への悩み: 悩むことが減った(50%)
 - Q3. 食形態適正: 変更後の食形態の方が適切と感じる
 - Q4. 配膳負担: 負担軽減した(89%) (56%)
7. 極刻みから刻みトロミに変更となったお客様の声
刻みトロミの方が「美味しい。」「形があってよい。」

VI 考察

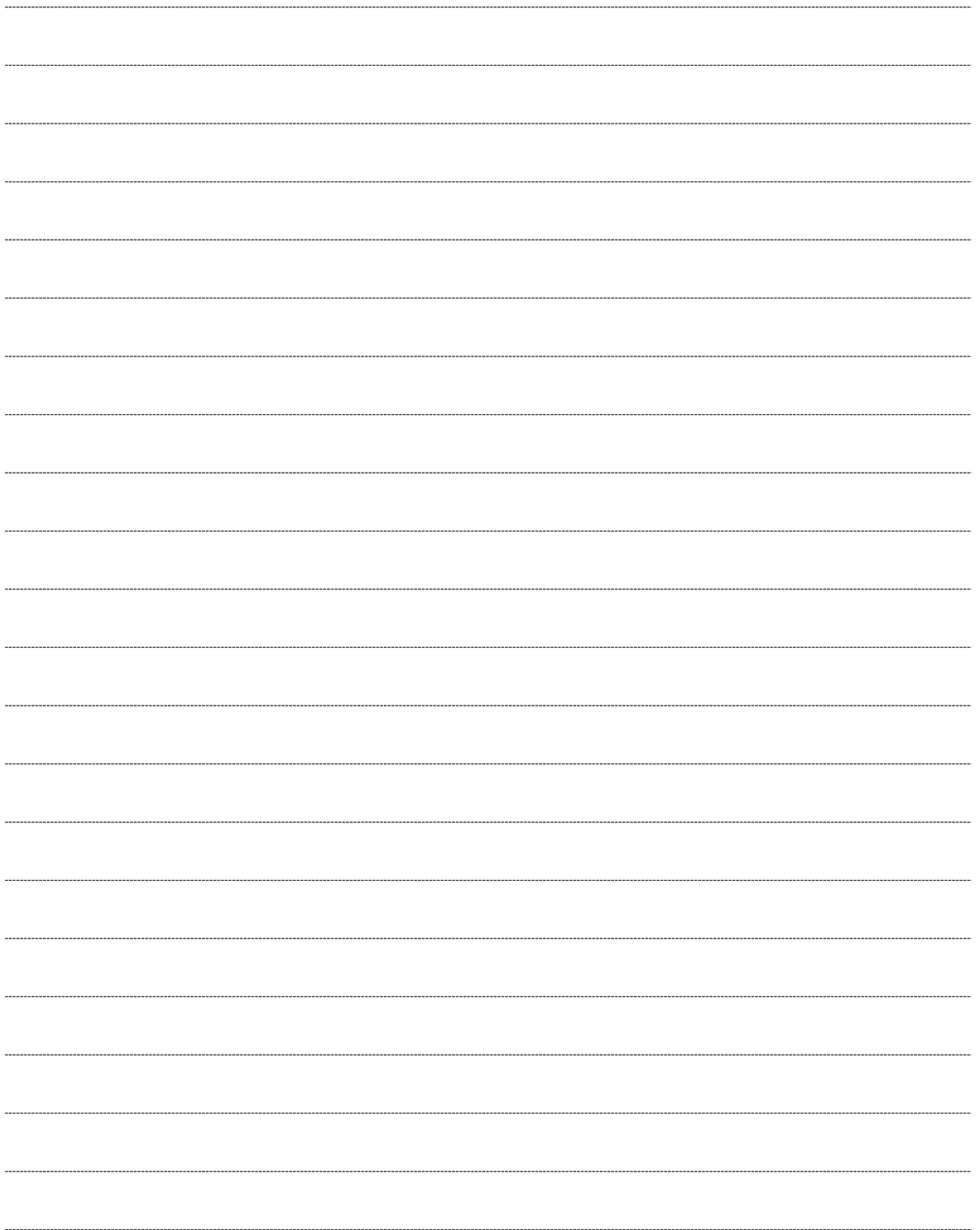
極刻みを廃止し、実質食形態UPである刻みという形状での提供にもかかわらず、誤嚥性肺炎発症が減少した要因としては、介護職員の配膳時ではなく、調理段階でトロミ和えをすることによりトロミが食材に均一に混ざり、スムーズな嚥下につながっていると思われる。また食塊がばらけやすい極刻み食に比べ、トロミが均一化した刻み食塊の方が嚥下に適していると推察される。

また、介護職員にとっては、食形態の基準が明らかとなり、食事に対する不安や悩みが減ったという心理的な安心感が得られたことに加え、配膳時の作業負担も軽減しており、今回の食形態見直しは、お客様へのより安全な食事提供と介護職員の負担軽減という面において一定の効果があったと思われる。

参考文献

- 1) 日本摂食嚥下リハビリテーション学会, 嚥下調整食分類, 2013





研究発表会

《ROOM 5》

抄録

9 月 16 日 (木)

チームケア学会 研究発表 【 ROOM 5 】

発表時間		法人	題名	発表者	ページ
1	10：00 10：15	株式会社 テイクオフ	尿もれ改善の取り組み	城戸口 知美	93
2	10：15 10：30	医療法人社団 藤友五幸会	快適な生活を過ごしていただくために ～気持ち良い排泄を目指して～	松本 歩	94
3	10：30 10：45	医療法人社団 平成会	全失語から中等度運動性失語への移行 ～無為・無欲状態からの脱却～	本間 さちほ	95
4	10：45 11：00	医療法人社団 緑愛会	皆様と一緒に楽しく食事をして頂く為に ～より良い姿勢を取り戻したい～	江口 亜由美 滝口 優美	96
11：00 11：15		休憩（15分）			
5	11：15 11：30	医療法人社団 緑愛会	新型コロナウイルス（COVID-19）クラスター対応について	横沢 美帆	97
6	11：30 11：45	社会福祉法人 草加福祉会	感染委員会の取り組み ～組織力の強化を目指して～	竹本 江里子	98
7	11：45 12：00	社会福祉法人 苗場福祉会	新型コロナウイルス発生の予防および感染から学んだこと	今井 麻美	99
8	12：00 12：15	社会福祉法人 湖成会	お客様の笑顔を守るデイサービス	酒井 彩香	100
9	12：15 12：30	株式会社 ライフアシスト	新型コロナウイルスの感染対策について ～なぜクラスターは発生しなかったのか～	亀野 碧冬	101
12：30 13：30		休憩（1時間）			
10	13：30 13：45	社会福祉法人 苗場福祉会	「私、帰りたいんだけど・・・」～帰宅要求を生活背景から考える～	阿部 ルミ	102
11	13：45 14：00	医療法人社団 日翔会	メモリーブックを活用したケアの効果 ～認知症高齢者の意欲向上を目指して～	八杉 隆博	103
12	14：00 14：15	医療法人社団 百葉の会	その方らしい生活リズムで落ち着いた暮らしを	小林 俊文	104
13	14：15 14：30	医療法人社団 ひがしの会	デイサービスで出来る認知症予防 ～多角的アプローチの検証～	梶本 晴香	105
14：30 14：45		休憩（15分）			
14	14：45 15：00	医療法人 北辰会	見つけよう・探そう名前 ～色の活用で事務的作業時間削減～	石川 季代子 小嶋 桃子	106
15	15：00 15：15	医療法人社団 平成会	コロナ禍での看取りケア ～どんな状況でも希望のお看取りを！	田村 美波	107
16	15：15 15：30	医療法人社団 湖聖会（宮城）	残った時間をその方らしく過ごして頂くために	小野寺 新菜	108
17	15：30 15：45	株式会社 健康倶楽部	A様と娘様の思いに応えたい～在宅で最期を迎えるために～	石崎 悠太	109

チームケア学会 研究発表抄録

題名	尿もれ改善の取り組み		
法人名	株式会社テイクオフ	事業所名	ケアセンターとこしえ上山北
発表者	※城戸口知美	共同研究者	職員一同
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム <u>小規模多機能</u> 看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

A 氏 80 代男性。脳梗塞の既往あり、排泄はオムツ使用。夜間帯に尿もれが多く、睡眠が阻害される。本研究は、尿もれを改善し良眠できるようになって欲しいと考え、尿量計測を基に排泄ケアの工夫改善をチームで取り組んだ過程である。

II 目 的

尿もれを改善し、快適な排泄と良眠を目指す。

III 方 法

1. 研究期間

2021 年 3 月～2021 年 6 月

2. 研究対象

A 氏 80 代 男性 要介護 5

右大腿骨頸部骨折既往にて体位交換時は配慮する。

3. 具体的な方法

排尿量の計測を行い傾向把握し排泄ケアを見直す。

4. 評価尺度

排尿量データをもとに評価する。

IV 倫理的配慮

本研究において、A 氏に不利益が生じる事のないよう配慮し、事前にご家族様に説明し同意を得ている。

V 結 果

A 氏の排尿量を 2 か月間計測実施した。前期、後期の計測結果は表 1 に示す通りであった。

A 氏は、1 日の総排尿量が多く夜間帯は日中より排尿量が多くなる。深夜、早朝など、時間帯による排尿量は日によって変動が大きかった。もれ方は腹部側への溢れ、体位交換を行う左側臥位側へ流れるケースが多くみられた。この計測結果を元に、夜間帯の排泄ケアの時間帯と陰茎に当てる尿取りの種類の吸収量の多い物に変更。結果、頻度は減ったものの尿量が多い日

にはもれが起こったため、尿取りの当て方を三角錐から筒状に見直した。尿取りの吸収力を最大限に生かせるように、A 氏に合った当てる位置を探った。成功も失敗も、チェック表やミーティングで共有しケアの統一に努めた。計測前期では 2 週間で夜間 9 回あった尿もれが、計測後期には 1 回まで減少し夜間良眠される事が増えた。又、尿取りの当て方を見直してからオムツの上に敷いている夜用パットまで汚染する事が減りコストの削減にもつながっている。

表 1 排尿量の計測結果 (ml)

	計測前期 2 週間	計測後期 2 週間
1 日の排尿量平均	1,589	1,522
1 回の排尿量平均 (日中)	231	197
1 回の排尿量平均 (夜間)	348	345

VI 考 察

尿もれ改善の取り組みを通じ、客観的データをケアに取り入れる事は個別ケアに有効と考えられる。尿もれの要因について、排尿量、排泄用品の種類、当て方、他の課題が無いか、気づきを共有し意見交換する過程が介護の現場で重要であると再認識できた。高齢者の排泄には水分や食事、運動などの活動も総合的に関わっている。排尿量と併せ A 氏の水分摂取量を計測したところ、排尿量に対して水分摂取量が少なかった事も把握できた。本事例を機会に、他のお客様のケアについても気づきを口にする職員が増えたように思う。日頃のケアの疑問が新たなケアの始まり。今後もチームで疑問を形にできるよう取り組んでいきたい。

参考文献 1) 竹内孝仁：介護の生理学，夜間ぐっすり排泄ケア，ベネッセコーポレーション，2013



チームケア学会 研究発表抄録

題名	快適な生活を過ごしていただくために ～気持ち良い排泄を目指して～		
法人名	医療法人社団 藤友五幸会	事業所名	介護老人保健施設 五洋の里
発表者	※松本歩	共同研究者	中村雅人、片渕紅葉
サービス種別	入所【病院・特養・ 老健 ・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

A 施設ではオムツ対応の方は定時でのパット交換を実施している。お客様の中には不快な表情をされることが、大きな声を出す様子が見られてきた。今回、尿便意がある方の排泄による不快感が原因で、不快な表情や言動に繋がっているのではないかと考えた。そこで、排泄タイミングを合わせトイレでの排泄を実施することで、お客様の不快な思いを少しでも軽減し、快適に過ごしていただけたと考え取り組みを開始した。

II 目的

自然排泄を促し、お客様の不快な時間帯を減らす。

III 方法

1. 研究期間: 2020 年 12 月 1 日～2021 年 2 月 18 日
2. 研究対象: 90 歳代 A 氏（移乗、基本動作全介助、関節リウマチ、足、鎖骨骨折歴あり）

3. 具体的方法

- 1) 排泄の時間帯調査、及び排泄表の作成

定時のオムツ交換時の排泄状況を 2 週間記録。オムツ交換時、毎回オムツ内の排尿が確認され、排便は 3 日間なしでグリセリン浣腸液 60ml（以下 GE）使用で毎回確認された。自力排便はなし。

- 2) 他部署への依頼

リハビリ職員：介助方法依頼→2 人移乗介助

看護師：便周期による下剤の調整依頼→GE 処置

- 3) 定時トイレ誘導、排泄の記録（2021 年 1 月 18 日～2021 年 2 月 18 日）

4. 評価尺度

排泄回数の比較とトイレ後の様子の分析

IV 倫理的配慮

対象者が特定されないようプライバシーに配慮、個人情報取り扱いに十分に注意した上で実施する。

V 結果

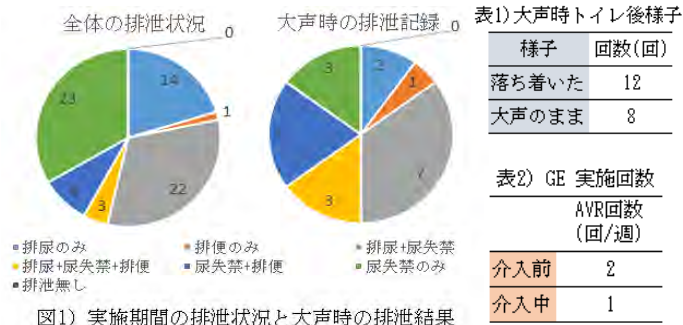


図1 左側よりトイレでの排泄は 66.7%であり、排便は 10 回確認し便失禁はなかった。図1 右側より、トイレ排泄 85%、排便 40%となった。表1より排泄後に落ち着く様子となったのは 60%となった。表2より GE 実施回数は介入前から半分の回数となった。

VI 考察

便失禁がなかったことから、便座に座ったことによる自然排泄の効果が高かったと考える。大きな声を出す様子の時はトイレの排泄が多く確認できた。トイレ排泄後落ち着きを持てた 60%であった事、浣腸回数の減少も認めたことから A 氏の不快な時間を少しでも軽減することに寄与できたと考えた。

課題として、尿失禁も多く確認できたことから更に細かく排泄パターンを把握し、トイレ回数を増やすことができるのではないかと考える。

参考文献

- 1) 大田仁史, 三好春樹: 新しい介護, p.108-117, 講談社, 2003
- 2) 坂下竜也, 原麻里子, 原口健三: 過活動型せん妄を伴う急性期脳神経疾患患者に対する排泄行為への介入効果, 作業療法, 38 巻 5 号, p.524-531, 2019



チームケア学会 研究発表抄録

題名	全失語から中等度運動性失語への移行 ～無為・無欲状態からの脱却～		
法人名	医療法人社団 平成会	事業所名	介護付有料老人ホーム ファンコート南
発表者	本間さちほ	共同研究者	佐藤優子
サービス種別	入所【病院・特養・老健・ 有料 ・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

活動的な生活を送っていた 80 代男性が脳血管障害にて全失語を呈した。入院時より無為・無欲状態であったが、入居後ユニットチームの関わりによって徐々に意欲の向上が認められ、積極的なコミュニケーションが可能となり、中等度運動性失語への移行及び生活の質の向上が図れた症例について報告する。

II 目 的

全失語の方への関わり方についてユニット職員が言語聴覚士より助言を受け、ユニットチーム全体で適切な関わりを図り、新しい環境で穏やかな生活が送れるよう支援する。それによって障害受容が進み、意欲・生活の質の向上が図れることを目的とする。

III 方 法

1. 研究期間

令和 2 年 7 月入居から令和 3 年 6 月 30 日

2. 研究対象

A 氏 80 代 男性 要介護 3 独居 全失語、アパシー（無為・無欲状態）。本人は、施設生活は了承しているが、自宅へ帰りたい思いがある。（Yes/No 反応で聴取）キーパーソンは、次女であり、独居生活は難しいと考えている。見守りのある環境で穏やかに過ごして欲しい。また、言葉のリハビリを行って欲しい。と希望している。

3. 具体的方法

- 1) ユニット職員へ全失語について勉強会実施
- 2) A 氏のアセスメント及び適した関わり方の助言
- 3) 全失語を理解した上でのケアの提供と希望に沿った生活の支援
 - (1) クローズドクエスションによる意思確認、音声言語・絵・文字を併用しアプローチの実施

(2) こまめな訪室での刺激入力とラポートの形成

4) リハビリ訓練による言語機能向上

- (1) 接触回数を増やし日常生活でのコミュニケーション機会の確保

4. 評価尺度

標準失語症検査（日本高次脳機能障害学会）

IV 倫理的配慮

本研究において、本人・家族へ個人情報利用に関して同意を得る。

V 結 果

1) 全失語から中等度運動性失語への移行

- (1) 言語理解；短文レベルの理解力向上
- (2) 言語表出；単語レベルの有意味語が増加
自発的コミュニケーション機会の増加
- (3) 書字表出；錯書はあるが、自発的書字表出の増加

2) 意欲向上・生活の質の向上

活動量の増加・リハビリ意欲向上・他者コミュニケーションの増加

VI 考 察

全失語症者へのコミュニケーションは関わる側に知識や適切な状態把握が必要である。今回は適切なコミュニケーションや関わりにより、リハビリ意欲の向上が図れたことで、意欲的な生活の獲得及び中等度運動性失語への移行へと繋がったと考えられる。また言語聴覚士が机上での言語訓練に囚われず、運動機能訓練と並行し、日常会話を通したリハビリを提供出来たことは障害受容困難な場合に有効であったと考える。

参考文献

- 1) 山口修平：神経疾患におけるアパシーの神経基盤，認知神経科学 Vol.13 No.1, 2011



チームケア学会 研究発表抄録

題名	皆様と一緒に楽しく食事をして頂く為に ～より良い姿勢を取り戻したい～		
法人名	医療法人社団 緑愛会	事業所名	友結
発表者	江口亜優美 滝口優美	共同研究者	前田侑子、船越伊代、石山佳子、江口亜優美、谷田信幸
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【 <u>グループホーム</u> ・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

A様は2018年にA施設に入所される。当初の状態は、手引き歩行で歩かれていたが、ご自分で立とうとされ転倒し、腰椎圧迫骨折される。その後、下肢筋力が低下し車椅子での生活が増えた。その頃から、体の傾きが徐々に強くなり腰の痛みの訴えも多くなっていった。箸で食べ物を上手く握めず、次第に箸を持つこともままならない状況になっていた。その状況を見て、A様本来の姿を取り戻し、馴染みのお客様と一緒に楽しく食事が出来るようアプローチを行った。その結果を以下に報告する。

II 目 的

1. 安全、安楽な姿勢を取り戻し、他の方と楽しく食事や活動をして頂きたい。
2. 職員が傾きの原因を正しく理解し、ケアの見直しを行う。

III 方 法

1. 研究期間

2020年5月15日～2021年5月31日

2. 研究対象

A様 80代女性 要介護度4 自立度B2 認知度Ⅲa

3. 具体的方法

- 1) 生活機能訓練評価時理学療法士に相談、A施設作業療法士にA様の身体状況を見て連携を行う。
- 2) ユニット職員でカンファレンスを行い、A様のケアプランへ追加。毎月評価する。
- 3) 夜間の体位交換（就寝時仰臥位、0時右側臥位、3時仰臥位、5時右側臥位）
- 4) 両肘クッション付きの食席に座って頂く。

4. 評価尺度

約3か月おきに写真にて比較行う。

IV 倫理的配慮

研究の主旨と写真の使用理由、ご本人様並びにご家族様から書面と口頭で同意を頂く。

V 結 果

1. 体の痛みの訴えが無くなり、笑顔が増え、活気が見られるようになった。
2. 両手でお椀と箸を持って食事が摂れるようになった。
3. 車椅子に長時間座っていたため、体に傾きが出てしまった。

VI 考 察

今回の研究から、体の傾きの原因は、車椅子に長時間座っていたことによる二次障害と職員の知識不足が原因だと考えられる。両肘クッション付の椅子はA様に合ったシーティングだった為、快適な座位姿勢が保てたのではないかと考える。並行して、夜間帯の体位交換も実施したことで、更にA様の姿勢に変化が表れたとも考える。他のお客様と楽しく食事ができ、活動も増えたことで、A様の意欲の向上、廃用症候群の予防につながられた。他職種と連携したことで、介護職以外の目線も加わり、いろいろな視点から解決策を探る事もでき、改めて連携の大切さを実感した。

参考文献

- 1) 厚生労働省老人保健健康増進等事業，車椅子における座位保持等と身体拘束との関係についての調査研究，高齢者における適切なケアとシーティング，P2～3，2020
- 2) アルメディア WEB，「一歩進んだ」世界標準のシーティング，正しい座位姿勢を知るところから始まるサポート



チームケア学会 研究発表抄録

題名	新型コロナウイルス（COVID-19）クラスター対応について		
法人名	医療法人社団 緑愛会	事業所名	湖山ケアサービス山形
発表者	※横沢美帆	共同研究者	橋本梓
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・ 看護小規模 】 その他【 】		

I はじめに

2021 年 3 月、A 施設において新型コロナウイルス感染症によるクラスターが発生。対策不足が明確となり、法人内外の協力を得て感染対策の大幅な見直しを行った。感染対策の実施により、発生から 20 日間で終息することができた。この感染対策を基に安全にお客様を受け入れている現在までの取り組みを報告する。

II 目 的

1. 市設内感染対策を見直し実施する。
2. 再発防止策を法人全体で共有する。

III 方 法

1. 研究期間

2021 年 3 月 17 日～2021 年 7 月 30 日

2. 研究対象

A 施設職員 13 名

3. 具体的方法

- 1) 施設内感染対策の見直し
- 2) 感染対策会議の実施
B 病院 とのオンラインミーティング
- 3) 職員の精神的フォローと感染対策教育

4. 評価尺度

職員が感染対策を継続して実施し、利用者を安全に受け入れサービス提供ができる

V 結 果

1. 施設内感染対策改正
2. 感染対策会議と B 病院とのオンラインミーティング実施により感染対策に関わる環境が整備された。
3. 自宅待機中職員へ毎身体調確認を行った。
感染対策会議の内容や利用者の情報を提供し、職員が孤立しないよう関わった。
職員復帰時に個別に看護師から感染対策教育を実施した。(施設内への入り方・ゾーニング・PPE 着脱など)

VI 考 察

1. 法人内で感染対策にかかわる課題を共有しチームで解決に導くことが重要。
2. 感染症発生時、適切な初動対応ができるよう継続した感染対策を実施することが必要。
3. 職員の精神的フォローと復帰時の感染対策教育実施が安心した職場復帰に繋がる。

参考文献

- 1) 介護事業所等における新型コロナウイルス感染症への対応等について、厚生労働省

IV 倫理的配慮

個人情報が特定されないよう配慮した。



チームケア学会 研究発表抄録

題名	感染委員会の取り組み ～組織力の強化を目指して～		
法人名	社会福祉法人 草加福祉会	事業所名	マナーハウス麻溝台
発表者	※竹本江里子	共同研究者	感染委員会
サービス種別	入所【病院・ 特養 ・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）の出現以降、発生ゼロを目標に対策を徹底してきた。委員会としての組織力の強化について取り組みを振り返る。

II 目 的

委員会としての取り組みを振り返り、有用性や、今後の課題を明確化し、施設内、施設外での情報共有を図る。

III 方 法

1. 研究期間

2020年4月～2021年6月

2. 研究対象

特養（SS含む） A事業所 全職員

3. 具体的方法

＜伝えるべき情報＞

- 1) 新型コロナウイルスの情報
- 2) 感染予防策：マスク、手洗い、消毒など

＜感染委員会での取り組み＞

- 1) 伝えるべき情報を会議で伝達。委員よりユニット職員への周知。
- 2) マニュアルを作成し、感染発生時対応グッズ、ゾーン分け用の物品の洗い出しと購入の要請。
- 3) 感染研修に参加した委員からの伝達講習。
- 4) ガウンテクニックの実施と改善策の検討。

＜施設職員への取り組み＞

- 1) 玄関入口に消毒、検温の設置。
- 2) ポスター設置（都度更新）。
- 3) 全ユニットに感染発生時対応グッズを設置。
レッドゾーンでのデモンストレーションを実施。
- 4) 感染症対策の法定研修2回/年（資料研修）。

4. 評価尺度

委員会からの伝達方法の変化による職員の理解度の向

上を検討する

IV 倫理的配慮

無記名のアンケートを使用 対象者の不利益、負担が生じないように配慮した。

V 結 果

1. アンケート調査より（一部抜粋）

2020年11月；感染発生時のイメージができる：受講前より受講後の方が上昇あり。

2021年5月；「感染症発生時の対応の実際を学ぶことが出来た」との意見多数。

2. 2020年12月；入居者が入院先で新型コロナに感染し、加療後帰設となった際、介護職の中で、対応について不安の声が上がった。

VI 考 察

委員からの伝達講習の実施やガウンテクニックを実際に行い、委員が行動し考える機会を増やしていった。伝えるべき情報を伝達していたが、結果の2から、職員全員には十分伝わっていない事が分かる。委員よりユニット職員への周知と実行が課題となった。そこで、今年度からは勉強会を各自で持ち寄る形としている。知識が身に付き、委員に自覚と責任感が生まれ、もしもの感染発生時に対応し易いと考え。R2.11月の研修より資料を自分たちで作成した事と、他施設、病院でのクラスター発生の情報もあり、職員の感染予防に対する意識の向上がうかがえた。職員一人一人の正しい知識と予防策が行われることが今後も重要となる。発生ゼロを維持しながら、全職員が感染予防と対応が出来る委員会作りを目指したい。

引用文献 1) 矢野邦夫編著：INFECTION CONTROL 春季増刊オールカラー新型コロナウイルス対策 Q&A68, メディカ出版, 2021



チームケア学会 研究発表抄録

題名	新型コロナウイルス発生の予防および感染から学んだこと		
法人名	社会福祉法人苗場福祉会	事業所名	デイサービスセンターさくら館
発表者	※今井麻美	共同研究者	森山智水
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【 <u>デイサービス</u> ・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

1年間新型コロナウイルス（以下コロナ）の予防に努めて、発生0件であったが、2021年2月にデイサービス（以下デイ）のお客様で陽性者が判明。事業所で行った対応ならびに発生から学び、その後の発生を抑えた取り組みを発表する。

II 目 的

感染流行地域におけるデイで、予防観点からのコロナ発生時の対応及び発生からの学びを水平展開する。

III 方 法

1. 研究期間：2020年2月20日～2021年6月30日
2. 研究対象：デイのご利用者77名、職員19名
3. 具体的方法

1) 予防について(発生前)

コロナの感染流行が伝えられたことから、1日3回検温やご家族も含めた利用前の体調聞き取りを行う。フロア座席も横並びとし、送迎車内は人数制限し、会話を控えてもらうためラジオをつけ、入浴も1回に誘導する人数を制限するといった対策を実施。また、感染拡大した2020年5月にはデイを大幅に縮小し、代替え策としてショートステイで対応した。

2) コロナ発生

2021年2月25日デイ利用者がコロナ陽性との連絡あり。当日中に全職員の抗原検査とPCR検査を実施。抗原検査では陰性、翌日PCR陽性者1名判明。その後、保健所の指示により濃厚接触者と接触者の洗い出しを行い、最終的に職員2名、お客様4名の計6名の陽性が判明し3月10日まで営業停止した。

3) 営業再開後

各種業務において看護職員と連携し、再度感染対策の見直しを行った。

【送迎】助手席の使用を禁止。後部座席との間に飛沫防止シートを張る。お客様の手指消毒、手すり、福祉用具も乗車前にアルコール消毒を実施。

【職員】常時グローブ、ゴーグル、マスク着用。

【環境】他部署との接触を防ぐため正面玄関からの出入りをやめ、出入り口に消毒用マットを設置。

洗面台の距離を保つため3台ある中、2台のみ使用。フロア内、洗面台は使用後に消毒の実施。

【配膳・下膳】グローブ、ガウン、マスク着用にて飛沫吸い込み防止。配膳車と下膳車を分ける対応を実施。

4. 評価尺度：感染者の有無

IV 倫理的配慮

本人ならびにご家族様に書面にて同意を得た。

V 結 果

営業再開後は、職員およびお客様から発生者もなく、お客様がPCR検査をしたケースでもすぐに保健所から求めのある情報を提出できている。また、地域の居宅事業所からはしっかり感染対策を行なっているデイという評判をいただくことは出来ている。

ただし、コロナ予防やワクチン接種のための欠席があり、稼働率の向上には至っていない。

(2020年6月稼働率：62.7%、2021年6月58.3%)

VI 考 察

感染流行地域では、予防していてもコロナの感染発生が出てしまう。ただし、感染から学び、医療職と連携し業務改善することで事業継続でき、地域に「安心・安全な事業所」という評判を広めることに繋がる。

参考文献：介護事業所等向けの新型コロナウイルス感染症対策等まとめページ | 厚生労働省 (mhlw.go.jp)



チームケア学会 研究発表抄録

題名	お客様の笑顔を守るデイサービス		
法人名	社会福祉法人 湖成会	事業所名	デイサービスセンター楓の丘
発表者	酒井彩香	共同研究者	田中里奈
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】通所【 <u>デイサービス</u> ・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

コロナ禍により私たちの生活は大きな影響を受けた。多くの人が集まるデイサービスでは感染のリスクが高く、サービス利用時の過ごし方を工夫しながら対応をしていく状況となった。お客様が安心と満足をしていただくために実践してきたことを振り返ることで、デイサービスの持つ役割を定義したい。

II 目 的

1. 新型コロナウイルス感染対策の徹底
2. デイサービスが継続できる環境整備
3. お客様満足度の維持・向上
4. 稼働率の維持

III 方 法

1. 研究期間：2020年3月～現在に至るまで
2. 研究対象：現在ご利用中のお客様
ご家族様（81世帯）
デイサービスに所属している全職員

3. 具体的方法

- 1) 新たな感染対策の徹底（マニュアルの作成）
- 2) お客様担当制の導入
- 3) 午後入浴の開始
- 4) 企画内容の見直し
- 5) ご意見箱の活用促進と迅速な改善対応
- 6) アンケートの実施

IV 倫理的配慮

研究発表で使用する情報・写真等についてはプライバシーに配慮し利益相反がない事に同意と確認をしている。

V 結 果

新型コロナウイルス感染症のマニュアル更新を随時行いながら、担当制にする事で、ご家族の状況にも

配慮ができるようになる。

入浴の業務改善を行うことで、時間へのゆとりと関わり方に変化が生まれ、入浴拒否が一定数減った。

イベントの実施方法も改善した。お互いに自粛をしている精神状態から、以前よりご要望を伺うことにつながった。

お客様目線での不安はご意見箱、アンケートから確認したことで、私達が取り組んできた事は一定の成果がある事がわかり、お客様の生活の一部となっていた事に気づくことができた。

VI 考 察

感染対策において、万が一を考えた場合には時に過剰と思われるような対応も必要であったが、それがお客様だけでなく職員にとっても安心に繋がり、結果的にサービスを継続していくことに繋がった。

Bandura氏によると、「自己効力感とは、自分は達成することができるという自分自身に対しての予測や見通し、見込みを表す¹⁾」と述べており、さらに「人の行動を決定する上で必要不可欠な心理的要因の一つである¹⁾」としている。つまり、私たちの役割は、お客様が楓の丘を継続的にご利用されることで、「自己効力感」を持っていただくことであり、それによりお客様やご家族様の生活を支え続けることと考察する。

引用文献

- 1) 理学療法ジャーナル 53 巻 10 号,医学書院



チームケア学会 研究発表抄録

題名	新型コロナウイルスの感染対策について ～なぜクラスターは発生しなかったのか～		
法人名	株式会社ライフアシスト	事業所名	アーバンリビング今宿
発表者	※亀野碧冬	共同研究者	中谷祐香
サービス種別	入所【病院・特養・老健・ <u>有料</u> ・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

A 施設では、2021 年 1 月、2021 年 4 月に職員各 1 名ずつ新型コロナウイルスに感染している。感染しないようにするのが一番だが、二度、陽性者が出たにも関わらず、なぜクラスターが発生しなかったのか。施設の対応、感染予防対策としての取り組みの検討と職員の意識改善について報告する。

II 目 的

大勢の人が集まる場所は、高齢者施設に限らずクラスターが発生しやすい。A 施設では新型コロナ陽性者が出たが新規陽性者はゼロであった。A 施設での感染対策が十分であったため新規陽性者が出なかったのか、改善点はあるのか研究し今後に活かしたい。

III 方 法

1. 研究期間

2021 年 1 月～4 月

2. 研究対象

職員 32 名

3. 具体的方法

- 1) 感染対策チームにおける定期的な話し合いの場を設定
- 2) 連絡経路、確認方法の構築
- 3) 施設内、法人全体含めた情報共有
- 4) 振り返りアンケートの実施
- 5) 課題抽出、評価

4. 評価尺度

職員アンケート結果

IV 倫理的配慮

研究にあたり、目的と内容の説明を行い同意を得た。参加の有無で不利益が生じないよう配慮する。得た内容については、研究以外の目的で使用しない。

V 結 果

ガウン、手袋、キャップ、フェイスシールド等感染予防品の着用。感染フロア職員との動線を分ける等、お客様、職員どちらもが感染予防対策を徹底しながら施設での生活を継続できた。

感染対策チームを立ち上げたことにより、現状把握、対策構築、情報共有が迅速に実施できるようになった。また、適切な感染対策の手順、方法を習得することもできた。職員へのアンケート結果を通じ、感染対策への意識改革を図ることができた。

VI 考 察

一度目の感染者が出た時に比べ、情報共有や対策方法が具体化されたことで、二度目については作業の効率化を上げることができた。

日頃の感染対策に加え、新型コロナウイルスの理解を深めると共に最新の感染対策を講じることにより安心できる施設サービスの提供を続けていきたい。

参考文献

- 1) 厚生労働省：一介護事業所等向けの新型コロナウイルス感染対策等まとめページ



チームケア学会 研究発表抄録

題名	「私、帰りたいんだけど・・・」～帰宅要求を生活背景から考える～		
法人名	社会福祉法人苗場福祉会	事業所名	グループホーム夕風
発表者	※阿部ルミ	共同研究者	グループホーム夕風 職員 13 名
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【 <u>グループホーム</u> ・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

A 氏がグループホームに入居して半年経過したが、本人は仕事に来ていると思っており、常に仕事（計算問題や家事）を探し落ち着かない様子だった。職員は A 氏が落ち着かないと仕事をお願いし、その場しのぎの対応をしていた為「なんでこんなに一生懸命に仕事をしているのに帰れないの？」と帰宅要求が強くなった。夕方近くに近づくと家族が心配になり「家に帰りたいんだけど・・・」と訴えを繰り返す為「グループホーム夕風が A 氏の落ち着く場所と思ってもらえるにはどうしたら良いだろうか」と本事例に取り組んだ。

II 目 的

グループホーム夕風が A 氏の落ち着く場所になる

III 方 法

1. 研究期間：2021 年 6 月 15 日～7 月 15 日
2. 研究対象

A 氏 80 代 女性 要介護度 2

寝たきり度：J2 認知症自立度：II b

既往歴：アルツハイマー型認知症 うつ病

3. 具体的方法

- 1) センター方式 B シート（暮らしの情報シート）を使用し A 氏の家族から情報を収集
- 2) センター方式 D-4 シート（24 時間生活変化シート）を使用し職員間で A 氏の現在の様子を分析
- 3) A 氏の居室環境の整備
- 4) カンファレンスにてケア方法の統一

4. 評価尺度

- 1) 認知症困りごと質問票 BPSD+Q による前後評価
- 2) センター方式 D-4 シートによる気分の変化

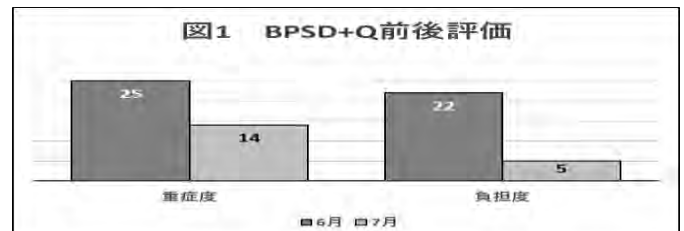
IV 倫理的配慮

本研究の趣旨と個人情報の取り扱いについて A 氏、

家族に説明し口頭と書面で同意を得た。

V 結 果

1. 家族の B シート記入で、好きな食べ物や家族関係・1 日の過ごし方など生活歴等を確認できた。
2. D-4 シートの気分表記によると悪い兆しと良い兆しを行ったり来たりしている振り幅がなくなった。
3. 居室環境を見直したことにより、ベッド上で寝転んで読書やテレビを見る等の様子が見られた。
4. A 氏の生活背景に合わせケア方法を統一したことにより、入居者間の交流が増え、帰宅要求による興奮の回数は減り「私、ここに住もうかなあ？」等の声もあった。それに伴い職員の負担も減少した。



VI 考 察

A 氏の生活背景に合わせケアを行ったことにより A 氏の心理的ニーズの充足に繋がった。1 か月でも成果は出せるのである。そのためにセンター方式の活用は有効であった。今回、センター方式シートを使用したが一番重要な事は本人の生活背景を知り本人の潜在化されたニーズに働きかけるケアをすることである。現在、家族との繋がりを再構築するため電話や WEB 面会を働きかけているがご家族は A 氏の混乱を心配し実現に至っていない。今後は写真を持って来て頂く等家族の気持ちも考慮しながら進めていきたい。

参考文献：認知症の人のためのケアマネジメント
センター方式の使い方・活かし方：認知症介護研究・研修東京センター2019 年 3 月 15 日



チームケア学会 研究発表抄録

題名	メモリーブックを活用したケアの効果 ～認知症高齢者の意欲向上を目指して～		
法人名	医療法人社団 日翔会	事業所名	グループホームつばき
発表者	※八杉隆博	共同研究者	上田誠子・倉本安奈・山中智宏
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【 <u>グループホーム</u> ・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

認知症高齢者に回想法やメモリーブックを活用した研究については様々な効果が報告されている。事業所でも取り組み、コミュニケーションが図れ、意欲を引き出すことができるのではないかと考えた。

II 目 的

メモリーブックを使用した回想法に取り組み、認知症高齢者の意欲向上に繋げる。

III 方 法

1. 研究期間

2020 年 4 月～2020 年 8 月

2. 研究対象

- 1) 軽度の認知症高齢者であること
- 2) 著しい行動・心理症状が認められないこと
- 3) 基礎疾患の病状が安定していること
- 4) 会話が可能であること

の 4 点を条件とし、3 名を対象者とした。

3. 具体的方法

- 1) 対象者にインタビューを行い、これまでの人生や生活習慣、今後の希望について話を聞く。
- 2) 語られた内容を、自分史、現在の生活への思い、今後の希望についてメモリーブックに記録し、関連した写真や資料を載せ、対象者と共に読み合わせ、修正、加筆を行う。
- 3) メモリーブック完成後、対象者に渡し 2 週間後メモリーブックの活用状況や対象者の反応の変化を確認する。
- 4) 対象者の変化を見るために会話の内容や表情、生活上の変化など観察したことを記録する。
- 5) 認知機能と意欲について、実施前、インタビュー時、メモリーブック完成時、メモリーブック完成

から 2 週間後において、N 式老年者用精神状態尺度（以下 NM スケールとする）及び、意欲の指標（Vitality index）を使用し評価する。

4. 評価尺度

N 式老年者用精神状態尺度（NM スケール）

意欲の指標（Vitality index）

IV 倫理的配慮

研究目的、方法、倫理的配慮について、本人、家族へ書面と口頭で説明し同意を得た。

V 結 果

1. 言動や行動の様子と変化

メモリーブックを読み懐かしいと涙ぐまれる様子や、話す言葉数が増えていった。対象者同士で互いにメモリーブックを見せ合い会話をする姿もあった。また、昔を思い出し「お酒飲みに行きたい。」と希望を語られ、立ち上がり動作が良くなりました方もあった。

2. NM スケールの推移

A 氏、C 氏については大きな変化はなかった。B 氏については関心・意欲・交流に点数の増加が見られた。

3. 意欲（Vitality index）の推移

実施前後で変化は見られなかった。C 氏については 1 点の増加がみられた。

VI 考 察

評価点数に変化はなかったが、言動には変化が見られていた。忘れていた記憶を想起することが個別の回想法となり、認知機能の維持や意欲の向上に繋がったと考えられる。また、メモリーブックはコミュニケーションを図るツールとして効果があった。

参考文献

- 1) 認知症高齢者にメモリーブックを活用したケアの効果、石川看護雑誌 Vol.14,2017



チームケア学会 研究発表抄録

題名	その方らしい生活リズムで落ち着いた暮らしを		
法人名	医療法人財団 百葉の会	事業所名	グループホームおとなりさん
発表者	※小林俊文	共同研究者	渡邊一
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【 グループホーム 小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

A 施設ではお客様の清潔を保つことを目的に毎日清拭・更衣をしていたが、職員から「夕食後は眠くなるお客様も多く、清拭・更衣が不穏の原因になっているのでは？」という意見があった。検証した結果、夕食後の清拭・更衣はお客様がその順番を待たなければいけなかったり、覚醒を促されたりということがあった。この点に着目し個々の生活に合わせた清拭・更衣ができるように時間の変更を行った所、お客様に変化が見られたので報告する。

II 目 的

お客様の生活リズムを考え、ゆとりを持ったより良いケアの実践ができるようにする。

III 方 法

1. 研究期間：2019年4月～2021年3月
2. 研究対象

A 施設入所者9名と職員9名

3. 具体的方法

- 1) 清拭・更衣時間を個々に合わせて再検討する。
- 2) 職員へお客様の変化を聞き取り調査する。
- 3) 遅番残業時間を変更前後で比較する。

IV 倫理的配慮

個人情報の使用については同意を得て使用した。

V 結 果

1. 清拭：時間を決めず、お客様が落ち着いている時間に対応した。
- 更衣：従来通りで対応可か不可で考えた。不可の場合は夕食前に対応した。

2019年11月上記に全利用者変更。日々のミーティングで情報共有、個々に合わせた変更を随時行った。

2. スタッフへの聞き取り

清拭・更衣を個々に合わせた時間に変更して以降、不穏になる方が減ったという声が増えた。

3. 期間内の遅番時残業時間合計の比較(183日分)

期間	残業時間
2019.4.1～9.30	98.0 時間
2020.4.1～9.30	30.5 時間

VI 考 察

日中とのメリハリをつける事・リラックスして気持ちよく休んで頂く事は認知症の方にとって大切である¹⁾。この観点から、就寝前の清拭・更衣を定着させていた。一方で良質な睡眠には、「不安感を解消する環境」、「規則正しい生活サイクル」、「活動量」、「リラックス出来る工夫」が大切²⁾とされているが、就寝前へのこだわりは、反対に個別性を損なうケアを招いていたと考えられる。今回、不穏が減った要因として、個々の生活を見直し就寝前にこだわらず個別性を重視した介入に変更したことが大きい。この変更によりお客様自身が落ち着き、協力動作や残存機能を大きく引き出すことができたと考えている。また、このお客様の変化は対応する職員には介助のしやすさに繋がり、個別性を重視したケアが業務分散を可能とし、効率性向上・残業時間削減に寄与したと考えている。今後は個別性重視と残業時間の関連性も精査していきたい。

参考文献

- 1) (清拭について) リハプラン マガジン
<https://rehaplan.jp/articles/387>
- 2) (認知症ネット) 不眠・睡眠障害・昼夜逆転の対応 <https://info.ninchisho.net/symptom/s140>



チームケア学会 研究発表抄録

題名	デイサービスで出来る認知症予防～多角的アプローチの検証～		
法人名	医療法人社団　ひがしの会	事業所名	デイサービスセンター　サザンリーフ宇品海岸
発表者	※梶本　晴香	共同研究者	安部　明子
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】　通所【 <u>デイサービス</u> デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】　その他【		

I はじめに

高齢者の認知症予防のニーズは高まっている中、認知症予防に特化している施設は近隣でもあまり数を見ない。A 事業所も十分とは言えない現状であった。

この度、認知症予防に効果があるとされているプログラムを複数取り入れ、1 年間の活動の実施と評価を行った。その取り組みと結果を報告する。

II 目 的

新しいプログラムの取り組みが、お客様に効果があるか検証する。

III 方 法

1. 研究期間：2020 年 6 月～2021 年 6 月

2. 研究対象：A 事業所に研究期間の間在籍し、週 2 回以上通われており、口頭でスムーズにコミュニケーションを取ることが出来た利用者 13 名。

(平均年齢 86 歳、平均介護度 1.61)

3. 具体的方法

1) 新しいプログラム（音読、デュアルタスクトレーニング、脳トレステップ、個別脳アクティビティ等）のマニュアルを作成し、職員に勉強会を実施する。

2) 2020 年 6 月より上記プログラムを実施する。

3) 2020 年 7 月、8 月、10 月、2021 年 6 月の計 4 回、改定長谷川式簡易知能評価スケール（以下 HDS-R とする）を実施する。

4. 評価尺度

HDS-R

IV 倫理的配慮

本研究の対象となる利用者とその家族に個人情報の取り扱いについて、口頭と書面の両方で同意を得た。

V 結 果

HDS-R の結果は、以下の表の通りであった(表 1)。

検査初回の HDS-R の平均値は 20.3 点、一年後の平均値は 21.5 点であった。

表 1 HDS-R の結果

氏名	初月	1 か月後	3 か月後	1 年後	初月と1年後の差
A様	11点	15点	15点	20点	+9点
B様	22点	24点	28点	28点	+6点
C様	13点	17点	18点	17点	+4点
D様	22点	24点	25点	25点	+3点
E様	22点	25点	25点	25点	+3点
F様	25点	26点	×	27点	+2点
G様	19点	19点	17点	20点	+1点
H様	28点	27点	28点	28点	±0点
I様	27点	20点	22点	27点	±0点
J様	11点	14点	10点	10点	-1点
K様	29点	28点	26点	28点	-1点
L様	19点	19点	20点	15点	-4点
M様	16点	13点	19点	10点	-6点
平均点	20.3点	20.8点	21.0点	21.5点	+1.2点

VI 考 察

年齢が上がると HDS-R は低下¹⁾すると言われている。しかし、今回対象とした 13 名のうち維持・上昇した利用者が 9 名（69%）であったこと、平均値が 1 年前に比べ 1.2 点上昇したことを加味すると、認知症予防の取り組みに一定の効果があったと考える。中でも利用者の意欲を引き出せたケースは高い確率で成果が出ている。職員の積極的な関わりはもちろんのこと、利用者の意欲をいかに引き出せるかが重要となる。また、今回デイサービスの利用回数の多い方ほど効果が顕著に表れていることから、自宅にこもらず、他者とふれあい、定期的に認知症予防を行うことが大切であると改めて実感している。これからも更なるプログラムの充実化を図り、認知症予防に努めていきたい。

引用文献

1) 坪井章雄・林隆司・大橋幸子・目黒篤：健常者と認知症者における手指機能と認知機能の性・年齢別変化，厚生労働省第 63 巻第 1 号，p.18，厚生労働統計協会，2016.1



チームケア学会 研究発表抄録

題名	見つけよう・探そう名前 ～色の活用で事務的作業時間削減～		
法人名	医療法人 北辰会	事業所名	蒲郡厚生館病院 いきいきリハビリセンター
発表者	※石川季代子・小嶋桃子	共同研究者	平野尋美・須賀沙織
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 <u>通所</u> 【デイサービス・ <u>デイケア</u> ・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

通所リハビリテーションでは毎日通いの利用者が異なる為、日々の業務として翌日利用の利用者の受け入れ準備をするが予定表の名簿を基にカルテや名札等の準備を通常のケア業務の合間に実施していた。コール等で作業が中断することや、全利用者の利用曜日を覚えられず準備作業に多くの時間を要していた。外国人スタッフも漢字やひらがなが読めず時間を要していた。

II 目的

事務的な準備作業にかかる時間を短縮し業務時間内に作業を終えることが出来、利用者へのケアや介入時間が確保出来る。
利用者の名前や曜日が分からなくても外国人スタッフや新人スタッフが準備作業出来る。

III 方法

1. 研究期間

2020年2月～2021年4月

2. 研究対象

通所リハビリテーションに所属しているケア職 10名・外国人スタッフ 1名・新人スタッフ 2名
総数 13名

3. 具体的方法

予定表の名簿から利用者名を探して準備する時間と曜日別シールを用いて準備する時間を比較する

4. 評価尺度

作業業務に携わる時間

IV 倫理的配慮

利用者の名前（プライバシー）への配慮・顔写真の掲載等、同意を得ている。

V 結果

対策前の名簿を見ながらカルテ・名札クリップ・席札・コートクリップ・歯ブラシを準備する時の平均作業時間が 35 分 45 秒だったのに対し、対策後の曜日別シールを貼って色分けし各曜日の物品を用意した時間では 9 分 28 秒となり 26 分 16 秒の業務時間の削減となった。

VI 考察

準備作業に時間を要していた原因は名簿を見て作業する目線の移動による混乱や漢字・文字の見難さ等の視覚的な要因が大きく関わっていると考えられる。災害時の色彩情報や図形での情報伝達・駅の路線図の色分け等、文字ではなく色による視覚的情報の伝達を活用することで認識能力が向上することが分かる。文字の読めない外国人スタッフも色分けでの物品準備が可能となり作業効率が向上したと考えられる。事前に曜日別の色分けシールを貼る作業は大変と感じたが、日々の業務の中で約 30 分の時間短縮する事が出来、利用者との関わり・ケアを行う時間確保に繋げることが出来た。

参考文献

- 1) 名取和幸・竹澤智美：日本色彩研究所監修 要点で学ぶ、色と形の法則 150,株式会社ビー・エヌ・エヌ新社,2020
- 2) 渋谷昌三：決定版面白いほどよくわかる！心理学,西東社,2016
- 3) 西裏二：災害救援物資に梱包外装に施す「色彩分別法」提案,技術放送物流会,2016



チームケア学会 研究発表抄録

題名	コロナ禍での看取りケア～どんな状況でも希望のお看取りを！		
法人名	医療法人社団平成会	事業所名	介護老人保健施設ファンコート泉
発表者	田村美波	共同研究者	柴崎喜代美
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

A 施設を令和元年より利用されていた A 氏が、令和 2 年 11 月より看取りケアが始まり、コロナ禍で様々な制限がある中、コロナウィルスの感染対策をしながら、A 氏とご家族の希望を叶えるために取り組んだ事例を報告する。

II 目 的

コロナ禍でも感染対策と万全の準備をしながら、A 氏とご家族の希望する事を叶えていき、満足して頂ける看取りケアを提供する。

III 方 法

1. 研究期間

令和 2 年 11 月 1 日～令和 3 年 1 月 12 日

2. 研究対象

A 氏 90 代 女性 要介護 4

既往歴：ネフローゼ症候群、大腸がん

アルツハイマー型認知症、腎不全

3. 具体的方法

- 1) ご家族へ看取りケアへの同意と本人、ご家族の希望する事を確認。(温泉に行きたい、お墓参りにいきたい、喫茶店でお茶がしたい。)
- 2) 希望する事の実行に対する弊害の検討。
 - (1) 医療的な配慮
施設長（医師）との連携と緊急時手順の決定。
 - (2) コロナ禍の中での外出、面会対応について
「2020 新型コロナウイルス感染予防行動計画」を参照し、3 密を回避する。(ご家族との同一車内での移動中止、車両の換気と飛沫防止シールドの設置、こまめなアルコール消毒等)
- 3) 実行する上での配慮と当日の A 氏の体調確認。
 - (1) 温泉は入浴剤を使用し、ご家族と一緒に

入浴を行い、体調を見ながら実施する。

- (2) お墓参りに向かう車両とルート、乗車時間など事前に調べ、負担の有無の検証を行う。
- (3) 併設の通所リハビリにある喫茶室を借り、会話をしながらコーヒーを飲んで頂く。
上記実行した時以外でも看取り対応のお客様に
対して面会制限の一部解除を行う。

IV 倫理的配慮

本研究について説明し、A 氏、ご家族に個人情報使用に関する同意を了承頂く。

V 結 果

A 氏とご家族が望んでいた温泉に行くこと、お墓参りに行くこと、喫茶店でコーヒーを飲む事は達成できた。その後も面会の制限はあったがご家族との会話を楽しまれ、最期は静かにその生涯を終えられた。「最後にコロナ禍で無理だと思っていた思い出作りがたくさん出来て本人もとても幸せだったと思います。ありがとうございました。」とご家族より言葉を頂いた。

VI 考 察

コロナ禍で看取るために必要なことは、すべてを自粛する事ではなく、人生に寄り添い、どこまでできるか、感染対策を含め検討し実行する事だと感じた。今後は、看取りケアだけではなく、通常の面会や外出についても、コロナ禍で行える方法を模索し、顧客満足度向上に努めていきたい。

参考文献

- 1) 平成会グループマニュアル、新型コロナウイルス感染予防行動計画第 2 版、2020.4.7
- 2) ファンコート泉施設長周知文書、施設ご利用者様の外出時の留意事項について、2020.12.1



チームケア学会 研究発表抄録

題名	残った時間をその方らしく過ごして頂くために		
法人名	医療法人社団湖聖会（宮城）	事業所名	看護小規模多機能ホームはなもも
発表者	※小野寺新菜	共同研究者	玉川健 姉崎優
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・小規模多機能・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

「柔軟なサービスを特性とする看護小規模多機能らしい看取りの形とは何なのか」「その方らしさを忘れずに看取りケアを行う事は出来ないのか」これらの課題がある。本人様や家族様が満足出来る、その方らしい看取りケアを行うことが出来るのかを検討し、家族様、本人様の協力の元、その方らしさに寄り添い、日々の生活を大切にしたい看取りケアの挑戦を報告する。

II 目 的

基礎疾患に気を付けながら本人様が望む過ごし方を尊重したケアを行う。

III 方 法

1. 研究期間

2020年10月13日～2021年7月15日

2. 研究対象：A氏(男性) 90歳代 要介護5

主病名：誤嚥性肺炎、廃用症候群、高血圧症、前立腺肥大症

身体状態：2020年4月から10月まで誤嚥性肺炎にて5回救急搬送にて入退院を繰り返す。10月の退院時に主治医より、今後救急搬送は受け付けず往診医の指示にて治療との説明あり。

3. 具体的方法

- 1) 家族様に看取りケアの理解を確認し、A事業所で看取ると言う形で様々な希望を伺い同意書を記入して頂く。
- 2) 全職員が喀痰吸引第3号研修を取得し、看護師が不在時も喀痰吸引を行えるようにする。また、口腔内に食残が多いと指摘あり、口腔ケアに力を入れる。
- 3) 本人様の嗜好に合わせた飲み物を提供することで飲水量、排尿量が増加し、尿路感染予防を図る。また、本人様から「形あるものが食べたい」と話あり、本人

様が希望されている食形態で提供する。

4) 本人様が離床を希望されている為、ホールにて他のお客様と一緒に過ごして頂く。

4. 評価尺度：今回は、評価尺度を使用していない。

IV 倫理的配慮

本人様、家族様に対し本研究の趣旨を説明し、同意書にサインを頂いている。

V 結 果

1. 2020年10月退院後に家族様と話し合い、本人様が望む生活を送れるよう看取りケアを行う形で同意書に記入して頂いた。
2. 毎食事前に喀痰吸引を行う事ことで、2020年10月退院後からは誤嚥性肺炎を一度も患っていない。また、口腔ケアに力を入れたことによって食残が減り、食残等でのむせ込みが無くなった。
3. 本人様に水分補給時何を飲みたいか希望聞き提供行い、排尿量の低下なく安定した尿量の確保が出来た。また、退院後は重湯、ペースト食だったが徐々に食形態を上げていき、現在は本人様の希望通りのお粥、一口大での提供が出来ている。
4. 職員付き添いでの体操を実施し、7月の企画に離床された状態で参加され、他のお客様と交流された。

VI 考 察

常に同じ痰吸引や口腔ケアの体制を構築出来たことにより、誤嚥性肺炎の再発の防止に繋がったと考えられる。また、職員と本人様、家族様で望む生活を共有できたことにより、食形態の変更、離床支援と本人様が望む生活を送ることが出来たと考えられる。今後は本人様が話されていた「自宅の畑で孫と野菜作りをしたい」という目標が実現するよう支援を継続していきたい。



チームケア学会 研究発表抄録

題名	A 様と娘様の想いに応えたい～在宅で最期を迎えるために～		
法人名	株式会社健康倶楽部	事業所名	小規模多機能ホーム奏
発表者	※石崎悠太	共同研究者	稲岡卓哉
サービス種別	入所【病院・特養・老健・有料・サ高住】 通所【デイサービス・デイケア・認知症対応】 訪問【訪問看護・訪問介護・居宅支援・訪問リハビリ・訪問入浴】 地域密着【グループホーム・ 小規模多機能 ・看護小規模】 その他【 】		

I はじめに

令和 3 年 3 月 26 日 A 様は 100 歳代でお亡くなりになった。A 様は小規模多機能立ち上げ時からご利用されていた。令和元年 9 月ご自宅で食事中、誤嚥し救急搬送され入院まで至らなかったが、身体機能が低下してしまった。令和 2 年 10 月今までの生活も難しくなってきたが、娘様は「母は自宅での生活を望んでいた。年齢も 100 歳を超えているので私も自宅で最後まで看取りたい」と話があった。お二人の想いに応える為、A 事業所での取り組みを報告する。

II 目 的

1. 在宅での最期を迎える
2. 娘様の身体・精神的負担の軽減

III 方 法

1. 研究期間

令和 2 年 10 月 1 日～令和 3 年 3 月 26 日

2. 研究対象

A 様 100 歳代 女性 要介護 5

日常生活自立度 B2

認知症高齢者自立度 IIIA

3. 具体的方法

1) サービスの見直し

(1) 訪問サービスを主に 1 日 2 回実施。必要に応じ訪問回数を増やす

(2) 訪問看護の利用

2) 主治医との連携

主治医の変更

3) 娘様の介護軽減を図る

便失禁等があった際は随時訪問サービスを行う

IV 倫理的配慮

報告にあたりご家族様に研修目的を説明し承認得る

V 結 果

1. サービスの見直し

1) 訪問にてオムツ交換・清拭の実施。清潔を保つことができた。

2) 訪問看護では、昼の時間ケアに入り、オムツ交換や点滴の実施。訪問看護と連携し専門的なケアを行う事で、A 様は寝たきりとなったが褥瘡・肺炎になる事はなかった。

2. 主治医との連携

主治医は脳神経クリニックから、内科に変更し A 様の身体負担を考慮し往診対応とした。病院・訪看・施設で情報も共有できるようになった。

3. 娘様の介護軽減を図る

連絡を頂きご自宅に向かいオムツ交換を行うことで、娘様の身体的援助ができた。

令和 2 年 10 月～令和 3 年 3 月の通い宿泊訪問数表

	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
通い	14 回	12 回	12 回	10 回	6 回	3 回
泊り	5 回	4 回	4 回	3 回	1 回	1 回
訪問	52 回	51 回	60 回	63 回	58 回	58 回

VI 考 察

令和 3 年 3 月娘様・介護職員・訪看職員が見守る中、A 様の最後は自宅のベッドで眠るように安らかにお亡くなりになった。娘様も「奏の支援があったから最後まで自宅で看取る事が出来た。」と感謝のお言葉を頂いた。柔軟なサービスが出来る小規模多機能で、通い・宿泊サービスが出来ない時に訪問回数を増やすことにより、安否確認・清潔保持ができご家族様が必要な時にサービスに入る事で身体・精神的負担の軽減ができた。ご自宅で最期を迎えたいというご要望に応えることができたと考える



2021 年度 チームケア学会 第 2 日目 プログラム

開催日 : 令和 3 年 9 月 17 日 (金)

時 間	プログラム
8 : 30	受付開始
9 : 30	2 日目 開会 北辰会 今村 真澄
9 : 35	シンポジウム 座長 銀座医院 久保 明先生
9 : 50	～コロナ禍の身体と心のメンテナンス～ それぞれの立場からの発表と質疑 登壇者 長島 舞 (社会福祉法人 大和会) 野際 雄一 (社会福祉法人 大和会) 雨宮 康平 (社会福祉法人 湖星会) 金子 大助 (社会福祉法人 草加福祉会) 大淵 愛 (医療法人社団 緑愛会)
11 : 05	休憩 15 分
11 : 20	全体質疑 10 分
11 : 30	今回のクラスター発生からそれぞれの役割として チームケア学会理事 小松順子
11 : 45	シンポジウムのまとめ 銀座医院 久保 明医師
12 : 00	所感 湖山医療福祉グループ代表 湖山泰成
12 : 10	閉会挨拶 チームケア学会 理事 太田 恵美
12 : 15	閉会 北辰会 今村 真澄
12 : 20	事務連絡 NPO 福原正徳 アンケート記入 ～全行程終了～

《 シンポジウム 》

「人生 100 年生きるためのリテラシー」

～身体と心のメンテナンス～

シンポジウム 司会紹介



司会：くぼ あきら 氏
久保 明 氏

医療法人財団百葉の会 銀座医院 院長補佐・抗加齢センター長
東海大学医学部医学科 客員教授
元 厚生労働省 薬事・食品衛生審議会専門委員
新潟薬科大学客員教授 内分泌・糖尿病専門医
日本抗加齢医学会評議員 日本総合健診学会審議員
日本臨床栄養協会理事

パネリスト紹介

○長島舞様（社会福祉法人 大和会 特別養護老人ホーム和光園 医務主任）

内容：感染時の対応、感染後の体力低下や廃用性症候群の対応など

○野際雄一様（社会福祉法人 大和会 特別養護老人ホーム和光園 福祉課長）

内容：平準業務から業務縮小のジレンマや職員のメンタルフォローなど

○雨宮康平様（社会福祉法人 湖星会 特別養護老人ホームラースール金沢文庫 施設長）

内容：内部調整や支援物資、医療機関との連携、全室レッドゾーンの個室対応の大変さなど

○金子大助様（社会福祉法人 草加福祉会 埼玉事業部・千葉事業部 部長代行）

内容：外部対応、法人としての役割分担や支援体制などの後方支援など

○大浏愛様（医療法人社団 緑愛会 川西湖山病院 看護師長）

内容：ゾーニングや清潔不潔区域の見直し等による生活空間の確保、内部連携など

This image shows a full page of a document template designed for handwriting practice. It features a series of evenly spaced, horizontal dashed lines across the entire width of the page. The background is plain white, providing a clear guide for letter formation and alignment. There are no margins, text, or other markings present on the page.

○野際雄一様（社会福祉法人 大和会 特別養護老人ホーム和光園 福祉課長）

内容：平準業務から業務縮小のジレンマや職員のメンタルフォローなど

This image shows a single sheet of white paper with horizontal ruling lines. The lines are evenly spaced and run across the width of the page. There are no margins, text, or other markings on the paper.

○雨宮康平様（社会福祉法人 湖星会 特別養護老人ホームラースール金沢文庫 施設長）
内容：内部調整や支援物資、医療機関との連携、全室レッドゾーンの個室対応の大変さなど

This image shows a full page of a handwriting practice worksheet. It consists of multiple sets of three horizontal dashed lines, providing a guide for letter height and placement. The lines are evenly spaced across the entire page, leaving ample room for writing practice. There is no text or other markings on the page.

○金子大助様（社会福祉法人 草加福祉会 埼玉事業部・千葉事業部 部長代行）

内容：外部対応、法人としての役割分担や支援体制などの後方支援など

This image shows a single sheet of white paper with horizontal ruling lines. The lines are evenly spaced and run across the width of the page. There are no margins, text, or other markings on the paper.

内容：ゾーニングや清潔不潔区域の見直し等による生活空間の確保、内部連携など

2021 チームケア学会

あとがき

今年度のチームケア学会はいかがだったでしょうか？

85 の演題発表、シンポジウムと 2 日間をすべて Web で行い、演題については委員の方々からご協力を頂き査読を実施するという事で今年度は新たな試みの年となりました。演題では感染症、看取り、教育、食事・栄養、業務改善、リハビリテーション、認知症ケアなど 13 種類のカテゴリーに分けさせて頂き、多岐に渡る発表となりました。皆さんの努力のおかげで本学会は確実に進歩していると実感しております。

また 2 日目のシンポジウムでは感染症のクラスター体験からそれぞれの立場での提言を頂きました。新型コロナウイルス発生から私たちの生活は大きく変化しました。今後もウイルスとの闘いは続きますが、順応していく能力を身に付けてきたのも事実です。

これからも細菌やウイルスと闘いながら私たちは、100 年を生きるために何を目指し、何を支援し、何を大切にするか、今後も学会のテーマとして問い続け、考えていきたいと思えます。

ご参加いただいた多くの皆様に感謝しましてあとがきとさせていただきます。

チームケア学会 代表理事 小松 順子

令和3年度チームケア学会運営スタッフ

《こやまケア運営委員会》

○執行部

医療法人財団 百葉の会	上 野 忍	医療法人社団 藤友五幸会	宮 下 真 理 子
一般座右団法人 愛生会	佐 藤 信 一	社会福祉法人 苗場福祉会	南 雲 未 来
株式会社 テイクオフ	戸 田 茜	社会福祉法人 湖成会	遠 藤 真 由 美
医療法人社団 ひがしの会	永 田 康 代	医療法人社団 平成会	田 部 光 行
社会福祉法人 苗場福祉会	高 橋 舞 子	社会福祉法人 湖星会	雨 宮 康 平
		株式会社 ライフアシスト	橋 高 恵 子

○エリア代表

(東北) 株式会社 テイクオフ	戸 田 茜	(首都圏 A) 社会福祉法人 大和会	亀 田 克 也
(首都圏 B) 医療法人社団 湖聖会(東京)	大 野 公 士	(中部) 医療法人社団 藤友五幸会	宮 下 真 理 子
(西日本) 株式会社 ライフアシスト	橋 高 恵 子		

○当日運営スタッフ

社会福祉法人 平成会	木 村 利 恵	健康倶楽部北海道	石 部 勉
株式会社 テイクオフ	内 田 か つ み	医療法人社団 緑愛会	鈴 木 亜 紀
社会福祉法人 狭山公樹会	有 松 蘭	社会福祉法人 狭山公樹会	佐々木 啓 介
社会福祉法人 白山福祉会	矢 萩 利 文	社会福祉法人 狭山公樹会	片 平 隼 人
社会福祉法人 カメリア会	池 村 正 樹	社会福祉法人 カメリア会	山 匠
数株式会社 ケアハーモニー	倉 持 富 美 江	株式会社 ケアハーモニー	宮 崎 智 和
医療法人 北辰会 みらいあグループ	今 村 真 澄	医療法人社団 平成会	佐々木 和 之
医療法人社団 平成会	草 野 祐 美	社会福祉法人 平成会	城 取 桂 子
医療法人社団 湖聖会(宮城)	佐 藤 隆	医療法人社団 湖聖会(宮城)	齊 藤 寛 太
社会福祉法人 湖星会	二 階 堂 梨 恵	社会福祉法人 湖星会	小 澤 亜 恵
社会福祉法人 緑愛会	岡 崎 雄 一 朗	社会福祉法人 緑愛会	久 保 智 美
医療法人社団 緑愛会	佐 藤 幸 男	健康倶楽部北海道	三 浦 七 恵
社会福祉法人 苗場福祉会	田 中 勝 人	社会福祉法人 草加福祉会	花 城 久 子
社会福祉法人 草加福祉会	大 坪 太 一	社会福祉法人 白山福祉会	十 文 字 良
社会福祉法人 大和会	野 際 雄 一	社会福祉法人 大和会	鈴 木 睦
社会福祉法人 大和会	八 木 澤 泰 仁	社会福祉法人 大和会	中 村 慶 子
社会福祉法人 大和会	野 際 雄 一	株式会社 日本ライフデザイン	宍 倉 健 一
社会福祉法人 カメリア会	守 屋 淳 子	株式会社 日本ライフデザイン	淡 路 拓 也
株式会社 スマイルパートナーズ	大 平 隆 史	医療法人財団 百葉の会	萩 原 大 介
医療法人社団 藤友五幸会	梅 村 典 義	社会福祉法人 湖成会	齊 藤 雄 介
社会福祉法人 湖成会	萩 野 伸 子	医療法人 北辰会 みらいあグループ	青 山 博 昭
医療法人社団 日翔会	佐々木 真 由 美	社会福祉法人 日翔会	今 倉 慎 吾
医療法人社団 ひがしの会	神 原 良 治	医療法人社団/社会福祉法人 水澄み会	秀 浦 松 子
医療法人社団/社会福祉法人 水澄み会	永 見 美 恵		

《チームケア学会》

(代表理事) 小 松 順 子 (理事) 小 笠 原 泰 原 田 和 美 太 田 恵 美 佐 藤 信 一

《運営事務局》

NPO 法人ヘルスケア・デザイン・ネットワーク 福 原 正 徳 平 井 慶 太 石 川 綾 乃 大 倉 知 子